4a
292
昭15

島根縣地理

郎太熊本山 諭教校學範師子女縣根島
美 信 森 諭教校學中田濱縣根島
共 著

株式會社
東京帝國書院 発行

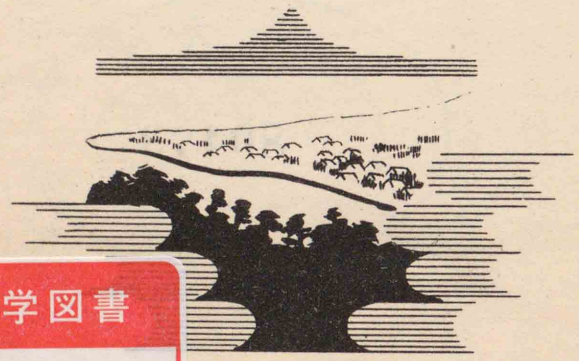
43401
教科書文庫
4
291
41-1928
20000
80473

中央図書館
資料室

教科書文庫
4
291
41-1928
2000080473

島根縣地理

島根縣女子師範學校教諭 山本熊太郎
島根縣濱田中學校教諭 森 信 美
共著



広島大学図書
2000080473

東京 帝國書院
発行 株式會社

4a
292
BB15

序言

鄉土に生れ、鄉土に生活し、鄉土に學ぶ者が、鄉土の自然景觀、並に人文景觀に、如何に觸發され、如何に啓示されてゐるかを、明瞭にしたる本書の出現は、七十萬縣民の爲め欣快に堪へないのである。

殊に、著者は、本縣の如き斯學の文獻尠き中に、其の抱ける新進の考察に苦慮する事多年、遂に深刻明快なる所論に達したるは獨り縣民の利益のみに止まらず、又斯の種地方研究の嚆矢として、推稱するに憚らないものがある。

予は、予と鄉里を等しうする親愛なる縣下青少年諸君が、斯の種の健全なる讀物を徹して、縣勢を達觀するの識見を得られむ

広島大学 教 80473 図書

事を望む。敢て序言となす。

昭和戊辰春

正四位勳二等衆議院議員　俵　孫一

自序

一、本書は、我が郷土――島根縣――を材料にとつて、如何に現代地理學が、これを解剖し吟味し愛好するかを、世人に訴へんが爲めに、生れ出たものである。

一、我々は、自然地理にまれ、人文地理にまれ、機會ある毎に、郷土の自然、郷土の人文に生きた實例を求めたい。本書は此の重大な使命に、遺憾なく參與するつもりである。

一、郷土地理を閑却し、之れを無趣味に扱ふは、適當な文献がない爲めである。本書の記載はつとめて之を端的に、且つ説明は極めて之を明快にした。

一、書中の各グラフは、筆者の苦心の存するもの少くない。讀者は之れに因り直截的に地人相關の理法を會得せられるであらう。

一、從つて本書は、縣下小學校に於ける地理教授參考用とし適切であるのみならず、中等學校生徒諸君の地理教科書副讀本ともなる。且又縣下一般の好學の士に對しても健全な讀本である。

一、本書によつて、日本地理に附帶する郷土地理のみではなく、地理學通論の學習に

一、あたりても、生きた實例を求められたい。

一、本書を扱はれる敎授者は、頁を逐うて、長時間を鄕土地理に割かるる事なく、生徒諸君に注意を喚起せしめて、自學自習の方便をとられんことを望む。

一、本書の完成にあたり、縣當局、各管轄諸官衙、各學校及市町村長等の、直接間接の御便宜に對し、厚く感謝する次第である。

一、本書の出版について、發行者帝國書院が、打算を賭して、地方文献に盡力された事を、讀者と共に感謝したい。

一、本書の內容については、尙ほ幾多識者の御批正を乞ふ次第である。

昭和三年一月二十八日

著者

本書の參考文献其の他

體裁……靜岡縣地理、秋田縣自然地理、大阪府地理、岡山縣地理、福岡縣地理書

材料……島根縣史、島根縣舊藩、島根縣誌、島根縣傳說集、島根縣農業敎科書、島根縣水產敎科書、島根縣の畜產、石見潟、出雲風土記、島根縣商工案內、震災豫防調査會報告書、濱田測候所年報及月報、島根縣水產試驗所報告書、島根縣の產業、島根縣農會報、大日本地誌、神鐵管內主要荷物年報、門鐵管內主要荷物年報、山陰線々路略圖及設計書、著者の新聞累年切拔帳

雜誌……地理學評論……辻村氏の地形的諸論文、田中氏の人文的論文。地球……地質的論文。地理敎材輯錄……西田氏の人文的諸論文及野津氏稅氏の論文、森及び山本の論文、人文地理

統計……島根縣統計書第一篇土地及其の他、第三篇勸業、第四篇警察統計、各大正十四年末內閣統計年鑑、各市町村勢一覽表、女師生徒の自村統計

地圖……五萬分、二萬分、二十萬分島根縣管內の各地形圖幅、四十萬分帝國地質圖二百萬分帝國地質圖、各種島根縣地圖、各種市街地圖、港灣地圖、海圖數種、

照會……各官衙及市町村の所屬事項は、直接の返信に依るもの可なり多し。

作圖……二三他氏のものを採錄せる外は、全部著者の原圖を縮字挿入す。
寫眞……繪葉書等他のものを複製挿入せしもの多く、著者の原板少し。
數字……統計的數字は概して最新の大正十四年のものを採る。中に著者のカーヴメーター・プラニメーター等に依り計出せるものあり。
踏査……及訪問の充分ならざる所多きは遺憾なり。

以上を記して各方面への感謝に代へる次第である。

島根縣地理

目次

第一編　總說

一、沿革……一
二、區分……五
三、景觀……七

第二編　自然地理

一、位置……一一
二、絕對面積……一三
三、生產面積……一三
四、地形構造……一六
概觀……一六
地質……一七
構造……二〇
肢節——山脈……二二
肢節——火山脈附溫泉……二七
肢節——海岸……二三
河川・平野……二九
尖道地溝帶……五一
五、氣候……五三
氣溫……五四
雨量……五五
氣候と生業……五八

第三編　人文地理

一、人口……五九
二、產業……六三
概觀……六三
農業……六六
工業……七二
鑛業……七九
林業……八二
水產業……八五
牧畜業……九三

目次

鑛業……九九
商業……一〇三
三、交通……一〇七
道路……一〇八
鐵道……一一四
航通……一一三
通信……一一八
四、聚落……一二九
部落……一二九
都市……一三五
松江市……一三七
玉造溫泉……一四一
美保關町……一四三
廣瀨町……一四四
安來町……一四五
大東町……一四六
木次町……一四六
三刀屋村……一四七
横田村……一四七
掛合村……一四七
宍道町……一四八
今市町……一四八
平田町……一四九
大社町……一五〇
大田町……一五二
大森町……一五三
溫泉津町……一五四
川本町……一五四
口羽村……一五五
江津町……一五六
都野津町……一五八
有福溫泉……一五八
出嶽地帶……一六〇
濱田町……一六一
三隅町……一六八
益田町……一六八
高津町……一六九
津和野町……一七〇
六日市村……一七三
西郷町……一七三

島根縣地理

第一編　總說

一　沿革

島根縣の名は暫く措き、一度歷史を繙く時、誰か出雲朝廷の燦然たる古代文化を謳歌せぬ者があらうか。實に本縣は須佐之男命の所謂「八雲立つ雲」の出雲(伊豆毛)と、歌聖人麿を生んだ石見國(石群(いわむら)に因める)と、神話「白兎」に由緒をもつ隱岐國(億伎洲)の三國から成立する。

既に出雲は先史時代の古國であり、位置・地味等に惠まれた我等の先住民が、こに如何に多く繁榮したか、次頁の古墳群の圖は、明らかに當時の人口稠密の樣を偲ばしめるであらう。

然るに、天孫の命に依つて大國主命は、其の苦心經營せる出雲の國土を皇孫に捧げて、美談を殘し、與りて功のあつた天穗日命が、實に最初の出雲國造であつた。

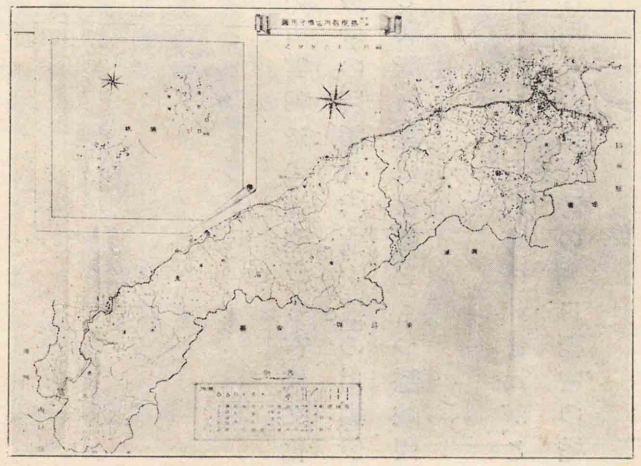
國土奉獻に延いて、神功皇后征韓後、日・鮮の交通が筑紫灘・瀨戸内を選ぶに至り、出雲は遂に政治的にも、經濟的にも完全に、繁榮圏外に措かるゝ事となつた。

王朝時代國府の跡は、出雲(八束郡出雲郷村)・石見(那賀郡下府村)・隱岐(島後磯村)ともに、遺趾を存し、當時からの郡名は、今日も尙多く殘つてゐる。

【圖解】島根縣古墳

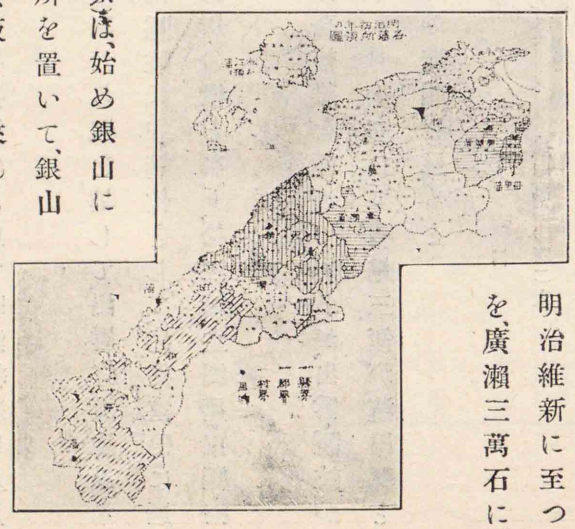
出雲は意宇・島根・秋鹿・楯縫・出雲・神門・飯石・仁多・大原の九郡で、明治十八年町村制實施の際意宇郡を分ちて能義郡とし、明治廿九年意宇・島根・秋鹿の三郡を併せて八束郡とし、出雲・神門・楯縫の三郡を併せて簸川郡となし、今日の六郡となつた。

石見國は安濃・邇摩・邑智・那賀・美濃の五郡であつたが、承和十年美濃郡を分ちて鹿足郡をおかして六郡となし、今日に及んで居る。



封建時代に於ける出雲の守護は、佐々木義清の一族、延いて尼子氏の全盛三代に盡き、毛利氏を經て德川の家臣、堀尾吉晴富田城に居し、子忠晴、松江千鳥城に據つたが、統三代にして絕え、京極忠高を經て、寛永十五年松平直政、松江廿三萬五千石に封ぜらるゝに及びて、殷盛二百年、遂にて居る。但直政の子綱隆は、其の二弟近榮・隆政を、母里一萬石に、各支藩として分封せしめて居た。石見國に於いては、守護に佐々木定綱・藤原國兼・大内義弘等あり。豪族此の間に比肩して、互に盛衰があつたが、大内義隆の併呑、毛利元就の平定相踵ぎ行はれ、遂に德川時代に及んで、幕領・濱田藩・津和野藩の三に分れ、幕領(三萬石余、天領とも言ふ)は、始め銀山に奉行、彦坂・大久保等を配し、後に大森に代官所を置いて、銀山を經營せしめた。濱田藩は、元和五年伊勢松阪より來れる古田重治、始めて濱田龜山城(五萬石、もと鴨山城)を築きたるも子なく、松平(播磨・本多(下總)・松平(三河)氏等、各數世を經て、最後に天保七年上野館林より松平齊厚來り、

【圖解】明治元年始の藩領



これ亦數世にして慶應二年美作鶴田へ移つたのである。

津和野藩(四萬三千石)三本松城は、明德二年吉見政親の築城に依る。慶長年間阪崎成正を經て、元和五年龜井政矩繼ぎて、其の子孫繁榮し、以て明治維新に及んで居る。

隱岐國に於ける鎌倉時代後は、出雲の附庸國たる觀を呈して、出雲守護佐々木定綱以來、此の國を兼轄して居る。室町時代隱岐氏守護代として、島後宮田に居たが、久しからずして、尼子氏の支配を經て、德川の世となり、松江城主堀尾・京極・松平各氏に兼管せられて明治維新となつた。

維新々政の過渡期に於いては、廢藩置縣分合複雜を極めて居るが、出雲・隱岐が最初の島根縣と稱せられたのは、明治四年十一月十五日で、石見三領が濱田縣と號されたのが、同四年十一月十五日で、各當時の狀態を見ると

	石高	戶數	人口
出雲隱岐	二八萬石	七萬七四九八戶	三四萬〇〇四二人
石見國	一八萬石	六萬六六二六戶	二五萬九六一一人

で、當時の人口併せて約六十萬人で、今日は七十四萬五千人に增加してゐる。

分合の經緯は左の通りで、事實上、今日の行政區域の島根縣が成立したのは、明治十四年九月十二日である。

	明治元年ノ狀態	同二年	同三年	同四年	同九年	同一四年
出雲領	松江・廣瀨・母里藩	同	上	同	上	島根縣
隱岐領	鳥取藩	隱岐縣				鳥取縣
濱田領	山口藩	大森縣	濱田縣		濱田縣	島根縣
銀山領						島根縣
津和野領	津和野藩	同	上	同	上	出雲隱岐
					濱田縣	伯耆
						因幡
						石見
						島根縣
						出雲隱岐

二 區分

かゝる沿革を有する本縣の行政現在區劃は、一市・一島・十二郡・二十三町・二百五十九ヶ村に分れてゐる。

出雲

- 八東郡 三四村
- 能義郡 一一四村
- 仁多郡 一一〇村
- 大原郡 一一七村
- 飯石郡 四三村
- 簸川郡

美保關町 廣瀨町 宍道町 安來町 大東町 木次町 三刀屋町 平田町 今市町 大社町 加茂町

石見

- 安濃郡
- 邇摩郡 一九八村
- 邑智郡 二九村
- 那賀郡 三四村

大田町 大森町 川本町 濱田町 温泉津町 江津町 都野津町 三隅町

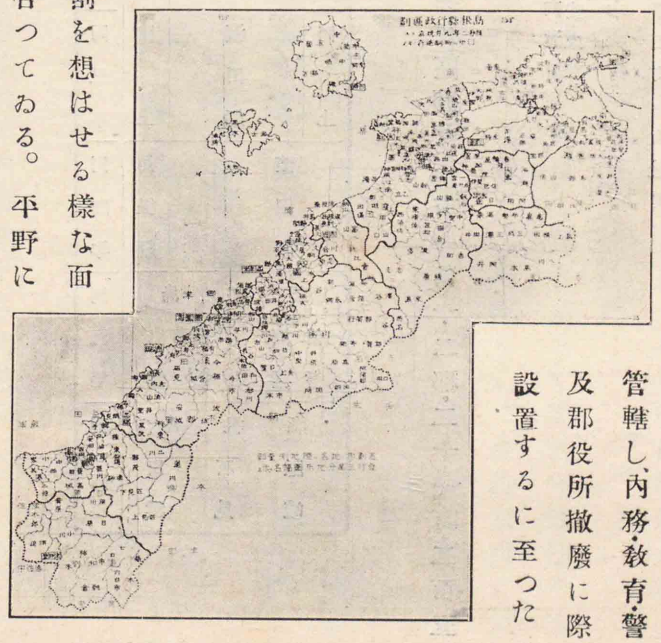
（美濃郡　一九村
鹿足郡　一一村）　益田町　津和野町　西郷町　高津町

隱岐……一一村　西郷町

縣廳は、松江市殿町に在りて之を察の三部に分掌し、大正十五年郡制し、隱岐一圓は、隱岐支廳を西郷町に尙日本海の孤島竹島も、支廳の管轄に屬する。

【圖解】島根縣行政區劃圖

郡村界は、中國山脈の支・分脈に依つて界せられ、奥地の生產薄き地方は、大分劃に、沿海の多生產地方は、小分劃されてゐる。邇摩、隱岐の火山溪谷に適應する輻射狀配列の町村界を見る外は、一般に準平原面の地割を想はせる樣な面積に、大差のない塊狀型配列で隣り合つてゐる。平野に富む簸川郡其の他に、極めて小分劃を呈する所を認めるけれども、水田分布圖に



管轄し、內務・敎育・警及郡役所撤廢に際設置するに至つた。

【圖解】島根縣水田分布圖

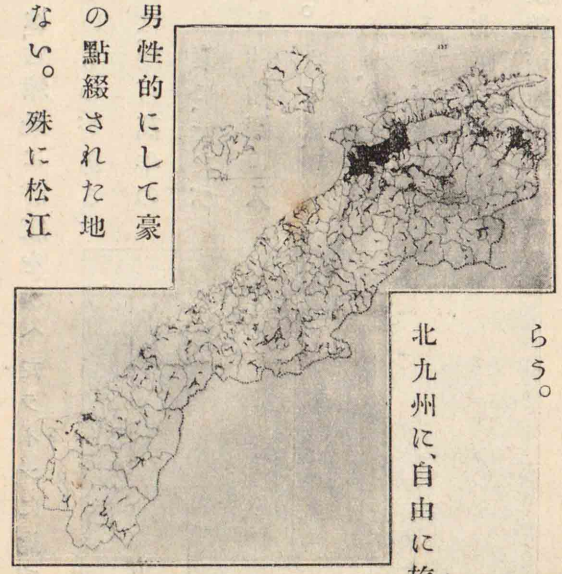
徵すれば、其の實力は、大分劃の町村を凌駕するに足る。

分劃の特色は、恰も千切れ〳〵の水田を抱いた中國獨自の景觀を呈してゐるけれども、交通の發達と文化の促進に依而、地力薄弱、而も經濟的協調の接近するものから、漸次町村併合が實現するであらう。

三　景觀

山陰線が本縣を全通して、京阪若くは行の出來る樣になつたのは、暫く大正十二年で、我等の鄕土は、餘りに世間へ知られて居ない。

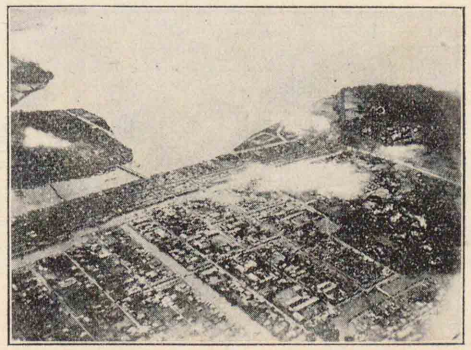
京阪から山陰へ乘り入れる旅客の景觀で、山姿の女性的な親しみと、日本海の男性的にして豪快な海岸美とは、そこに特有な赤瓦屋根の點綴された地方色によつて、決して單調を感ずる事がない。殊に松江は、宍道湖・中海の水鄕に配するに、遠く大山・三瓶の秀麗を望み、近く嫁ヶ島の淸楚を汲む風光明媚さは、瑞西のジュネーヴと謳はれてゐる。石見潟は夏凉を納る



北九州に、自由に旅

べく、北浦海岸は奇勝絶佳な海岸美を趁ふべく、さては涯知らぬ日本海に浮べる史味豊かな隠岐島等、すべては我等鄕黨の誇るに足る風光ではないか。加ふるに神話に富める斐伊川や、蘭ノ長濱、さては、古城趾に靜寂を湛へたラインに比すべき江川の巨流など、低徊去るに忍びないものがある。

思ふにこれ等山河の姿態特有な地貌は、幾百萬年の地質年代を經たものであつた。中生代末葉に、一たび準平原化された中國は、今や第二の地理學的輪廻に入り、而も壯年谷の狀貌に彫刻されてゐる。さては、現在特有な所々の平頂峰は、準平原の殘りであり、もし其の浸蝕谷を充塡すれば、元の臺地を回想する事が出來るのである。氣候も山陰に入りてよりは、北陸型の降雪も少く、氣溫は縣の中央部に平均十五度線が通過する。從つて出雲人は重厚で、石見人は快活で、言語も亦前者は鈍重丁寧で、發音澁く、後者は明晰だけれども粗野である。



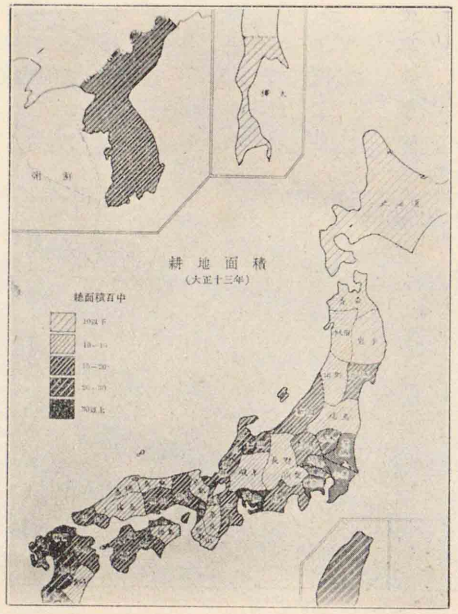
【圖解】飛行機上より見たる松江市橋北

既に壯年期に削磨された自然的景觀であるから、耕地の面積は、全面積の一割

四分に過ぎない。而も人口は一方糸百十八の密度に達し、我國臺灣ほどの値であるが、彼地は三割の耕地を有してゐる。かるが故に、本縣一人に對する反別は、田七畝弱、畑三畝强と言ふ慘めさである。勿論我國內地耕地面積一割五分、人口密度百五十七人と言ふ現勢が、既に行き詰つた狀態であるから、本縣ばかり難局に立つ譯ではない。

然し乍ら、本縣は出雲朝廷時代の農業本位が踏襲され、農業者は、全人口の六十六%に當り、其の戸數百分比は、自作農二十八%、小作農二十八%、兩者兼農四十四%で、上記全國の平均に劣つてゐるけれども、本縣の生產高中農產物は、其の首位を占めてゐるから、今日も尙農業國より一歩も出ない狀態である。

農業者六十六%の殘りは工鑛業者十四%、商業者八%、水產業者二%といふ狀態であるから、是亦特筆すべき生產を擧げる事が出來ない。



【圖解】我國耕地面圖

內地に於ける農家百分比
自作 三二・一九%
小作 二七・六七%
自・小 四一・一三%

たゞ、地目の利用上、生絲・木炭・鮮魚・生牛等に餘剰があるに過ぎず、實に殖産興業の前途は、縣民の努力に俟つばかりでなく、軈ては、地産に比して人口過剰・食料不足の秋を豫想して、海外雄飛の勇猛心を必要とする。

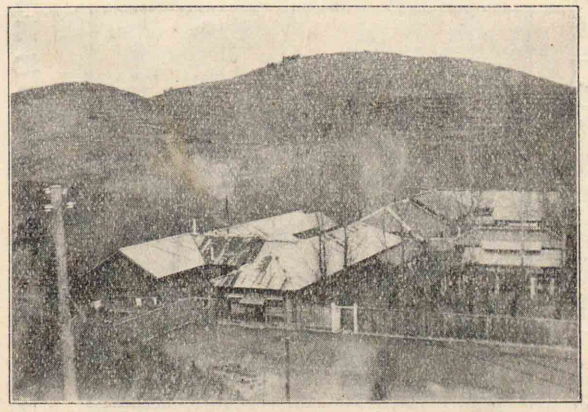
本縣の歳出　は大正元年度百萬圓臺であつたが、同七年度より急激に膨張して、大正十二年度は未曾有の五百萬圓に達し、昭和二年は四百五十萬圓臺となつてゐる。

歳入のうち地租附加税・家屋税・雜種税は縣歳入の半以上となり、一人當り縣民の負擔は昭和二年に於いて四・六四圓となり、大正十四年の最高四・八二圓より稍々減少してゐる。

本縣の宗教　出雲は神道・禪宗多く、石見は專ら眞宗が多い。之等を表示すれば

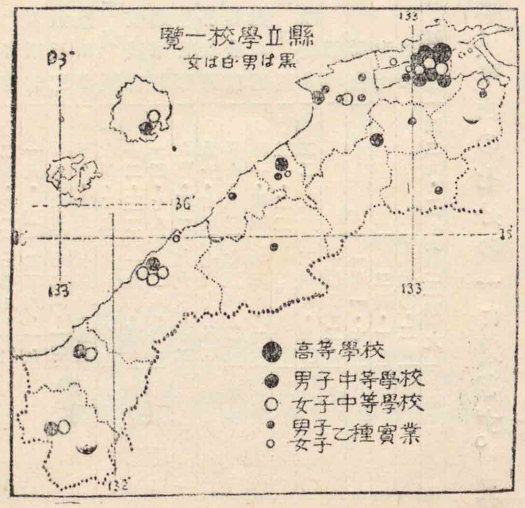
天臺宗……三〇寺　臨濟宗……一六九寺
日蓮宗……八九寺　眞言宗……一六一寺
曹洞宗……三四五寺　神道……一二二社
眞宗……五一〇寺　淨土宗……一三四寺
基督教……一〇教會

【圖解】丘陵耕地の例



本縣の教育　松江は其の中樞にして、高等學校を始め綜合的に男女及各種の中等學校完備し、濱田は女子の中等學校多く、乙種の實業學校は各所に分散配置されてゐる。

【圖解】縣立學校分布圖



第二編　自然地理

一　位置

我が島根縣は中國地方の西部に位し、且つ山陰道の西端を占む。四隅は鳥取・廣島・山口の三縣及日本海西部に臨んでゐる。

自然上の位置は左の通りである。

極東……東經一三三度二三分　隱岐島布施村加尼島東端
極西……東經一三一度四〇分　鹿足郡木部村大字吹野西端
極北……北緯三七度一〇分　竹島ノ北端
極南……北緯三四度一八分　鹿足郡柿木村大字樺谷南端

時間的の位置は縣廳の所在地松江を中心として左の樣になり、我が國繁榮地帶から可なり遠ざかつてをり、朝鮮へも關釜間の方が近く、本縣からは稍々遠い。

縣下南方背後地へは鐵路開けず、不便な位置に在る。

松江・京都・東京間……五四二・八哩　二一時間行程
松江・京都間……二一九・七哩　一一　同
松江・大阪間……二三四・三哩　一二　同
松江・小郡・下關間……二〇二・九哩　一一　同
濱田港・釜山港間……一五〇浬　關・釜間八一二二浬

本縣は地域北東に長く、列車行程約七時間に亙るから、縣下の中心は凡そ溫泉津附近となる。

安來驛溫泉津驛間　六六・一哩　三時二九分行程
津和野驛溫泉津驛間　六七・一哩　三時二一分行程

二　絶對面積

出雲・石見は山陰の北斜面なれば、出雲を頭部とせる蠶兒の這へるが如く、地域北東に擴り、南北は甚だ狹く、其の最狹部の距離は、東西の七分の一に過ぎず。又隱岐は北方三十乃至四十浬距たり、五―七時間讓歩の地歩を占む。

島根縣各郡市別面積比較表
大正一四年度島根縣統計書

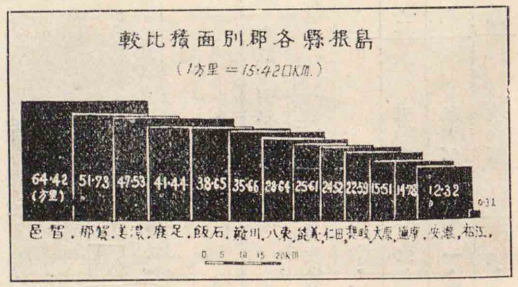
市郡	面積 平方里	面積 平方粁	順位
松江市	〇・三一	四・七四	
八束郡	二八・六四	四四一・七〇	七
能義郡	二五・六一	三九四・九八	八
仁多郡	二四・五二	三七八・一二	九
大原郡	一五・五一	二三九・一九	一一
飯石郡	三八・六五	五九六・一三	五
簸川郡	三五・六六	五五〇・〇二	六
出雲國	一七四・二九		
安濃郡	一二・三二	一九〇・〇六	一三
邇摩郡	一四・七八	二二八・〇一	一二
邑智郡	六四・四二	九九三・五二	
那賀郡	五一・七三	七九七・八四	一
美濃郡	四七・五二	七三三・〇五	二
鹿足郡	四一・四四	六三九・一六	三
石見國	二三二・二二		四
隱岐島	二二・五九	三四八・四〇	
隱地		一〇二・二六	一〇
周吉		一四一・七三	
海士		三四・一八	
知夫		七〇・二四	
島根縣	四二九・一〇	六五三四・九一	

東西……（能義郡島田村ヨリ鹿足郡畑迫村間）一八五粁（約四七里）
南北……（那賀郡江津町ヨリ同郡波佐村間）二五粁（約六里）

本縣の面積は六千五百三十五平方粁で、我が國内地の千分の十七を占め、各府縣中の第十九位、中國五縣中廣島・岡山に次ぐ第三位に在るから、大體我が國の中位以上に在る。

縣下各郡市別の面積は、前表及其の比較圖の通り、邑智郡を最大、松江市を最小とし、一般に石見の四郡だけで、縣下約半分の地積を占めてゐる。

【圖解】郡別面積比較圖



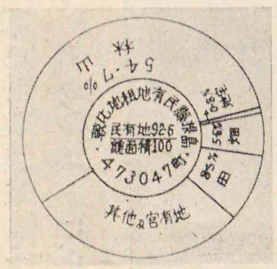
三　生産面積

本縣の絶對面積は、前述の如く、必ずしも尠くないが、生産面積―田・畑・山林―は甚だ貧弱である。

即ち、本縣の耕地(田畑)は、十四％に過ぎないから、内地の平均より低い。内地の生産面積は上の通りである。

されば、各郡別の生産面積、特に水田の分布を見るに、石

【圖解】生産面積比較圖民有地は總面積の九二・六％に當る



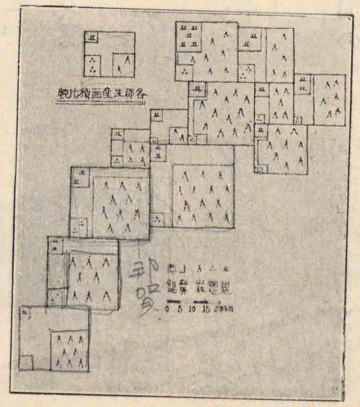
見　貧弱で、出雲に於いて稍々廣い。從つて、簸川・八束・那賀・能義・邑智・美濃・飯石・大原・仁多等の順位で、絶對面積の順位とは、勿論一致してゐない。そのかはりに、山林は、略〻絶對面積に一致し、縣下大部分を蔽うて居る事となる。畑の分布は隱岐・那賀・八束・簸川・美濃・邑智・鹿足・邇摩等の順位で、比較的隱岐・石見に於いて稍〻廣い。特に隱岐の畑は、全面積の十五%に達し、縣下第一位である。

通じて、簸川・八束・那賀・能義・邑智・美濃等は、他の郡より耕地多く、實力からも優れてゐる事となる。

内地總面積ニ對スル生産面積表

田…七・七%
畑…七・一%
宅地
山林…一・〇%
二二・〇%

【圖解一】郡別生産面積比較圖



島根縣管内生産面積表

市郡	田（方粁）	全面積ニ對スル百分率	畑（方粁）	全面積ニ對スル百分率	山林（方粁）	全面積ニ對スル百分率	原野並牧場	全面積ニ對スル百分率
松江市	〇・六	—	〇・六		〇・二		〇・一	
八束郡	七六・三	一七%	四七・五	一一%	二二一・二	五〇%	二・〇	
能義郡	五二・一	一三%	一〇・〇	三%	二五四・〇	五六%	一・一	
仁多郡	二六・七	七%	七・四	二%	三二五・一	八六%	一・〇	

島根縣統計書　大正十四年一月

大原郡	三〇・七	一三%	一五・一	六%	一三三・七	五六%	〇・五	
飯石郡	三八・七	七%	一四・二	二%	五二七・五	二二%	一・四	
簸川郡	一一六・五	三〇%	四〇・二	七%	二五〇・〇	四五%	一・二	
出雲國								
安濃郡	二一・六	一一%	九・四	五%	九五・二	五一%	〇・五	
邇摩郡	二一・九	九%	二二・九	一〇%	一〇四・八	四六%	〇・六	
邑智郡	四九・〇	五%	三六・〇	四%	五四一・九	五五%	二・四	
那賀郡	五六・六	七%	五〇・二	六%	四八〇・九	六八%	一・八	
美濃郡	三九・八	五%	三七・四	六%	四三五・四	六〇%	一・五	
鹿足郡	二三・五	六%	二七・五	四%	二一二・一	三三%	一・六	
石見國								
隱岐島	一五・九	五%	五一・八	一五%	六九・六	一九%	〇・二	
穩地								
周吉								
海士								
知夫								
島根縣	五六六・五	八・五%	三七〇・八	五・六%	三六五二・三	五四・七	一六・二	

四　地形構造

概觀　中國山脈は、本縣と廣島縣との境に於いて主軸をなし、略々東北より西南に走り、大部分は、陰陽の分水嶺をなして居る。而も、主軸は、中國の北に偏して縱走するから、山陰をして著しく狹長ならしめてゐる。卽ち、本縣の幅は、廣島縣の四に對し一の比例で急傾斜するから、分水嶺も本縣から見て初めて雄大壯偉の感を起すのみならず、延いては、南方への交通を、甚だ阻碍するのである。

中國地帶の特色は、一大花崗岩の露出と、それが一たび老年期の浸蝕を受け、今や第二輪廻の壯年浸蝕特有な地貌を呈する事とである。本縣も西部少許の地と、宍道湖以北を除く大部分が花崗岩地帶で、嘗つては、準平原であつたものが、今や主軸に沿うて開析され、幾多の支脈と浸蝕谷とが錯綜してゐる。

而も、內帶火山脈の系統に屬する諸火山は、主軸に平行して其の北部を東西に走り、三瓶・靑野等の圓頂火山（トロイデ）を數多噴出して、地形は一層複雜を極め、其の間平野の餘地なき狀態に在る。

然るに、宍道山脈と本陸との間に一の陷落地帶があつて、簸川平野・宍道湖・中海を抱いてゐる所謂宍道地溝帶に沿うて、本縣唯一の平野を伴ふ。日本海に

面する海岸線は、五百粁以上に及んでゐるが、宍道山脈が急斜する斷崖ならざるを以て溺れたリアス式海岸を呈し、爾餘の出雲・石見の海岸に至りては、岩石・砂濱交々の晩幼年期にある。隱岐の島後・島前（三島）の海岸も、同樣絕壁をなせる所多く、良港としては、濱田・西鄕を有するに過ぎぬ。

河流の長大なものは、地帶構造を先天的に橫斷して、本縣の中央を日本海に注ぐ江川が水量豐かに、然し下刻した峽谷を形成してゐる外は、出雲の斐伊・神戸兩河の如く、流程花崗岩地帶の爲め、夥しい流下砂泥を下流に堆積して、天床河の特性を有し、汎濫の恐慌を有するものと、此れに反し、石見の高津川に至りては、山陰には珍らしい段丘性の汎濫原を呈して居るもの等がある。河流は一般に東北の地帶構造を北西流する橫河が多く、大部分平行し乍ら原傾に沿うて急流するものが多い。

地質　中國地方は、本邦地質構造上の內帶に屬してゐる。卽ち中國山脈は、太古代末葉から生成された千枚岩質の偉大なるアルプ式褶曲山體を、山陰・山陽四國に亙つて蟠居せるもので、中生代末、遂に之を洗ひ去り、低卑なる準平原迄に削剝された爲め、深造岩たる花崗岩、若くは古噴出岩たる石英斑岩が、到る所曝

歳層が残てゐる。
胴体に脈
残雲に歳層が
残てゐる。
初めは水成岩であた
大変陰蝕された山

露され、古期の水成岩は、隱岐島後及石西に少許の分布を見るのみであるから、今日の中國山脈は、全く浸蝕山脈に外ならないのである。

斯かる準平原が、第三紀前葉に於いて、平均四百五十米突宛徐々に隆起が行れて、勾配を得た爲めに、爾後中國は、第二輪廻の過程に入り、再び浸蝕削平が旺盛となつて、今や壯年期を迎へて居るのである。從而今日分水嶺に嶮起する山峰は、皆抵抗强き頑硬なる山核が殘丘（モナドノック）として存在するのである。

これ等の削剝によつて露出せる、花崗岩の分布を見るに、本縣では雲南地方に擴がりて、中に砂鐵を含みて、石西へ帶狀に露出されて居り、脈岩の石英斑岩も亦、其の南北緣を帶狀に充たし、石西に發達してゐる。高距は分水嶺に於いて、千米突以上に達し、次第に前地に低く、波狀の高原性を帶びてゐる。

此の前地は、五百米突内外の新噴出岩（第三紀）たる、石英粗面岩で充され、發達は、出雲に尠く、邑智郡に最大で西進する。又隱岐の島後西半全部に亙る。此の石英粗面岩地帶は本縣の鑛床をなす。

更に、此の前脚は、丘陵性の新第三紀水成岩地帶に癒合する。かゝる火成岩地帶に、獨り江川以西に分布する古生層（御荷鉾層）とて凝灰岩・砂岩・粘板岩等は、

【圖解】地質斷面圖と地形斷面圖とを對照すべし

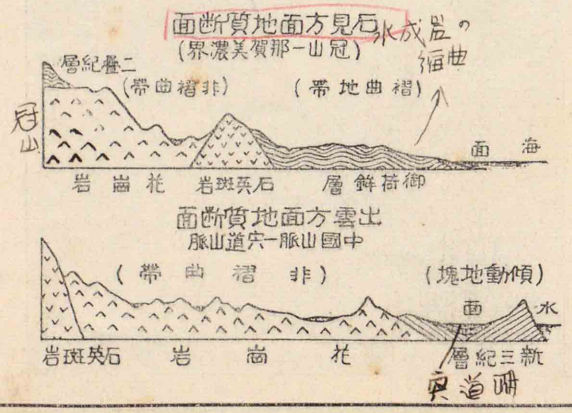
石英斑岩に接觸して、美濃郡に多く、鹿足郡の古生層は、前者より若き石炭系或は二疊系に屬する。

第三期末の一大地變は、瀨戸内海の陷沒、朝鮮への陸橋沈下等ありて、中國は一般に、百米の撓曲を來たし、前後五百五十米突の高距に累加してからは、今日に至る迄、大なる變動は起らなかつた。

本縣は、之等の隆起によつて、島根半島が新三紀層として海を拔け出てゐるが、當時は、本陸との間に海峽を抱いて居たもので、沖積期に簸川平野で繫がれ、今日出雲の幅を大ならしめてゐる。

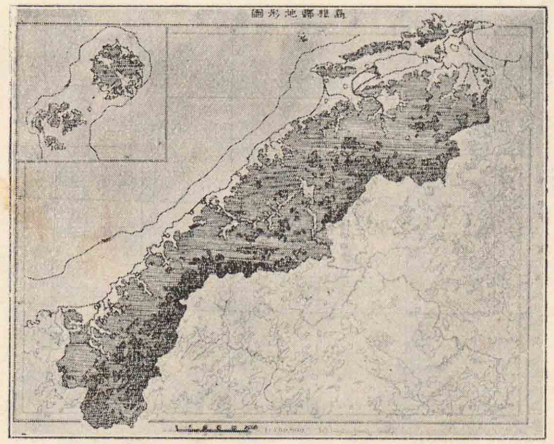
尙新三紀層は、大江高山隆起地帶緣邊、高津・益田兩河の下流に發達し、一般に、凝灰・砂岩・頁岩等の軟岩から成る丘陵性である。本縣では、此の區域が可耕地で、多くの人口を收容してゐる部分である。

△洪積層の發達せざることは、中國が既に陸上時代なりし事を物語るもので



本地方の地質的一特色である。けれども宍道地溝帶の南北緣邊及本縣沿海第三紀層の地先に極めて少許の分布を見るを得べく、通常塵母・粘土・砂礫等の成層をなして、丘阜地を呈してゐる。もし本地方が洪積期を海中に經過したならば、多少の低地を沿海に殘したであらうものを、地質に於いても本縣は惠まれぬ狀態に在る。從而沖積層も亦、地溝帶と埋積した斐伊・神戸・伯大・飯梨川の下流及石見に於いて、高津川下流に見るのみである。

【圖解】地形圖



構造　準平原開析の方向を見るに、勿論原傾斜に沿うて、南北方向の浸蝕谷を見ないではないが、著しい特相は、地帶に平行な、東西方向の谷型を呈する事である。從而河川の流路は、原傾河（コンセクエント）の本流へ、直角河（サブセクエント）の支流一對が注ぐ毎に梨棚式河型となる。又盆地は、殆ど支流の合流點に決定されてゐる樣に見える。此等の模式的な型式（タイプ）は、吉賀川の一例でも首肯出來得ると思ふ。

これ等の谷型及盆地列が、他と隣り合つて、石見では東北に、出雲では東西に顯著な二條乃至三條の系統を呈する事は、明かに階級斷層の斷層角盆地の配置でなくてはならぬのである。

かゝる構造線で、追跡の容易なものを擧げると、左の如きものがある。

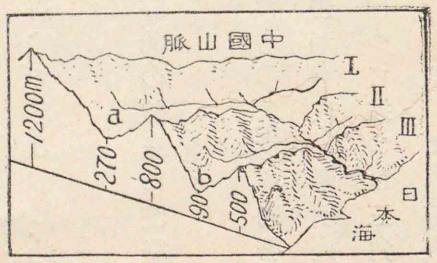
【圖解】構造的地塊圖　梨棚式河型に注意せよ。

新庄・加計・廣瀨線……延長七〇粁……大體花崗岩と石英斑岩若くは古生層との接觸界

波佐・匹見・柿木線……延長四〇粁……花崗岩と石英斑岩の接觸界

津和野・都茂・雲城線……山口・德佐から延長せるもの。大體石英斑岩と古生層との接觸界

橫田盆地・大東盆地・宍道地溝帶……前後の追跡困難であるが之は寧ろ陷沒地帶と見る方妥當であらう。



されば、圖中(1)(2)(3)を、本縣に於ける各地塊とするならば、(1)の高距は千二百米突、(2)の高距は八百米突、(3)の地塊は五百米突を有し、A及Bは、斷層谷に相當する狀貌で、日本海に急斜してゐる原則的なタイプと見る事が出來る。更に

之を石見に適應して考察する時は、全く符合するのである。

即ち、今日の分水嶺が、過去準平原時代の殘丘とは言へ、尙千米突以上の高距を有する事は、多少の地塊運動なしには考へられないので、圖中(2)斷層に際して、(1)即ち分水嶺は、撓曲運動に依而高度を得たものに違ひないと思ふ。而も、分水嶺は、今日斷層の追跡顯著な部分の背後に於いてのみ高峻である事は、此の間の消息を物語つてゐるのである。

從而盆地列は、ＡＢの構造線上に配列され、河川の支流も亦、此の線上に流路をとるから、多少の沖積層を山間に配置してゐる譯である。

(2)と(3)との地塊の界線にあたりて、顯著な起伏を齎らしたものは、我國內帶火山脈で、鳥取縣の大山以西本縣に亙つて、酸性質の粘稠熔岩から成る圓頂火山（トロイデ）を噴起した事である。特に神門川と江川との日本海に向つて挾さむ三角地域は、三瓶及大江高山火山群の蟠居する本縣の火山地域である。これ等火山の噴出は、陷落地帶若くは斷層線の弱點に生じたもので、三瓶は前者、青野は後者に當る。

肢節——山脈　後次的の中國山脈は、外力に依而削磨された浸蝕山脈であるが、尙

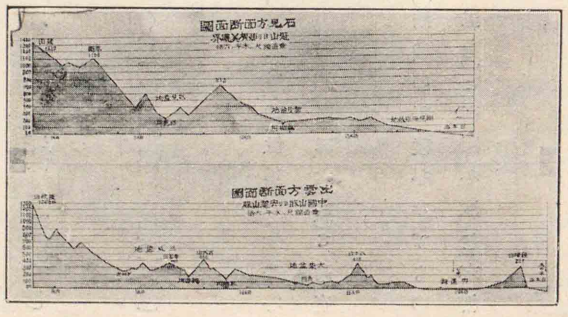
中国山脈
外力によるもの
山が出来た
浸蝕山脈

【圖解】地形斷面圖

前說の如く斷層をも伴ふたものである。宍道山脈に至りて第三紀層の褶曲山脈である。

中國山脈の主軸は、丹波より西走し來りて本縣界を走り、高峰の走路は、傾いたＳ字形を描いて雲南から石西へ連亙するから、出雲裏石見裏を二つに隘らせてゐる。

出雲裏には、烏帽子・阿圖馬・猿政・毛無・大萬木（よろぎ）の千二百米突以上の五峰を東西に並列し、石見裏では、阿佐・安藏寺・寂地の三峰寧ろ南北に坐し、これ亦、千二百米突以上の高峰である。之等は多く石英斑岩の山體——但阿佐山頂は閃綠岩——であるが、寂地山（冠山）のみは、古生層を山體に殘してゐるだけ高く、標高一三三九米突で、實に本縣の最高峰である。



然るにＳ字の中央部、即ち江川の先行する橫谷の區域では、三國山を始め八百米突臺で、山勢其の兩端に劣つてゐるから、通じて本山脈の平均高距は一千

米突以上となり、丹波以西の中國山脈中最も峻秀な高度に在る。

更に之を横斷する峠の主なるものは、赤名峠(六九〇)御坂峠(五五五)星坂(四一九)野坂(三五五)等は割合に低いが、他は一般に高く、平均七百米突となるから、山頂一千米突との比高は約三百米突となり、交通路はかゝる浸蝕鞍部を通過しなければならぬ狀態である。

尙、本山脈の支脈は、本縣の水系を決定するばかりでなく、人文關係や地方色を鮮明ならしむるから、左に其の主要なものを摘記する。

一、船通山支脈及天狗山支脈　能義・仁多・八束の郡界をなし、伯太川・斐伊川の分界を肢走するもので、船通山(一一四三)三國山(八〇〇)天狗山(六一〇)佛經山(三六六)と高度を減じ樹枝形に延亙する。

二、大萬木・鍋山支脈　三戸屋川流域(口飯石)と神門川(奥飯石)流域の脊稜をなすもので大萬木山(一二一八)琴引山(一〇一四)鳥屋山(六三七)鍋山(二五七)と高距を減じ末槍する。

三、三國山・三瓶山支脈　出雲石見の國界をなす。

四、市太郎・冠山・伴藏山支脈　江川左岸邑智郡内に群居し、高距は上流三次方面へ遞減する觀を呈し、市太郎山(八二七)冠山(八五九)を主峰とす。

【圖解】山岳系列圖

五、彌畝・大麻山支脈　那賀郡西部で周布川と三隅川の分界をなすもので彌畝山(一〇三六)大麻山(五七四)等を有す。

六、安藏寺三子山支脈　寂地山の安藏寺山(一二六三)から三子山(八前地に峰巒をなし主峰〇〇)等へ延びる。

七、莇(あだみ)岳・野崎支脈　津和野の背地るもので高津川の西部分水嶺をなし、莇岳(一〇〇四)物見岳(六二七)野峠(四八三)等を有す。から縣の西界に崛起す

宍道山脈は、島根山脈とも言ひ普通北山と呼ぶ。一帶に第三紀新層の砂岩頁岩凝灰岩等より成り、ただ松江の北部に於いて、古噴出岩の玢岩に貫かれてゐる。西は日御碕半島から、東は地藏岬に走る延長五十三粁(十六里)平均高距四百米突を有し、峠は平均二百米突なれば、比高二百米突となり、やはり壯年期の浸蝕過程にある。

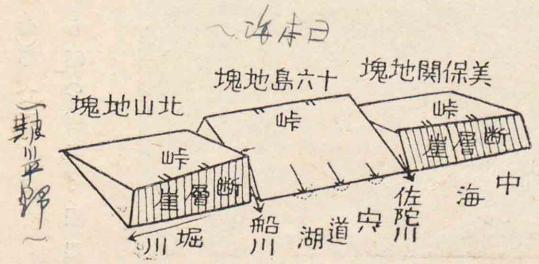
本山脈は、走向に直角な船川斷層(平田・十六島線)及佐陀川斷層(濱佐陀・古浦線)に切られて三地塊をなし、東西に略〻雁行してゐるが、三地塊のうち中央のものみ北方に傾動ブロックを形成して、宍道地溝帶に相反する所より見れば、地變の單純に行はれたものとは考へられない。連嶺に於ける峠の位置が、一定しないのは之が爲めである。

【圖解】島根半島地塊圖

北山地塊……簸川平野の北を東西に聳え延長十六粁、鼻高山(五三六)萬丸山(四八六)獺山(四九五)坪背山(三八五)等を有し、南面向き傾動ブロックで鼻高山斷層崖と言ひコントルは極めて見事である。

十六島地塊……宍道湖北を擁し東西二十五粁、十六島・古浦海岸へ急斜する傾動ブロックである。朝日山(三四二)を立峰とし經塚山(三二一)大船山(三二七)珍山(三三四)無名山(四一五)等を有す。

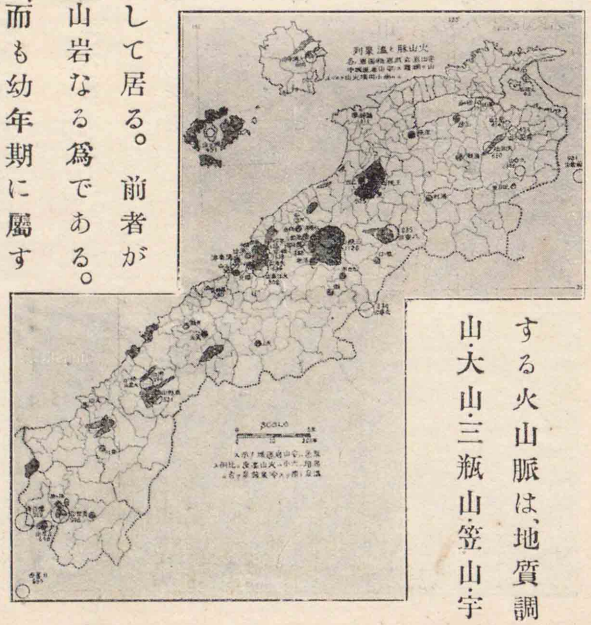
美保關地塊……中海北岸に聳え、延長十二粁、斷層崖を湖岸に向けてゐる。高尾山(三三二)枕木山(四五六)三坂山(五三六)澄水山(五一三)太平城山(五〇三)等相踵ぎ、蒿山(三二六)和久羅山(二六二)其の南に接して松江附近に廣がる。



【圖解】火山脈と溫泉

隱岐は、一般に火成岩で、島根半島二十里の沖合に浮ぶ。島後の最高峰大滿寺山は、玄武岩なるも、葛尾(つづら)(五九八)時張山(五二二)横尾山(五七三)等高度一般に高き山地塊をなす。

肢節――火山脈附溫泉　本縣を通過する火山脈は、地質調査所の所謂白山火山脈に屬し、白山・大山・三瓶山・笠山・宇久島(五島)線を言ひ、小藤博士の岩石學的研究に依ると、此の線を南日本內帶火山脈と稱し、別に青野山・德佐峰を南下し、德山附近の金峰及四熊山・姫島・双子山・多良岳の南西線を角閃安山岩火山脈と別稱して居る。前者が輝石安山岩質なるに後者が角閃安山岩なる爲である。然し、本縣のものは、何れも圓頂火山、而も幼年期に屬する。今一つの特色は、玄武岩の散布的噴出を見るのであつて、山陰特有である。三瓶山(一一二六)は、南日本內帶火山脈の主峰で、青野山(九〇八)は、角閃安山火山



脈を代表する。本縣東部より之等の分布を見ると、

鎌倉山(七三一)……鳥取縣

天狗山(六一〇)京羅城山(四七三)……能義郡・八束郡の隆起線をなす。

王院山(五五四)黒山(五二五)八重山(九三五)大萬木・鍋山支脈に沿ひ、飯石郡に聳ゆ。

三瓶山(一一二六)鶴降山(五八八)才坂(二八一)要害山(二九九)……三國山三瓶支脈に崛起し、雲石の國境をなす。

大江高山(八〇八)矢滝城山(六三八)ツヅラコ山(五四六)仙ノ山(五三八)要害山(四二五)等……大江高山を立峰とする火山群をなし江川の北部に叢る。

熊野山(五二一)漁山(七一四)……彌畝・大廻山支脈に噴起し、那賀郡西部に有り。

青野山(九〇八)三原山(六四〇)德佐峰(九八九)……莇岳・野峠支脈に隆起し、石南を占める。

【圖解】三瓶山

隱岐島前は、三島とも全く輝石安山岩なれども、中央の燒火山(石英粗面・四五一)海中火山をなして、恰もカルデラ型式の内壁急に外へ緩傾斜する。即ち燒火山は、日本海に於ける鬱陵島及竹島と共に、散布的噴

出で、何れの系統にも屬しない。

安答堂(五五五、中島)。高崎山(五一五)茶茎山(四四六)共に西ノ島に在り。赤禿山(三七六、知夫里島)等相倚りてV字形の内灣を形成してゐる。

玄武岩火山(新噴出岩)の分布は、城崎玄武洞以西北九州に至るもので、本縣でも海岸部に可なり多い。

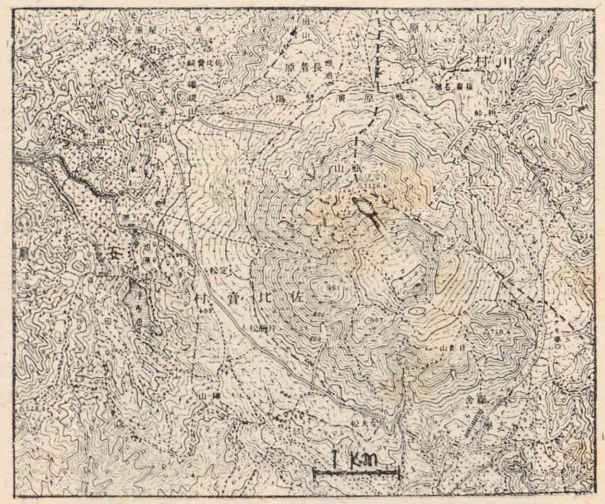
大滿寺山(島後、六〇八)……隱岐に孤立し、幼年期にあり。隱岐の最高峰。

二子島(大塚山、四二)江島、茶臼山(一七一)嫁ケ島……中海・宍道湖岸小規模に分布す。

石見長濱の背後及大蓑山(井野村、一四〇)何れも臺地性のペヂオニテで、地味肥沃である。

九合山(布部村五六六)女龜山(赤名村八三〇)日暮山(山口縣六九四)は何れも規模大で、分水嶺に沿ひ、散布的噴出をする。

斯かる分布であるから、幅十五粁に亙る弱線は、殆ど本縣の中央五六百米突



【圖解】三瓶山附近地形圖　粕淵へ流れる早水川の段丘にも注意せよ。

高距邊を横斷して、地形は益々複雜になつてゐる。圓頂火山の特色は、勿論活火山ある事なく、粘稠熔岩の噴出によつて著しく急斜し、且裾野の發達劣るが故に、高度の割合に比して坐積は狹い。美しい圓頂峰をなせども、噴火口なければ、欠頂する事がない。青野山は其の標式的なものである。

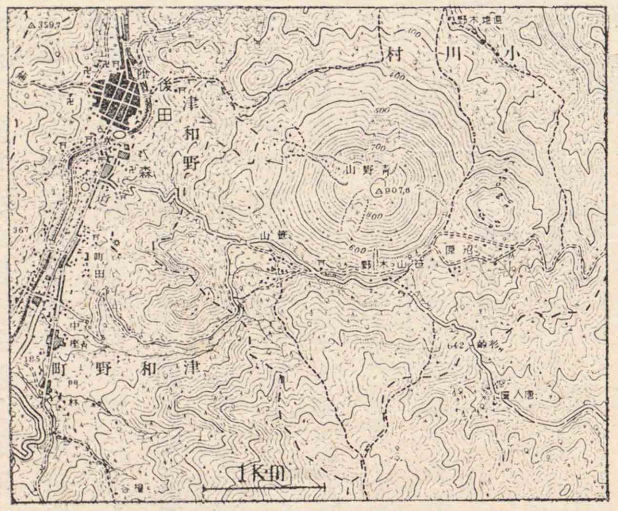
【圖解】青野山　山體傾斜五十度以上である。

三瓶山は、圓形陷地域に生じたもので、男三瓶(一一二六)から東廻りで、女三瓶(九五七)大平山(七一八)孫三瓶(九〇七)子三瓶(九六一)の分峰で一巡し、男三瓶最も高く、中に火口湖室ノ内池を湛へ、附近に鳥の地獄てふ炭酸孔をも有する窪地室ノ内を包んでゐる。山體の内外は數多の崩壞谷發達せるところより推して、室ノ内は爆裂火口で、火口壁の分峰をなす理由も、強ち浸蝕のみの作用でなく、この爆裂作用に因るのである。即ち、山襞が未だ新鮮で幼年期なるに、山頂のみ老年化する筈がないのである。然し乍ら、三瓶の原形は、どこまでもトロイデ標式に發生したもので、爆裂作用は、後次的のものである。即ち、

山體の傾斜は、遠望四十度に達するにも不拘、裾野は貧弱である。其の西射的場の稍〻廣きは、西隣の鶴降山との裾合谷であるからである。裾合谷は、川合川の上流水源であるが、其の頭部は、堰塞されて、浮布池を湛へてゐる。

【圖解】青野山附近地形圖　寄生トロイデに注意せよ。

青野山は、三條の崩壞箇所あるも、山形を傷けることなく、極めて秀麗である。其の逆出肌に沿ひて數箇の小トロイデを隨起し、其の間沼原笹山の兩部落及青野ケ原の小裾野を存する。直ぐ北の小トロイデ地倉ケ山は、津和野川を一たび堰塞したもので、爲めに流路は一六〇度迂回してゐる。附近三原山の隆起も、津和野川の頭部を截斷せるもので、更に德佐峰が標高最も高く、何れも圓頂火山である。野坂峠は、三原山の南裾野を迂回せる山口縣への通路であるが、今は其



の北麓を白井トンネル(五一〇二)で汽車を通ずる。

溫泉　火山列は、直ちに溫泉列を暗示してゐる。卽ち、水成岩の宍道山脈に一つの溫泉すらないのに、本縣の火山地域たる三瓶・大江高山附近は、全く溫泉地帶である。我國南日本內帶の特質として、鹽類泉多く、殊に冷鑛泉多數に上るけれども、施設も交通も乘客も一般に振はぬ。玉造・溫泉津・志學・有福は交通便利、都市に近接してゐて、本縣の四大溫泉である。ただ志學だけは高原豁達避暑地を兼ね、荒磯大濱溫泉は海水浴場を兼ね、各獨自の發展要素をもつてゐる。

今左に主なるものを摘記すると、

泉名	泉質	溫度	位置・環境	泉源
玉造溫泉	鹽類泉	六五度	松江附近玉湯村	第三紀層と玢岩の接觸部
鷺湯溫泉	同上		能義郡飯梨村	
海潮溫泉	同上	二八度	海潮村。大東に近し	安山岩の裂罅
湯村溫泉	單純泉	四二度	仁多郡溫泉村。風景佳	
鹽ヶ口冷泉	炭酸泉	一〇度	飯石郡頓原村	山麓花崗岩地
志學溫泉	炭酸鹽類	四二度	三瓶南麓。高原風景佳	安山岩裂罅
小屋原溫泉	同上	三九度	三瓶山北麓	同上
池田冷泉	ラヂウム泉		三瓶四麓。我國屈指	
川合冷泉	炭酸泉	一三度	川合村。大田町に近し	花崗岩裂罅
湯抱冷泉	ラヂウム鹽類泉		邑智郡粕淵村	安山岩
溫泉津溫泉	鹽類線	四六度	縣の中央。濱海溫泉	第三紀層
有福溫泉	單純泉	四六度	有福村。濱田に近し	閃綠岩裂罅
荒磯溫泉	アルカリ泉	一〇度	鎌手村。濱海溫泉	安山岩裂罅

鎌手村では大濱溫泉の外に荒磯溫泉が以上海に臨んで出現してゐる。

肢節—海岸　本縣の海岸線は、略ぼ山脈の走向と一致し、大體三紀層の中位の起伏を有する壯年山脚が依然激しくない。沈降を受けて一應鋸齒海岸をなしたけれども、入江は其の後デルタに埋められ、岬は波蝕を受けて長さを減じて元々出入のさまで大でなかつたものが、愈々單調になつて、今は幼年晩期に在るのである。海岸線の總延長五三九粁を有す。

一、鑪岬より日御碕	一六一粁	直線一二二粁	比一・二二
美濃郡汀線	二三粁	直線一二粁	比一・一〇
那賀郡汀線	六五粁	直線五〇粁	比一・三〇
邇摩郡汀線	三二粁	直線二一粁	比一・五二
安濃郡汀線	五粁	直線一二粁	比一・〇五
簸川郡日ノ岬迄	二六粁	直線一八粁	比一・四四

二、日御碕より地藏鼻……一二八粁　直線　六七粁　比一・九〇
三、隱岐島……一四七粁　直線　七〇粁　比二・一〇
島前……三二粁　直線　一三粁　比二・四六
島後……一一五粁　直線　五七粁　比二・〇一
四、內海……一〇三粁（中海五六粁・宍道湖四七粁）

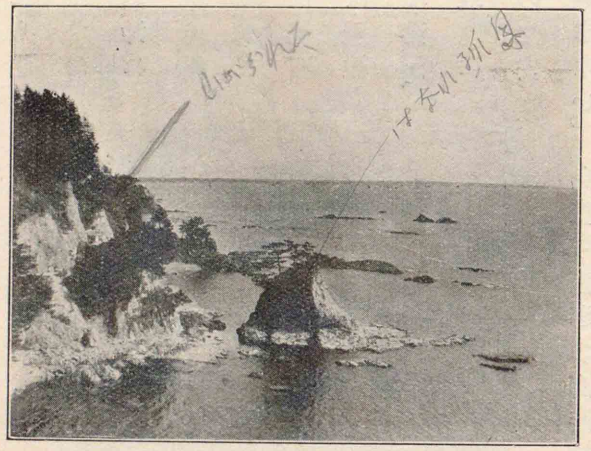
島根半島の北緣、卽ち北浦海岸は、約二倍の屈曲を呈する標式的なリアス式で、隱岐は、四面環海の爲め汀線長く、日御碕より山口縣界鑪岬迄は、邇摩郡の屈曲が目立つばかりで、一般に大なる出入なく、割合に單調な裏日本共通な特色を呈してゐる。

汀線の組織は、北浦及隱岐は岩石の絕壁海岸をなし、日御碕より以西は、稻佐灣砂丘・高津海岸砂丘等を除く外、岩頭のポケットに小三日月濱をもつのが一般的である。其の砂濱に沿うて、入江を堰かれた潟湖の分布するのも亦裏海岸の特色である。

神西湖　五平方粁……蛇池　〇・五平方粁……前面は砂丘によりて堰塞さる。
波根湖　四平方粁……菰澤池　〇・五平方粁……波根湖は現時海水に連通す。附近は花崗砂岩とて第三紀下盤の水成岩地帶である。
蟠龍湖　一平方粁……水位十米突餘なれば湖東（石墨片岩）壁に百間の暗渠をつくりて、下流高津町沖田（海拔五米突弱）二十五町歩の水田を灌漑す。これ卽ち寛永の頃高津の庄官唯心居士の功績による。

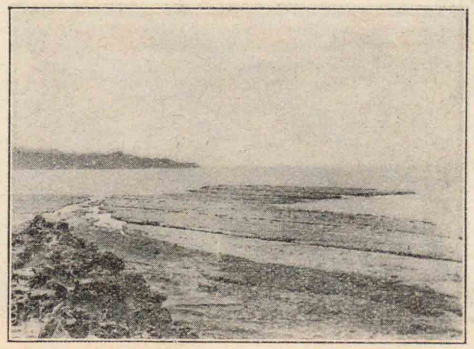
【圖解】日御碕南方筆投島附近の海蝕と遠景稻佐濱を望む。一抹の遠景中央は神門川の出口である。

汀線異動の狀態を見るに、島根半島及隱岐は、瑞穗沈降時代のまゝで、今日も尙溺れてゐるけれども、日御碕以西は、洪積紀に入りてから、所謂敷島隆起時代を經過して多少の隆起性を帶びてゐる。卽ち、潟湖たる波根湖は、未だ海水に連通してゐるが菰澤池の水は淺利驛の機關用タンクに導いてある。菰澤（淺利村）や蟠龍の兩湖に至りては十米突强の水深を有し、其の他內陸所々に、浪汀線や海虫痕若くは若い砂丘や、波上段丘等を目擊する。日御碕南部の汀線は、二十米突の斷崖に印せられてゐる所より推して、以西の本縣海岸は勿論場所に依而相違するけれども、海浸の露出に依つて成れる海岸平野の幅は隆起の大いさに比例し、其の傾斜角の正弦に反比する事より推して、近代の隆起は約十米突乃至三十米突を想像



する事が出來る。

港灣はリアス式の北浦に存在するものが多いが、背地不良且漁港以外に其の必要なく、大河の河口も亦堆積多く、海港何れも北面して風波を防ぎ得ない爲め良泊地をもたぬ。たゞ石見に於ける濱田港は灣入二粁に及び、小島、沖に碁布す。溫泉津港は、標式的のリアス港なれども、灣入一粁幅は極めて狹く、何れも大河の埋積なく、殊に溫泉津港はリアス式の幼年期に屬す。北浦は流石に宇龍・鷺・十六島(うつぶるひ)灣・江角・加露・笠浦等漁港若くは避難港が多い。內海では中江瀨戸(二町)に面せる境港が、砂嘴に面せる保障港として存在し、行政上鳥取縣に屬すれども、本縣も亦此の商港を利用す。其の他安來・馬潟・松江等水深淺く、潮昇も少く、小商港に過ぎない。島後の西郷の商港は、Y字形に灣入して南面するから、背後北風を防ぐ好錨地で、本土との關門にあたる。島前等の諸港は四面環海の回遊航路のためと、漁業の爲めとに利用さ



【圖解】疊ケ浦。那賀郡下府驛附近にあり。明治五年濱田地震の際四五尺の隆起によりて現出せる海蝕臺地なり。

れてゐる小港である。岬角・島嶼・勝地等の主なるものを左に摘記する。

大根島(四・七七平方粁)及江島(〇・九二平方粁)……玄武熔岩より成り土性肥沃養蠶は縣下第一位にあり。中海にソリコ舟を浮べて桁曳漁業するところ地方色濃やかなものがある。

島の遲江部落に玄武岩熔岩トンネルがありて、中海に通ずるものゝ如く、洞內溶岩鐘乳石を垂下す。

嫁ケ島……宍道湖に浮べる小島で玄武岩より成り、松江の風光に光彩を添へる。

地藏鼻……島根半島の突端で沖ノ御前、地ノ御前の二つの離れ小島(スクツク)がある。

多胡鼻……隱岐へ最も突出する。島前へ海上九里半。

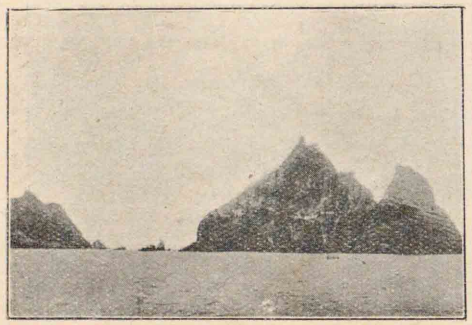
出雲赤壁(又は出雲金剛とも云ふ)多士鼻から東方大崎鼻迄を西金剛、大崎鼻から諸喰鼻迄を東金剛といつて、七ッ穴等の洞窟があり、物凄いほどのその海蝕作用はまだ充分世間に知られて居らぬ。

加賀の潛戸(くけど)……も同樣洞窟である。

日御碕……風景よく、こゝの燈臺は頂上迄の高さ三〇八尺、本邦第一のものである。

靜ノ窟……邇摩郡靜間村にある。

琴ケ濱……邇摩郡馬路村にある。歌ひ砂とて花崗砂岩が海水に浸り、且有機質(漁獲に



【圖解】濱田附近の海岸岩石砂濱の交錯せるタイプ。竹島

伴ふ)の膠結せる部分に限り踏査すると、履まれた部分の斷層面がキュ〳〵と鳴るのである。

疊ヶ浦……海蝕臺地で背後の畑地と界する所は斷層にあたる。

高　島……美濃郡鎌手村の沖合、周圍三里、人口百二十人の漁村、島は安山岩より成る。

竹　島……東經一三二度北緯三七度に在る日本海中央の無人島で、隱岐支廳に屬す。東岐は周十町、西岐は周十五町の岩島であるが、寒流基脚を洗ひ海馬島と共に、日本海に於ける海驢の繁殖地であり、又ナマコを產するを以て、夏季隱岐漁民の出漁地をなす。

【圖解】江川中流の壯年谷河流を示す。

海棚(セルフ)の發達は一般に本縣中央部不良で、二十米突等深線範圍の幅廣きところは飯ノ浦(高津海岸稻佐灣・美保灣外等があり、更に百米突範圍の廣きは、益田沖合の如き三四十浬を有し、江角よりは直角に突出して隱岐島の北を一周する海棚を見るが、濱田・惠曇(えすみ)間の如きは二浬——五浬の幅を有するに過ぎない。換言すれば、北浦海岸の如きは百米突の隆起を見れば、隱岐は本土に陸續きとなるのである。

潮汐　本縣の潮候は、對馬海峽より日本海に波及するものにして、濱田より、美保關及隱岐へ波及するに約二時間遲滯する。潮昇も石西は二尺に及ぶも、東するに從つて一尺內外となる。

海流　對馬海流は、沿岸八十浬までの範圍を東北に流れて日御碕よりは東流し、隱岐と本土との間を流れ去る。速度は時と所とによつて異れども、一日約二十浬である。隱岐には元山を洗ひ來れる、對馬海流の一分派南曲して來たるものゝ如く、又日本海を橫斷せる來滿海流の一派も隱岐に來たるものゝ如し。

河川・平野　本縣の河川の特色は、幅狹き地帶を急流するもの多く、概して原傾河相並行し、支流の頭部は、他の頭部と極めて接近して分水嶺を複雜ならしめ、壯年期に達してゐる。從而低地は極めて貧弱を免がれないけれども、山麓線及五百米突同高線、並に海岸沿ひに三條の盆地列を形成して、各河川の傾度は、此の盆地を緩やかに次の盆地へ急に流下して、發電等に利用されるのも多く此の峽谷部である。水運は割合に便利でない。

二

幹川—支川	管内延長	航路	堤防	平野	面積	備考
伯太川	九里二七町					
吉田川	・二〇					
飯梨川						
山佐川				安來平野		
布部川						
意宇川	三・二六	〇・一三里町	八・〇〇	小平野を造る		
大橋川	二・二二	二・二二	二・二九			
天神川	一・〇一	二・〇一	一・三五			
佐陀川	一・一九	一・一九	三・〇六	運河		
船川	一・二七	一・一一	二・二三			
斐伊川	二二・二二	一四・三二	二四・一三		一五二七方粁	
室原川	三・〇八	—	一・〇七			
馬木川	五・二二	—	一・二二	横田盆地		
阿井川	六・一〇	—	二・〇四			
久野川	五・二一	—	一・一五			
三刀屋川	一九・一一	一一・一〇	二・二三	三刀屋盆地		
赤川	三・一七	一・一二	五・〇三	大東盆地		
新川	三・〇七	三・〇七	五・一九			

高瀬川	二・〇〇					
神門川	二二・〇八	一四・〇一	一八・〇七	斐川平野		
十間堀川						
新内藤川	二・二七	〇・二六	二・一九			
堀川	二・二六	—	三・一五			
指海川						
静間川	七・〇七	—	五・一七	大田平野		
三瓶川	五・〇七	—	二・二五	三瓶裾野		
忍原川	四・〇五	—	三・〇四			
仁萬川	二・三〇	—	三・〇七			
江川	二三・一四	二三・一四	三・一二	江津附近平野	三八〇九方粁	
出羽川	八・〇四	—	〇・三一	出羽盆地		
井原川	五・〇三	—	〇・〇七	矢上盆地		
八戸川	一二・一〇	四・三三	一・一九			
都治川	四・二五	—	六・〇四			
敬川	三・三三	—	一・一九			
下府川	五・二四	〇・二〇	三・二二			
濱田川	四・三〇	六	一・一一			
周布川	一〇・二五	五	九・二一			
三隅川	九・〇八	三・三一	三・〇四			

益田川	八・一九	一・三一	六・二七	益田平野
高津川	一八・一八	一六・八	一〇・〇六	
津和野川	九・〇七	三	二・二六	
匹見川	一九・三二	三・一七	五・一〇	
八尾川	二・二九	—	〇・一六	
中村川	二・〇八	—	〇・二〇	
重栖川	二・〇一	一七	一・〇三	

之等河川の特相により東部西部隱岐の諸川に分ちて細說する。

東部諸川　上流は長大な支流を多く有し、それ等は支流毎に盆地を形成し、下流は淺海性の中海・宍道湖に注ぐを以て、造野作用極めて顯著で、本縣有數の平野はこゝに在る。水量亦極めて少く、下流は天床川の特性を帶びて、耕地よりも水位は高きを常とする。これ上流花崗岩地帶にて、風化旺盛、嘗ては砂鐵採取時代からの影響をうけて埋積が著しい爲め、護岸工事の堤防蜿蜒長蛇に似てゐる狀態である。唯島根半島北岸には地帶狹小なれば河流の認むべきものがない。

伯太川　上流は猿隱山より出で、赤屋・井尻・母里の三盆地を形成して中海に注ぐ。大

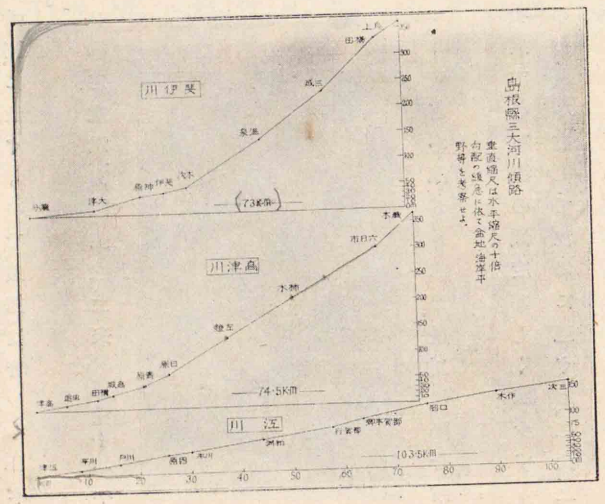
塚村の堰堤により下流を灌漑する。されば其の下部よりは暫く水無川となつて伏流する。

飯梨川　伯太川と姉妹川にして、同樣猿隱山より出で、及び比田・布部・廣瀨の三盆地を經て、伯太川との共同によりて、下流に安來平野を中海に突出せしめて居る。面積三十七方粁、本縣第二の平野である。流程三十一粁別名を富田川といひ、支流山佐川の合流點より上流は布部川と名づく。國道飯梨橋邊に於いて水位は耕地より八尺高い。灌漑堰堤は、川口より三里上流廣瀨町より各樋管によりて導き、更に導小溝を經て各支溝に入る。

大橋川及天神川　斐伊川の宍道湖をとほした延長で、松江市を大橋川に依つて橋北橋南に界する。七百噸以下の汽船入港し得るも、尙築港計劃中である。

佐陀川　佐太ノ水海(宍道湖の支灣)に注いでゐた佐陀川と、江角浦に注ぐ忠太夫川とを結ぶ運河で、天明五年松江藩普請方清原太兵衞に依つて、氾濫防止と、湖の跡に水田を得んが爲めに完成せるもので、島根半島四十米の高距の新道峠を貫

【圖解】三大河傾度圖



通してゐる。

宍道湖南北兩岸の小三角洲列　兩岸は一川一デルタ一村の型で、南北岸相對し、地先を湖岸に出してゐる。

舟川　佐太川と共に、宍道山脈の斷層部を宍道湖に注ぐもので、頭部は著しく日本海に迫つてゐる。宍道湖上汽船平田へ通ず。

斐伊川　上流は船通山に發して横田川といひ、**横田盆地**(高距三三二米突面積十一平方粁)をなし、宮原・馬木・阿井の支流を容れる。其の馬木川は本流の浸蝕に遲れてゐる爲め懸谷合流してゐる。その頭部浸蝕は、花崗岩の節理に富む**鬼の舌振**で、極大の下刻作用を營み碧潭奇勝を現はす。次で久野・三刀屋兩支流を合して三刀屋盆地(五二米突)に出で、更に**大東盆地**(五〇米突)をなす赤川來り會して狹く峽隘をなし、佛經山西麓より簸川平野を堆積す。

【圖解】鬼の舌振

飯石を流るゝ三刀屋川は、掛合附近に龍頭瀑(十三丈)をかく。

斐伊川は流程七十三粁、支流極めて多く、木次以下の下流の傾度著しく減少する。流域は一大樹枝形を呈し、一五二七平方粁の面積を有して江川に亞ぐも、生產上の價値は却つて凌駕する本縣の大川である。

下流は氾濫防止の新川(三里七町)の運河によりて斜傾河に分流する。本流も分流も國道邊に於いて水位は耕地より五尺高い。從つて幅十五間の堤防は延長二十四里を要す。灌漑は十三粁上流二川の分岐點(出西村)に二葉堰が設けられて、斐川平野一望の美田に注がれてゐる。水運約十五里。夏季は一般に不便である。尙支流三刀屋川(十一里)赤川(一里半)も水運を有す。

斐伊川は、往昔川跡村武志より西し、北山麓を西流し、荒木村附近にて神門川と合し、杵築灣に注ぎしものが、寛永十二年大洪水の際、流砂の堆積に妨げられて東流してからは、國守若狹守土工を起して、所謂若狹土手によりて一路東流せしめ、現今の如く宍道湖へのコースをとり、潴留池も低窪地も耕地として整理せらるゝに至つたものである。

新川は出水時に汎濫を輕減せんため、派川として開鑿したもので、天保二年藩主松平齊貴によつて起工、翌年竣成したが、河川用地公收に遭遇したものは、斐伊川下流の新地先に替地されたので、勿論新川域の人は此の工事の賦課を出さなかつたから、夏の水涸れに、幹川域の人々が灌漑水の優先權を主張するため、所謂「二葉堰の水爭ひ」を惹起すること屢々であつた。今後は「番水」制度をとつて、斐伊川三日、新川一日の交替で灌水する定めである。然し今や新川は之を埋め立て、幹川を擴張する工事は內務省案によつて實現するであらう。

高瀨川　は大梶七兵衞が貞享四年大津村汗入池(あせりいけ)(斐伊川西流時代のカットのアンダー)から新川同樣、インセクェントに斐伊川の水を引いたもので、幅四間長さ二里新內藤川に入る。爲めに畑は田に、池沼は耕地に變じ、今日も沿川高瀨舟の恩惠をうけてゐる。

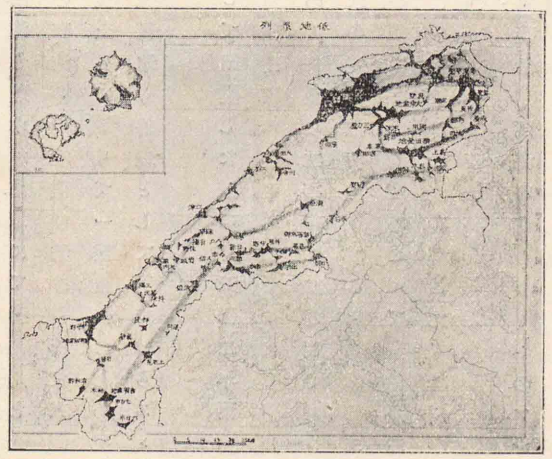
簸川平野　は二十米突水平曲線以下の面積は一五一・六六平方粁(約十方里)で、古來

神門八萬石の稱さへありて、神門川と共同して大部分沖積層の沃野を展開し、山陰第一の平野である。但、南緣では二十米突内外の洪積層が發達してゐる。宍道湖岸斐伊川地先の三角洲の進出は極めて急速で、過去五六十年間に一里半の延長を示してゐる。（古地形圖を比較して）それ等地目の名稱に灘分・出來洲・新田・中洲・島村等造野作用を物語るものが多い。

神門川　上流は女龜山に發し、赤名川の名な得、嶺淵の峽谷を經て頓原川を併せ、峽谷をつくりつゝ奥飯石を北流するも、斐伊川と異り、支流の大なるものなく、平野をつくらず一氣に斐川平野に出ず。流程六九・五粁に及ぶ。下流王院山（火山）麓を迂回する蛇曲部は極大に達し、發電と勝景を生み、所謂立久惠（乙立村神龜峽ともいふ）を有す。集塊岩の膠結物先ず浸蝕せられて、出雲の小耶馬溪を作ること數町、轆て簸川平野に出ず。

簸川平野の西半を構成せるは、此の川の流砂が薗ノ長濱なる砂丘内面に堆積せるためで、そこは往昔神門水海として内海をなしたるもので、今の神西湖は其の一部が遺趾湖として殘存するのである。從而往昔川の流路は朝山村馬木より西流し神西湖に注ぎしものが、永祿以後今日の

【圖解】低地（盆地）系列は本線に於ける地形的構造線を暗示してゐる。



如く、丘陵に妨げられて北流することゝなつた。舊河道は朝山村・古志村等に低窪地として追跡し得る。此の川床も亦耕地より一尺高いけれども、天床川の性狀も此の川以西には認められぬ。

更に下流十間堀川は大梶翁元祿年間完成せしもので、古志村馬木より神西湖に至る沿村の灌漑を目的に開鑿せるものである。

新内藤川は高瀨川を容れて恰も斐伊川舊河道を辿りて神門川に入る。

堀川　北山々麓を西流し、大社を通過して、砂丘の間を稻佐灣に注ぐ。

指海川　神西湖の滯水防止且つ湖周の沮洳地乾拓のため、貞享四年大梶翁によつて外海に通ぜし運河で、同翁の荒木村砂丘植栽・高瀨川・十間堀川開鑿等の功績の一つである。

西部諸川　神門川以西では、江川・高津川ですら平野貧弱、支流の有する盆地も小規模で、所謂無能川の部類に屬す。支流は構造谷に支配されてサブセクェントに合流し、他と一對となつて丁字形を呈するものが多い。傾度は江川に於いて緩かで、水量東部諸川に比して何れも多く、舟運も便である。河口の殆ど共通して東偏するは、海岸潮流によるもので、又一特色をなす。

靜間川　忍原・銀山・三瓶の三支流を容れ、大田附近に石東唯一の沖積平野を造る。三瓶川上流は三瓶裾野湖の浮布池に發す。その反對斜面江川の支流早水川のコースを延長すれば、江川の出口を靜間川に求めてほゞ直線コースとなる。卽ち浮布

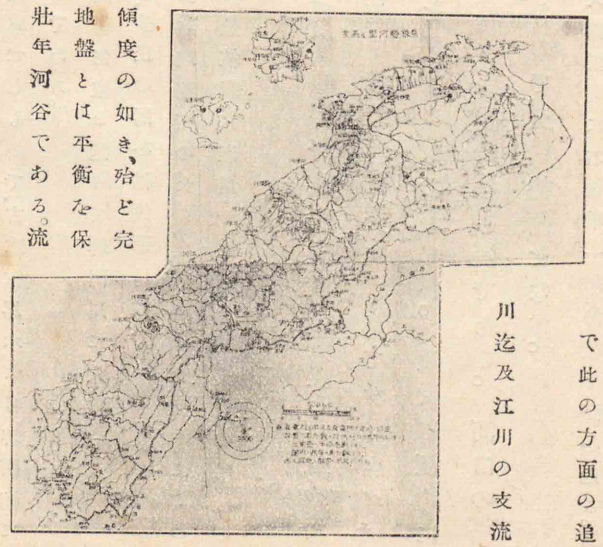
池附近の四百餘米突の隆起を想像し、早水川の浸蝕段丘柏淵より一哩の發電所附近)が深造岩を基脚とする等思ひ合すと可能の樣ではあるが、現在靜間川のコースは新らしい第三紀層を流れるもの跡は困難である。

火山地の副射型の流路　靜間川以西江都治川・早水川に至る小河川は、大江高山火山地塊の副射谷を流れ、標式的の放射型をなして急流し、町村界も道路網も亦之に適應してゐる。

江川　上流三次盆地迄舟運を有する中國第一の大河で、三次の高距一五六米突にして、分水嶺の高距八百米突なれば、此の川の先行以來此の差だけ浸蝕せる一大峽谷をなす。而も三次・口羽間の傾度の如き、殆ど完成し、削剝も減じ運搬も麻痺して、水力と地盤とは平衡を保つて所謂浸蝕・堆積相殺された標式的の壯年河谷である。流域面積三八〇九平方粁に達す。

支流口羽川・井原川・八戸川と本流とのなす盆地列は、東西三條互に平行して長方型地塊をなし、其の相互の分水嶺は峠を以つてし、交通型もこれに適應してゐる。本流は柏淵より百六十度迂回し、花崗岩接觸地帶の構造線を流下し、嵌入メアンダーの小汎濫原を左右兩岸に振り分けつゝ、川口まで遂に平野を見ることが出來ぬ。水量多くして斯くの如き無能なる河は、內地に於いてすら類例尠く、全く鴨綠江式である。たゞ川　江津以西は、砂丘內面少許の海岸平野に續いてゐる。

【圖解】河型圖

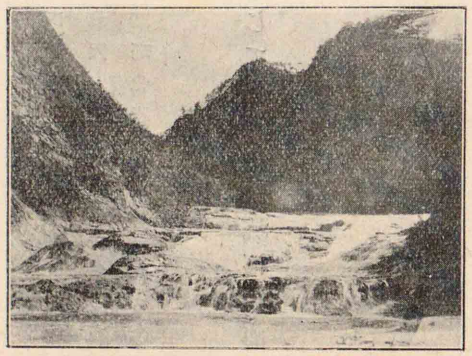


川迄及江川の支流

中野盆地(矢上盆地)の水本流に注ぐ所謂井原川(濁川)は、傾斜著大なれば、こゝに溪谷美の斷魚溪を出現してゐる。冠山の西麓奔馬の如き水勢は、組織を異にせる玢岩(縞目を有す)の楔狀節理を穿ちて飛瀑深潭の奇勝をなす。嫁ケ淵は其の一つである。

濱田川・周布川・三隅川　何れも河口東偏してゐるけれども、元來は西寄りに出口を求めたものが、西風發達地方なれば砂丘が阻碍して、岩頭の風下卽ち東寄りに流路を轉向したもので、靜穩なる河港として小帆船の寄航に堪へるばかりではなく、小平野は此の轉向に依りて倍加された沖積平野で、濱田も周布も三隅も此の川を跨いで發達してゐる。斯かる特色は西部に於いて標式的である。

【圖解】斷魚溪



高津川　上流は吉賀川といひ、周防界なる星坂より出で、津和野川・西見川の大なる支流を容れて流域を美濃・鹿足にもち面積一〇九五平方粁を有す。下流益田平野(石見野とも三百原とも云ふ)は石見第一の平野である。河型はサブセクエントの支流の合流するところに谷中盆地を形成し、吉賀盆地等は其の主なるものであ

る。津和野川は三原火山の噴起によつて上流を阿武川に奪取され、爾來水量減少せるもので、沿川下流の横田盆地に至る迄低夷なれども、段丘顯著に發達し沿川の村落は其の段丘上に發達してゐる。（青原部落の如き好例なり）斯くの如き段丘の發達は、裏日本には珍らしいものである。河道の變遷も、横田及高津に於いて川中島を構成してゐることに依つて分る。

益田平野は其の背後は三紀層の丘陵址で、高津川及益田川の沖積する所多大なれども、高津砂丘前面に隆起して淺海性内灣の生成を先因として埋積が行はれたのである。近時背後の三紀層は炭田として試掘され、珊瑚化石の發見される等よりして、三紀時代の海中なりし事を證明してゐる。

隱岐諸川　島後に於ける諸川は、地形高峻且島形に應じて副射型に流れ、島前には河流の認むべきものはない。

八尾川（やび）　長さ四里隱岐一の長流で西郷灣に注ぐ。

壇鏡瀧　の水は流れて都萬村に注ぐ。

重栖川（すもす）　西北を流れて福浦灣に入る。

舟引運河　島前には西島の隘れる所に舟引運河がある。美多灣と外海とを連絡する捷路にあたり、延長百八十間幅三間水深干潮時四尺五寸、黑木・浦郷兩村組合事業として大正三年起工四年竣工したもので、工事以前は外海出漁者は赤灘瀨戸を迂回するか、此の地峽部を陸上舟を引越さねばならなかつた。

宍道地溝帶　宍道窪地は新三紀以後の陷落地帶で、出雲風土記（天平五年撰）に八束水臣津命の國引の神話を傳ふる如く、出雲朝廷出現以前は明らかに日本海に連通せる一大海峽で、所謂素尊水道と稱せられてゐた。當時島根半島は、三個の島であつた事は、今日の宍道山塊から推しても首肯出來る。又今日玉湯村地内で蛤の化石を得た事も、正しく鹹水であつた事を證據だて得るのである。

然るに、各河川の埋積作用は、此の靜穩なる海峽部に行はれ、加ふるに陸地の隆起は之を助長してゐる。されば、東は夜見濱の一大砂嘴によりて中海を抱き、西は薗ノ長濱なる砂丘内面に、斐伊川・神門川の夥しい沖積作用に依りて、遂に本陸に繫がれた簸川平野を出現し、中に宍道湖を圍むに至つた。松江附近も亦塡塞されて、宍道湖は全く淡水と化し、中海は中江瀨戸に依而僅かに外海に通じ、以つて鹹湖をなす。斯くの如き埋積は湖水をも淺くし、深度六米突强に過ぎないのでも分る。

隆起と埋積の兩作用は今日も尙持續するものゝ如く、大社の西海岸の如き汀線三十米突後退の事實あり、玉造溫泉は風土記には明らかに湖岸に存在し

たもので、千二百年後の今日は湖岸を距る内陸二十町に位置してゐる。同樣風土記に見える砥神島は、今の安來町に接續し、又羽島も安來町田甫中の小丘となつてゐる等の事實よりして、安來町・赤江村・意東村の地は、現今汀線二十町前後の後退を證明して居る。

地溝帶は、幅八粁長さ約五十粁に達す。松江附近の幅狹まりて、原形面追跡困難なるは、玄武岩の噴出による茶臼山(一七一)嫁ヶ島等の隆起が其の一因をなすべく、斯樣に陷落部の弱點に新噴出岩の生成せられたるも、此の陷落の時期を想定する一資料である。又簸川平野の底質を見るに、現在の三十余米突底が海底で、百尺幅の礫質砂土は明らかに河流の堆積物で、其の下五十尺幅の黑色粘土は海底沈積物で、それ以下の礫層は洪積層である事を大凡の標準として差支へないと思ふ。

中海は周圍約六十二粁(十四里十一町)我國第五位の大湖である。湖形は、南岸に人工乾拓も加はりて、小彎入あり。湖心に噴出玄武岩の大根島・江島等浮ぶ。

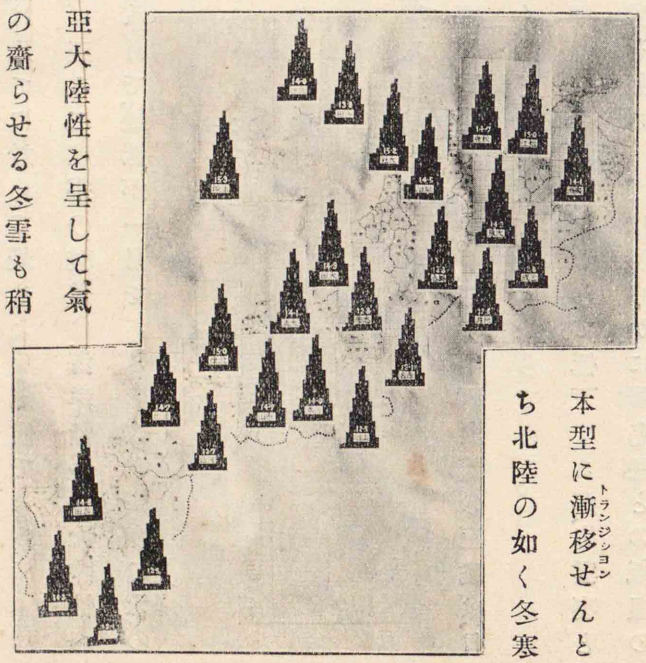
宍道湖は周圍約五十粁(十二里十二町)で我國第九位の大湖である。深度は中央部最深にして六米突あれども、概して四米突の深度に過ぎない。之に注ぐ

【圖解】氣溫型冬の較差が山間部に至るに從ひ著しくなることに注意せよ。

斐伊川の水量尠ければ、寧ろ大湖を養ふに足らずして、西岸蘆荻の沮洳地は、漸次簸川平野の地先を增加しつゝある。

五　氣候

本縣の氣候は、裏日本型が表日本型に漸移(トランジション)せんとする中間性の氣候を呈する。即ち北陸の如く冬寒冷ならず多雪ならず、北九州の如く暖からず夏雨のみならざる兩者の中庸を得たる山陰固有な氣候區を認めるのである。



山陰固有な氣候とは、日本海に急傾斜する地形に支配されて、沿岸が暖流の影響を受けて氣溫降水量が調和して居る以外は、直ちに亞大陸性を呈して、氣溫の較差も著大となり、北西季節風の齎らせる冬雪も稍多く、秋冬の天氣陰慘で日照尠く、且濕氣も此の時期に停滯し、遺憾なく不愉快な

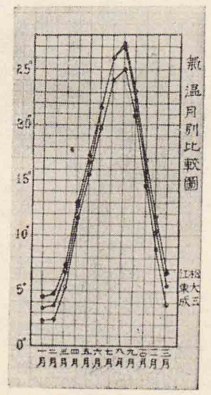
地方色を呈する。然し乍ら春夏は天氣比較的良好であるから、生産的時期においては惠まれてゐるし、裏日本中では凡てに於いて最もよい氣候である。

氣溫　年平均十五度から十二・五度に至る二度半の較差は、海洋性から大陸性へ急劇な變化を示すもので、最高が八月で、最低が一月であるのは我國表日本の一般に等しい。

*北陸は二月が最低

季節的變化を見ると、冬の開きが最も大で、夏は稍々接近するけれども、三成の如き山麓地は氣溫の上昇が月々遲れ、八月に至るも松江より二度冷涼であるが、秋冷は却つて進み結局生育期間が少い。然し大東は松江と同じ盛夏をもつ。卽ち中國山麓の三成は、日本海から遠くて海洋性の恩惠少く、殆ど山地型をなすからである。

【圖解】氣溫月別比較圖



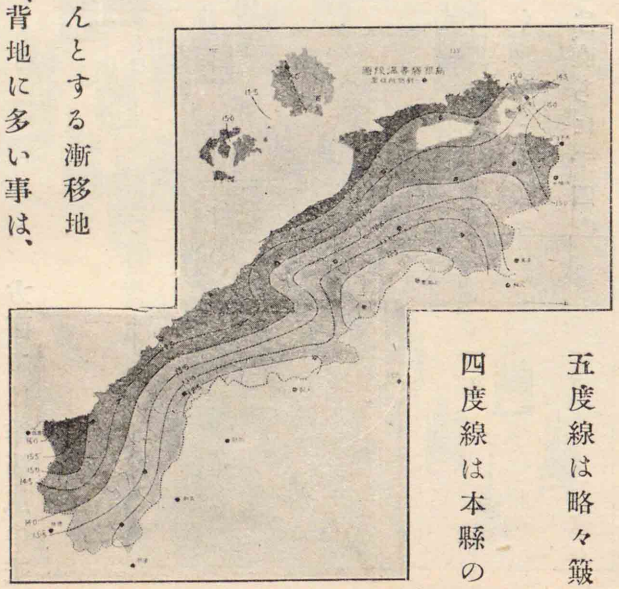
氣溫の分布は地形に適應して、原則的に平行型をなして低下するが、出雲裏と石見裏に閉塞した山地の冷涼地域を見る。之は明らかに廣島縣との氣溫の分水嶺に當る。等溫線の屈曲は江川峽流が顯著で、高津川・日野川(鳥取縣)は稍々緩漫に暖かい彎入をなし、從而大江高山火山地域は高距大なれば、寒い半島を突出してゐる。島根半島北岸等の暖かきは、沿岸に接近して流れる暖流の爲めで、隱岐の西半も同樣な理由に由る。

(一)沿岸平野の海岸性地帶　年平均十川平野高津平野等を過ぎる。

(二)中間盆地列の漸移地帶　年平均十高距五百米突山麓盆地を走る。

(三)山麓盆地列の山地性地帶　年平均十三度線は、中國山脈脚下の盆地列を通過して冷涼である。

【圖解】等溫線圖



五度線は略々簸四度線は本縣の

雨量　總量に於いて、二千粍臺から千八百粍臺に東から西へ減少して、北陸型の冬多雨が、北九州の夏多雨に變化せんとする漸移地帶である事が分る。更に前地に少く、背地に多い事は、濱田と波佐の降水量を比較して明瞭な如く、年中の卓越風が概して西北風であるから、地形に適應して海岸の濱田は風上で、之を容易に通過せしめるが、中

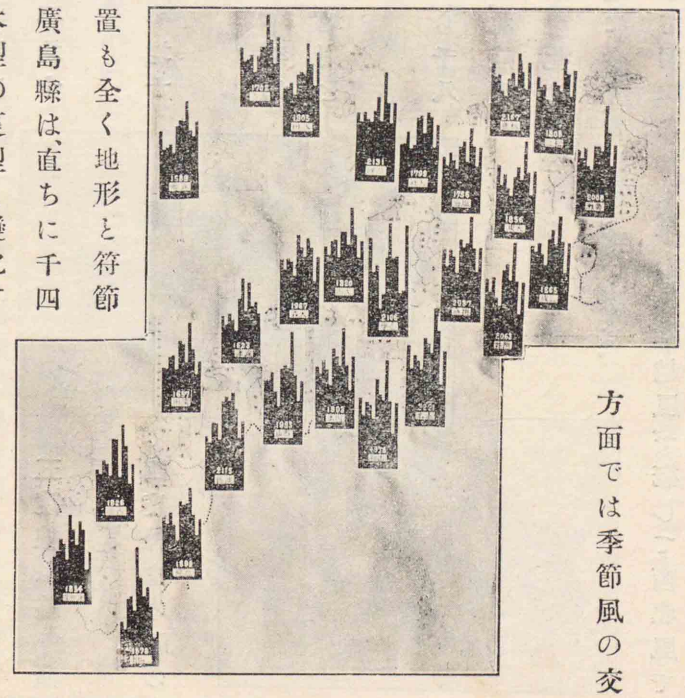
國山脚の波佐では、風下に在つて遮斷するから、勢ひ兩地に於ける著しい相違を見るのである。

雨量の季節的變化は、石見替期と梅雨期に多く、卽ち三月・六月・九月の三回の山を見せるが、出雲方面では、更に冬が隆起してゐる。從而石見以西の八月少雨・梅雨顯著な現象は、余程表日本型に類似してゐるのである。

【圖解】東部雨量型から順次に冬型から夏型に變化する狀態に注意せよ

東京の雨量は約千五百粍で坪當り二十八石余にあたる

雨量の分布も、概して氣溫と同樣な平行型で、閉塞線の位置も全く地形と符節するが、此の分水嶺の背後、卽ち廣島縣は、直ちに千四百粍の寡雨地となり、全く表日本型の夏型と變化するので、中國山脈の高距が、適切に原因してゐる事が肯づかれるのである。從方面では季節風の交



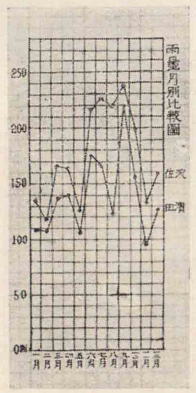
而邑智郡の一部は、高距も低く、却つて山陽に傾斜して雨量を少なめてゐる。今一つの例外は、能義郡に於ける閉塞線で、此の區域は元來宍道山脈の雨の陰で一帶の寡雨地でなければならぬのであるが、大山の高距に阻まれた夏季の偏東風が廣瀨盆地に齎らすもので全く雨の飛地となつてゐる。其の他の屈曲は氣溫と同樣であるが、尙斐伊川の峽隘がよく濕風を通過させて寡雨であり、島根山脈が海風を先ず最初に遮ぎり、奥地を乾燥せしめてゐる事等を知る。

(一)沿岸平野の寡雨地帶　年雨量千七八百粍は本縣としては雨少き區域である。

(二)中間盆地列の漸移地帶　年雨量千九百粍前後。

(三)山麓盆地列の降雨地帶　年雨量二千粍。こゝは氣溫低く、冬雪多き地方である。

【圖解】雨量月別比較圖



其の他氣象要素を擧げると、

降霜期間	濱田境	十二月上旬—四月中旬＝百三十一日間	廣島　十一月中旬—四月上旬＝一四四日
		十一月中旬—四月中旬＝百七十五日間	
溫度	濱田境	七十四粍（年平均）＝夏型	廣島　七四粍夏型
		八十粍（同）＝夏冬型	

日照時百比　濱田　四六パーセント（年）＝夏型　三八パーセント（年）＝夏型……廣島五〇パーセント、夏冬型
境

地方卓越風　濱田　夏は北東風、冬は西北風發達す。
境　夏は東北風、冬は西風發達す。

之に依而見るも、濱田郡卽ち石見く、境卽ち出雲東部は、北陸型の氣象劣つてゐる。換言すれば、濱田の生大である。

氣候と生業　尙氣候と生業との關係を見ると、稻の挿秧期に梅雨があり、收穫期に秋冷寡雨となる事は好都合であるが、成長期の八月に少雨で、却つて開花期九月の多雨は、稻作にとつては不適當である。然し春蠶期五月、秋蠶期七八月の交に於いて何れも雨量低下する事は、蠶業に適してゐる。

生活と氣候の關係は、陰慘低迷な秋冬に於いて可なり山陰の氣分を因循ならしめ、西北季節風帶で冬の海が荒れ、且つ濕度が高い爲に、氣溫以上に寒さを

【圖解】等雨量線圖

出雲の高濕度は裏日本特有で纖維工業地として恰好の區である。
福井八八三糎
宮津八一〇糎
境

は、大體表日本に近が波及して濱田に育期間は境よりも

【圖解】氣候圖

大正十三年人口　本籍八三萬三三〇人　現在七四萬五九六一人

感ずる事となる。氣溫は地形に適應して急激に低下するから、田植の時期も奧地は五月初旬、中部は同中旬、沿岸部は同下旬に行はれ、蚊帳を用ふる事すら奧地で五十日間、沿岸低地で百日間の相違が生ずるのである。況して奧地の降雪は冬作を少からしめ、冬籠りの農閑期を多からしめて能率を低下する。河川の汎濫期も、雨量圖に於ける二つの山卽ち六月と九月に在るが、前者の被害が多く半夏水（はんげ）と稱してゐる。九月は水害よりも颱風が稻の開花期を襲ひ勝ちで、恐れられてゐる事は、強ち本縣のみではない。

第三編　人文地理

一　人口

本縣の大正十四年國調では人口約七十二萬人現住し、我國各府縣の第三十五位にあたる。本籍人口は之より尙九萬人多いが、之は地產薄弱、產業不振の結果出稼移住者が多いからである。

朝鮮……七六八八人　外國……二三四六人　關東州……二〇四一人　臺灣……二〇五人
樺太……三〇一人　南洋……六人　等

又世帶數十五萬七千戸、一戸當り平均四人八二で、漸次增加の傾向を有し、密度は一平方粁百十人强で、福島・長野・岐阜縣等に類似する。

男女數は現住人口から見れば女一〇〇人男九九人七五で女子稍々多けれども之は出生の多少でなく、出入の關係である。殊に隱岐島及那賀郡東部の如きは、男子に比し女子は特に多い。人口の增加率は極めて鈍く、大正九年國調に比して

島根縣人口表

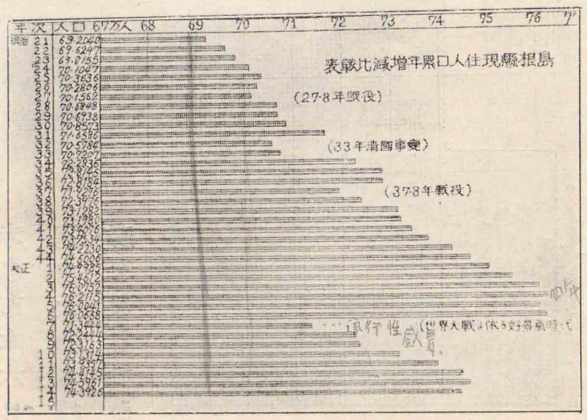
郡	人口 大正九國調	人口 大正一四國調	順位 同上密度(方粁)	順位 總數	順位 密度	大正九對增減
市	三、七五二・七	四、一三九・六	八五二・三	—	—	增
松江市	八、二三一・九	八、二九四・二	一、八七七・五	三	二	同
八束郡	四、二五五・二	四、二九一・四	一〇八・一	六	七	同
能義郡	二、三〇二・六	二、三三八・九	二八一・九	一三	一一	同
仁多郡	三、一一三・八	三、一一七・六四	一三二・〇	一〇	四	同
大原郡	三、三二六・四	三、三八八・五	五六・八	八	一〇	同
飯石郡	一二、八〇一・五	一三、二〇四・五	二四〇・〇	一	一	同
簸川郡	三七、七八四・一	三八、八三三・五	一四九・八	—	—	同
出雲國	二、四一八・七	二、四五二・八	一二七・三	一二	五	增
安濃郡	三、四七六・四	三、二七三・九	一四三・六	九	三	減
邇摩郡	五、九 五五	五、九八四・二	六〇・二	四	一二	同
邑智郡	九、七七二・五	九、八〇四・八	一二三・二	二	六	增
那賀郡	五、二一八・五	五、三七六・七	七三・四	五	九	同
美濃郡	三、一五一・六	三、〇五六・三	四七・八	一一	一三	減
鹿足郡	三〇、〇三二・二	二九、九四八・七	八三・六	—	—	
石見國	三、六五三・九	三、四五八・〇	九九・三	七	八	
隱岐島	七一、四七一・二	七二、二四〇・二	一一〇・六	—	—	增
島根縣						

【圖解】島根縣人口動態圖表

出雲は少許增加したるも、石見方面は却て減少してゐる。蓋し出稼者多き爲である。更に年齡別に、生產年齡者(十五才より六十才迄)は、五十五%、不生產年齡者(幼齡及老齡者)四十五%に當り、石見各郡及隱岐島は、殊に生產年齡者が少い。これ卽ち前記の地產少きため出稼多き爲めである。

人口密度の各郡の順位は、蓋生產面積の多少に因ること多く、簸川・八束・邇摩・大原・安濃・那賀・能義・隱岐等相踵ぎ、鹿足郡が最下位に在る。一般に出雲の各郡は密度が高い。

人口分布を地形的に考察する時は、(一)宍道地溝帶殊に簸川平野・安來平野の群(グループ)が明瞭で、松江・今市等は其の核に當る。次に、(二)沿岸部は、東美保關から、西爐岬迄直線的配列の數珠型をなす。これは强ち陸面が、沿岸平野たるのみならず、縣下人口の二%は、海面利用の水產業者が含まれてゐるもので、此の直線群の核は、江角・大田・江津・濱田・益田等が在る。(三)は



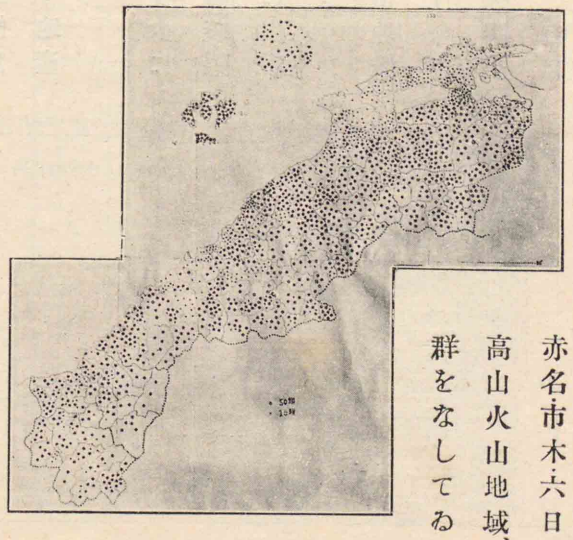
人口分布に就いては第七頁第四六百低地及水田分布圖系列圖を參照せよ

【圖解】島根縣市町村別人口分布ドット

原因は五萬分に聚落を視察し斟酌せる位置にドットせり。

麓氣乍ら、本縣の中間盆地列の東西線に沿うて、貧弱なグループを目擊する事が出來る。即ち、主なる核は、廣瀨・大東・粕淵・川本・井原・都茂・日原・津和野に該當する。

(四)山麓盆地列も同樣に視察し得べく、三成・市を指呼する事が出來る。(五)其の他、大江及隱岐も亦地形に適應して、輻射狀の聚落である。但し見方に依りては、飯梨・斐伊・江川・高津川等の河系タイプの梨棚式聚落と見て、差支へない事である。一般に本縣の如き狹長地帶で、急傾斜してゐる所では、背地・中間地・前地の三つの繁榮地點が、余り遠からぬ爲めに、前地の人口引力が大で、分布の型式が極めて單純になり勝ちである。



赤名市・木・六日高山火山地域、群をなしてゐる

鄕土語に於ける地方色を見るに、出雲の間違ひ易い發音はヒとフ(Hi, Fu)を唇で發音し、ウとオ、チとツ、シとスを區別し難くア段に母音のイのつく場合に訛り勝ちで、キ(Ki)を出氣音にして、苦しさうである。殊に男子の發音が不良である。

【圖解】大正十四年度島根縣生產總額百分比圖

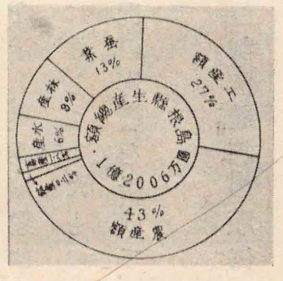
石見では、シとヒを誤つて發音する。例へば質屋(しちや)、七(しち)をヒチヤ、ヒチと誤り易いのである。

隱岐の發音は出雲とは違ひ明瞭である。

二　產業

概觀　本縣は面積十九位であつたが、耕地面積が遙かに少い爲め、氣候が惡くなくても、地產に乏しいのみならず、位置が繁榮地帶に反してゐる爲め、商工業も興らず、天產の鑛產物も貧弱であるから、產業上特に他府縣に誇負するものがない。

然し乍ら、縣生產總額は、今や一億二千萬圓に達し、うち農產物が其の首位にあつて、府縣中第三十四位に在る。工業・蠶繭・林產・水產・畜產之に次ぎ、各々地相に從而堅實に所產を擧げてゐる。



大正十四年度島根縣生產額表

一、農產	五一八五萬五四五三圓	一六五九萬五七八一圓	一位
二、工產	三二五八、二三一四圓	五六二、〇〇六八圓	二位
三、蠶業	一六三七、〇七四一圓	三三六、七九六四圓	三位

明治四十三年度島根縣生產額

四、林　産　一〇二八、四六四七圓……二三九、七七三七圓　五位
五、水　産　七六八、八二五六圓……二五二、八七一三圓　四位
六、畜　産　二〇四、〇三五五圓……四七、七八三〇圓　七位
七、鑛　産　二三、〇八三三圓……七二、〇〇五五圓　六位
計　一億二〇〇六萬六七二五圓……三一七〇、八一四八圓
一戸當　一六一圓

之等産業の十七年前と比較すると、工業・蠶業・林業の發達を示し、農業・鑛業は何れも比率が低下してゐる。農産額は、以前は生産の半額に達してゐたものが、漸次副業的趨勢に傾きつゝある事を語り、鑛業は、財界不況の影響を受けて、殆ど休止の狀態に在るからである。

更に、縣下生産額を郡別に見るときは、簸川・八束・那賀・美濃・邑智・能義等の順位となる。

大正十四年度島根縣郡別生産額表　（單位圓）

市郡	農産	工産	蠶業	林業	水産	畜産	鑛産	計
松江市	三、七二三	四五五、三八三		三三五九		一二、四〇六〇	一四、三一九三	四八六、七四三三
八束郡	六九八、五八二〇	一九〇、四六八八	二六六、九二〇三	二六、一九七六	二六、一九七三	二二、三四二五	一〇七〇	一四八一、二二八六
能義郡	三九一、一二一九	一七一、八〇四八	六三、五九九二	六四、〇七六三	二、三七五六	一四、六六三三		七一六、六三三〇
仁多郡	一九二、三九七八	一〇六、二六二七	四三、二七四三	六八、〇五〇一	一、四一四三	八、六八一三		四二〇、〇八〇三
大原郡	一七六、五五六七	九三、三一一六	一七九、〇四一三	四八、〇〇三七	九、六四三	六、六九四五	六〇四、六〇五一	
飯・石郡	二七三、二五九四	四二、六四五〇	七九、三三八〇	七六、二九〇三	一、〇〇七三	八、六四四四	四八一、一七四三	
簸川郡	一三五一、一一七六	一一二五、一八五五	五五四、七〇六六	八三、四三五二	一〇四、四八一五	四六、二六一三	三三六五、四七六七	
出雲國	—	—	—	—	—	—	—	—
安濃郡	一七三、〇一二八	六三、八八一五	五一、四二四九	一九、三一二四	一九、三八一一	八、〇七三九	一七二	三三五、〇八三八
邇摩郡	一七六、五五九七	一〇〇、七八八六	二九、四八二三	六二、九一七六	五一、八九五四	七、八六三八	二、五一二三	四三二、〇一九六
邑智郡	三七〇、〇七九八	一三〇、〇八四六	一四八、四七九九	二一、〇二五四	三、四九一三	一二、四九五七	三、四五〇〇	七六九、一〇六六
那賀郡	五〇二、〇六九九	三八九、一一七三	七六、五三八一	一二四、四四八九	一八七、二一八五	二一、九九六九		二八〇一、三六九六
美濃郡	三一七、五四五〇	二四〇、八八一七	五五、九九三六	二三七、〇六九七	四六、四二一六	一一、一四三三	八〇九、〇五四八	
鹿足郡	一八七、二〇四二	一一二、三二一七	二七、四一六二	八三、二九七九	二、一五〇七	一〇、八六三七	一六、九九六八	四四〇、二五六一
石見國	—	—	—	—	—	—	—	—
隱岐島	一七三、七六一五	四六、〇六六三	六〇、五四二一	七二、三〇九九	一〇〇、四二九〇	一〇、九九一九		四六四、二三〇七
隱地								
周吉								
海士								
知夫								
島根縣	五一八五、五四五三	三三五八、二三二四	一六三七、〇七四一	一〇三八、四六四七	十六八、八二五六	二〇四、〇三五五	二三、〇八三三	一、二〇〇六、六七二五

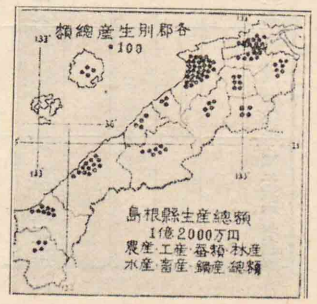
農業　農産價格は、全生産額の四三%に該當し、農業者も亦、全人口の六六%が、之に從事してゐる故に、本縣の主生業である。

農産總額五一八六萬圓の中、米は其の半額に達し、其の他のものは極めて尠い。

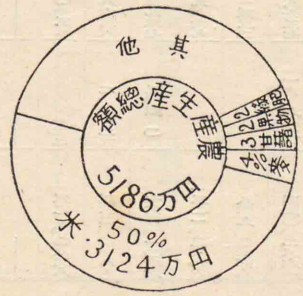
大正十四年度島根縣農産額(廿五萬以上のもの)

米……三一四萬圓　果物……九八萬圓　大豆……七五萬圓
麥……二三四萬圓　綠肥……九一萬圓　三椏……三五萬圓
甘藷……一四五萬圓　大根……七二萬圓　小豆……三一萬圓
茄子……三一萬圓　楮……二八萬圓

【圖解】郡別生産額比較圖



【圖解】農産物百分比



米　の平年産額は、百萬石迄のもので、一人當り一石三斗二合で、僅に自給自足して居り、主産地は簸川・八束・能義の三郡に多く一般に石見は尠い。此の順位が、生産面積の順位に略々一致してゐるのは面白い。

米作分布の群(グループ)を考察すると、第四十六頁の低地列圖、若くは、第七頁の水田自然位置圖と符合する事が明瞭である。最大の群は、先づ(一)簸川平野で、松葉堰から、斐伊川の水利を得て、一望の美田を灌漑してゐるが、西部海岸部の、稻佐灣砂丘地帶を除いてゐる。(二)廣瀨・安來附近の飯梨・伯太川流域の群は、之に亞ぎ、河形タイプをなす。(三)高津平野は、丘陵性平野で、群が密集してゐない。

米收穫高の一人當り食量一石三斗となる

之等の大核心以外は、一般に開析高地の低地、若くは谷頭盆地に、散布形式に分布し、斐伊川流域の支流が、見事な樹枝型を見せ、高津川が、之に類する以外、格別に顯著な配列を見出すことが出來ない。然し見出せないまゝが、矢張り散布型の特色と言はねばならぬ。

米質は、一般に花崗岩地帶の本縣としては、良質でなければならぬが、氣候の關係で結實期の雨量濕度尙尠からぬ上に、日照少ければ乾燥不充分、從而貯藏困難である。但し仁多米の如きは、花崗岩盆地で育成され、乾燥さへ好ければ、聲價を得べき筈である。一般に、出雲裏及石見裏では、初

各郡市大正十四年收量

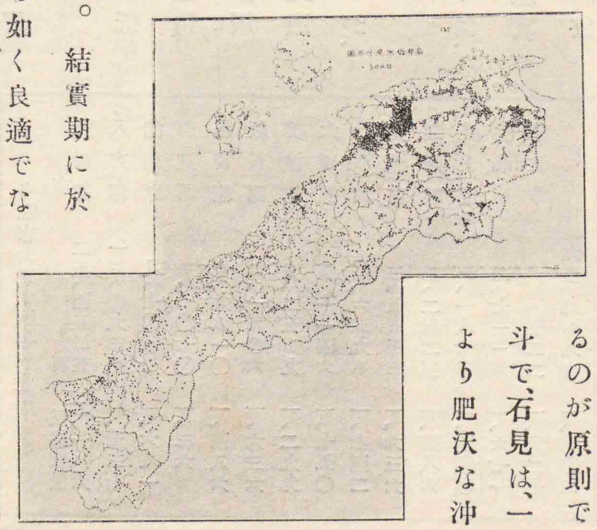
	石	反部收量
簸川郡	二五、四五二五	二、一八六
八束郡	一三、〇九三四	一、七三七
能義郡	八、七〇八七	一、六八一
那賀郡	十、七〇七〇	一、三六五
邑智郡	六、九六一〇	一、四八六
飯石郡	六、一五〇六	一、六三六
美濃郡	五、二五五九	一、二九九
大原郡	五、一一四六	一、七五〇
仁多郡	四、六五九八	一、七四二
安濃郡	三、五五三三	一、六三六
邇摩郡	三、二五二三	一、四八六
鹿足郡	三、一八七〇	一、四〇〇
隱岐島	二、七一一六	一、六七一
松江市	七二二	一、八二七
計	九五、九六九九	一、〇〇三

筑後平野は二石三斗以上三石の收穫がある

【圖解】市町村別米產分布圖

夏の氣溫上昇率の大なる時植付け、九月以後の氣溫下降率は、より大であるから早く收穫してゐる。之に反し、海岸部は、生育期間が長いため龜次(荒島村廣田龜次明治初年選定)等の晩稻を栽培するのが原則である。一反步當り收穫は、出雲は、一石七斗で、石見は、一石四斗の相違がある。之は出雲は石見より肥沃な沖積層で而も裏作に綠肥を多く栽培して、此の夏作の單種生產に、全力を擧げる狀態に反して、石見では開析山間の低地が多いので、勞して効少なければ、自ら畑作にも多大な勞力を入れて多種生產を望むからである。然し、他地方に比較すれば出雲の反當收量も、尙非常に遜色がある。結實期に於ける山陰の日照・雨量・濕度は、到底表日本の如く良適でないが爲で、たゞに米質を損するばかりでなく、實に收量にも影響するのである。

麥　米以外は、產額極めて低下し、麥も全體で十五萬石に過ぎず。中大麥最も



【圖解】冬作綠肥と菜種

多く、裸麥・小麥は、併せて大麥の半分に足らぬ。畑栽培が主で、乾田反別は、其の三分の一に當る。

水の恩惠のある所は、米を主要食料とし、米價が經濟の標準である國人にとつては、努めて水田化するのであるが、麥の群を吟味すれば、石見の沿岸部及隱岐島前並に北浦は、明らかに高地耕作の特色を呈してゐる。之等は卽ち、水田になし能はざる丘陵性の斜面が大部分を占め、過去の生活民が開墾し續けた努力の跡がどこにも認められる。火山麓の幼年地貌は、米にも麥にもあづからぬ產業上の島であるが、(大根島の大麥は例外)一般は奧地の多雨地帶は、冬季の積雪が二毛作に妨害して、麥作も尠い。奧飯石等は之に該當する。

各郡市大正十四年麥收量

		石
那賀郡	三、五一五九	
八東郡	二、〇六〇五	
美濃郡	一、七六八九	
簸川郡	一、四四八五	
隱岐島	一、三四〇三	
邑智郡	一、〇八三八	
邇摩郡	一、〇八三八	
能義郡	一、〇〇七〇	
鹿足郡	五八三六	
安濃郡	五三一七	
大原郡	二〇八五	
飯石郡	一七八一	
仁多郡	一五二九	
松江市	二〇	
計	一五、〇八七二	

簸川平野西部は、水田の島であつたから、大麥を産し、美濃・鹿足は、本縣の寡雨地帶で、裸麥を多産するから、大麥のグラフで島となつてゐる。

甘藷 は氣溫の暖かなる沿岸に多く、石見に多い。

大小豆 は冷涼な氣溫にも適し、石見・隱岐に多い。

粟・黍・麻 も石見の中央部に多い。菜種もさうであつた。

【圖解】市町村別麥作分布圖 大麥及び裸麥

一般に石見は、出雲の如く米の産出に惠まれぬ爲めに、畑作の多種生産を擧げ、甘藷・雜穀を混食する。これ全く、地形に左右されてゐるのは餘儀ない譯で、勞多く得る所は寧ろ少いのである。

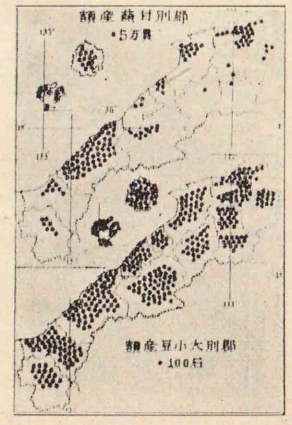
【圖解】夏作（其ノ一）甘藷 大小豆

大根・茄子 は實用蔬菜なれば、人口に比例して八束・簸川の兩郡に多く、又新鮮なるものを輸送するに便なる鐵道沿線にも多い。

楮・三椏 楮は石見に獨占の形で、三椏は却て出雲に多い。但三椏の産額は、楮のそれを超過してゐる。

特殊作物 茶・櫨も本縣に生産し、北日本の櫨も南日本に卓越する茶も、共に生産することは、やはり本縣が氣候上の漸移帶であることを肯かせる。

果物 の分布は、人口分布に比例して沿岸部に多い。卽ち都市の需要を充たすべく、八束・能義・簸川・那賀・美濃等は十萬貫以上を産し、種類は八種以上に亙る。蜜柑地帶を見るに、面白い事には、年氣溫十四度線以内に限られ、沿岸部でも西北風に依つて、冬季樹梢を害せられる斜面には育成せぬ。要するに、本縣の如



【圖解】夏作（其ノ二）粟、黍、麻

葡萄の如きは砂土に適し縣下七百町歩の砂濱に灌漑方法を講じて利用すべきである。

き夏は濕帶、冬は寒風吹き荒ぶ地方としては、柿・梨・葡萄以外に栽培の可能性が少い。

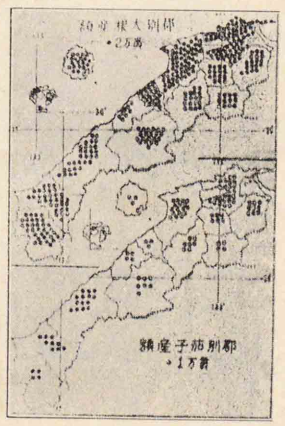
農事試驗場　は簸川郡鹽冶村に在り、又美濃郡吉田村及隱岐中條村に各吉田・八田分場がある。こは(一)農産の改良・增殖に關し試驗し(二)農事の模範を示し(三)農事に關する調査設計及督勵を爲す。

農會　は各町村に在りて、郡農會・縣農會の系統を有し、農事の奬勵・指導の任にあたる。

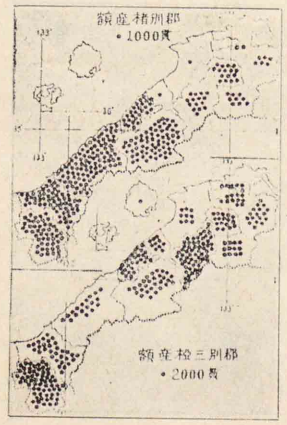
米穀檢査　輸出米には、乾燥・調製・俵裝等の檢査を施すことゝなつて居り、樞要地に檢査所が置いてある。

工業　工業生産價格は全生産價格の廿七%に該當し、工業者人口も、全人口の十三%を數へ、從て農業に亞ぐ生業となり、近年著しく從業者の增加を示してゐる。內工場數は、

【圖解】疏菜類・大根、茄子



【圖解】製紙作物・楮、三椏



縣下工場法適用數三六
同上職工數六二一八
內簸川郡四〇〇〇
同松江市三六六

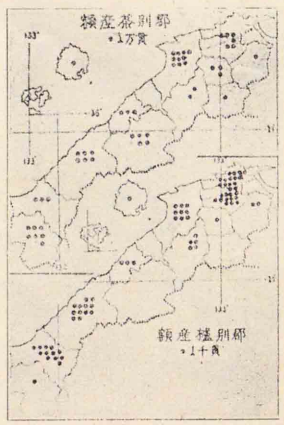
職工五人以上を使用するもの三百卅九工場あれども、多くは家內工業の域にある。

工産總額三二・五八萬圓の中、生絲清酒は其の二十%に達し、尙醬油・瓦・罐詰和紙は、各百萬圓以上の産額に達す。

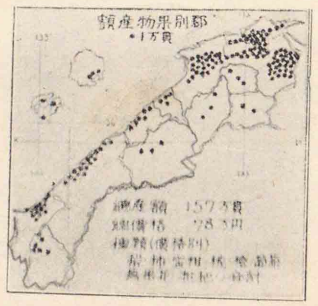
大正十四年度島根縣工産額(三十萬圓以上のもの)

生絲……六九七萬圓　瓦……二〇三萬圓
和紙……一〇一萬圓　疊表莫産……四七萬圓　清酒……六九五萬圓
菓子……一四七萬圓　陶磁器……六八萬圓　汽機及汽罐……三六萬圓
醬油……二〇五萬圓　罐詰……一〇六萬圓　和洋服……六七萬圓
廣瀨絣……三六萬圓　製茶……三三萬圓　藁製品……三一萬圓

【圖解】特殊作物・櫨、茶



【圖解】果物分布圖及市町村別蜜柑分布圖



生絲　は從來、座繰製絲に過ぎなかつたが、近年工場作業に係る、大量生産の機運に向ひて、工産物の主位に達し、尙激增の傾向がある。原料は、勿論縣內産繭に仰ぐけれども、尙消化剩餘繭は縣外へ搬出せらる。

販路は、福井・石川の羽二重・京都の西陣織原料となり、又橫濱生絲問屋へ仕向

けられて、品質良好である。製絲工場は卅二ありて、就中簸川郡最も盛んで、濱田・益田・津和野等之に亞ぐ。

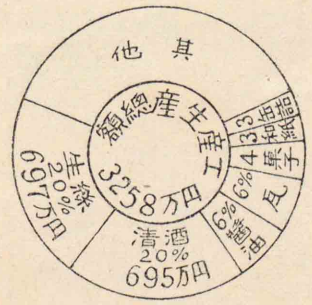
片倉製絲分工場　松江市　江津町
綾部郡是製絲分工場　鹽谷村　三成村
日本製絲分工場　平田町　平田製絲株式會社
鐘淵紡績分工場　大津町

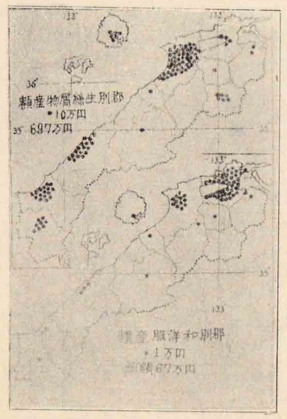
和洋服　は文化に比例して、松江・今市等を主産地とする。

清酒　は各郡とも、酒造組合を設け、堅實に發展し、産地は簸川・松江・美濃・能義・那賀・鹿足等、一般に文化交通の開けた、沿岸地方に産し、用米は多く、本縣産米を使用するも、出雲地方は攝播の優良米を、石西は防長米を移入する。販路は大部分縣内に消費され、尙鳥取・山口・廣島九州・朝鮮等に搬出せらる。

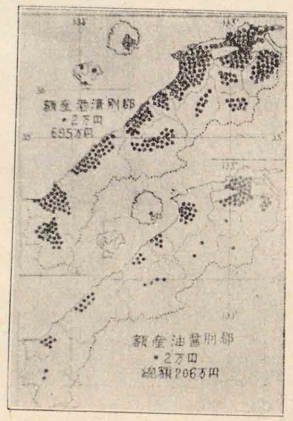
醬油　は出雲・石見に製造業組合組織され、品質濃厚・醇色との好評がある。産出は松江附近を主とし、原料の大豆は、近時朝鮮より移入する。餘剩は酒と同じく、他地方へ販出するも多からず。

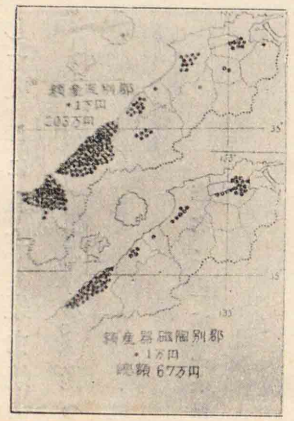
【圖解】工産物百分比





【圖解】生絲及罐詰和洋服





【圖解】清酒及醬油

瓦　は數百年前より製陶せられ、出雲瓦は量少く軟質の黑瓦で、石見瓦は赤釉瓦で、よく霜雪に堪ゆる硬質堅固に造られ、石見の特産品である。從而、石見瓦は、鳥取・兵庫・山口・京都・北九州等に搬出せられる。一般に山陰に販路を有するも、より霜雪の多い地方に販路を開く余地はないであらうか。

陶磁器　と瓦との分布を見るに、一般に第三紀層、若くは、洪積層の海成粘土に、一致するを知るべく、從而沿岸部に限られてゐる。圖中松江附近のものを、出雲燒(樂山燒、布志名燒)と稱し、石見地方のものを、石見燒と總稱する。樂山燒は、松江の北郊川津村樂山に産す。此の地、松平家の別墅にして二代藩主綱隆、延寶年中萩の陶工倉崎權兵衞を聘して窯を此の地

【圖解】粗陶器瓦及陶磁器

石見赤瓦の强敵は石川縣にある。

出雲燒の强敵は四日市附近大正萬古燒にある。

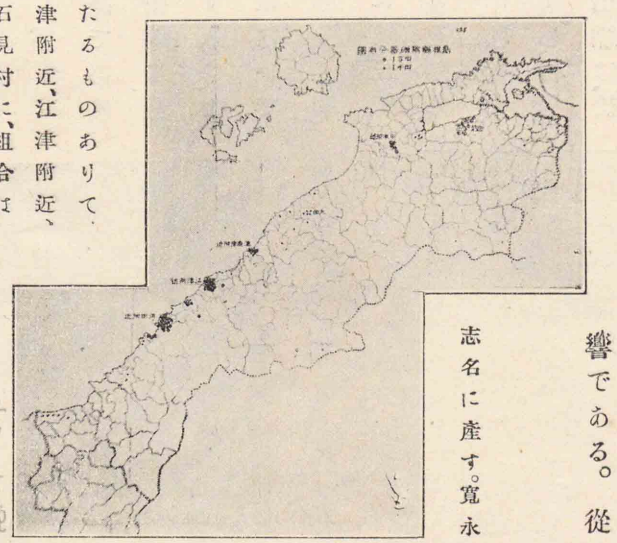
出雲燒普通品の原料は八束郡湯町、大原郡三原等の花崗岩質粘土なり。

に築かしめしに始まり、天明六年藩主治郷(不昧公と號す)茶道に通じ、長岡住右衞門をして樂山燒を再興せしめ、代々斯業に從事して今日に及ぶ。樂山燒の雅致あるは、當時茶道所謂雲州流の影響である。從つて產品は、茶器花瓶等を主とする。

【圖解】陶磁器產出分布圖

【布志名燒】は、松江の南部玉湯村宇布中、船木與次郎兵衞の創業にかゝり、爾來百五十年を通じて、種々改善せられた。本品は、黃釉を用ひて優美なる特色あるも、稍軟質の憾みがある。產額は遙に樂山燒に優る。花瓶・湯呑・蓋物を製す。

【石見燒】那賀郡江津町の森田某寶曆十三年周防より傳習し來たりたるを創始とし、其の後、備前より陶工の來たるものありて、原土豐富なる、石見沿岸に流布し溫泉津附近、江津附近、濱田附近に盛にして、殊に濱田の東郊石見村に、組合は模範工場を設けて、改善を圖りつゝある。所謂粗陶器にして、專ら庖厨の器具に適するは、其硬質なる又耐酸性の特色あるが爲めである。かく實用的で、且低廉な



志名に產す。寬永年

長濱人形の原料は富士岩質粘土なり

【圖解】和紙及罐詰

れば需要多く、產額は五十萬圓に達し、出雲燒の二十萬圓を遙に凌駕す。

【長濱燒と錦山燒】長濱燒は津和野名產たる樂燒を傳習し、博多人形に類せる所謂長濱人形を產す。錦山燒は、安來町比賣塚山下に窯場ありて、製品近代的意匠と、古味を帶び、紺青の花瓶・火鉢等を產す。

陶土は原產地に豐富であるが、釉藥は大阪より仕入れ、出雲では、爾來石粉・凝灰岩を混用する。販路亦內地は勿論朝鮮へも移出される。

和紙　三椏・楮の產は多大なるも、製紙業は、之に比例せず、未だ手漉操業の域を脫せず。又冬季の農閑を利用する家庭工業の狀態から、今や機械漉專業工場を有する傾向となりつゝある。古來石見半紙の名は、延喜時代既に石見の貢物として知られ、津和野藩の如きは、殊に奬勵怠りなかつたものであるが、眞漉なるを以て色稍々黑けれども、紙質强靭を以て愛用せらる。石見半紙は、鹿足・美濃・那賀・邑智に產し、出雲は大原郡盛んである。販路は大阪を主とし、京都・東京・廣島とす。

罐詰　松江・濱田・西鄕を中心とし、日露役軍需要品として、隆盛を見るに至り、其

罐詰業は西郷浦郷・安來・松江・江角・濱田にあり。

の一般需要增加と共に、販路を大阪・廣島・下關等に開き、縣內は鮮魚豐富なれば需要極めて少し。松江は宍道湖產の白魚等の淡水魚を原料とするが、其の他は近海豐富なる鹹水魚鯖・鰯に次いで蔬菜を用ふ。

疊表・莫莚　美濃郡及松江に產し、原料藺草は、冬季栽植し、翌春田植前に刈り取るため、概して瀨戸內等の暖地が本場なるが、美濃郡に於いて、之が栽培加工並び行はる。多く冬季農閑に製織する、副業品である。

【圖解】製茶及疊表莫莚

製茶　は產額少なけれども大原・八束・松江・簸川・鹿足郡等に產す。出雲人は一般に、喫茶の嗜好あり。

汽機及汽罐　は三十六萬圓、船舶は十萬圓に達し、本縣に於ける機械工業で、松江を主とし、濱田にも產す。

廣瀨絣　は廣瀨町を中心とし手織家內工業から力織機工場經營に移らうとしてゐる。文政七年、廣瀨町醫師長岡の妻女を以て創始なりと傳へらる。

菓子及其他　菓子の年產額は、工產品の第五位にありて、意外に多く、松江・八束・簸川等の人口稠密の地方に生產する。然るに履物(廿八萬圓)の桐材は、一般に生產され、農家冬季農閑の藁製品(三十一萬圓)邇摩郡大口村安井某の創めた杞柳製品の六萬圓・木蠟及蠟燭の卅二萬圓等がある。

特產物　松江の八雲塗は、年產額十二萬圓に達し、明治廿年頃より創められ、堅地にして優美雅致あり。近時靑貝等を嵌入、彩漆研出等の特色を發揮して、世の嗜好に投じつゝある。瑪瑙細工も亦松江の特產、殊に靑瑪瑙は出雲瑪瑙の名聲高く、創始は遠く太古に在る。玉湯村大字玉造華泉山の原石は、豐富ならず、從而價格廉價ならず。其の他邇摩郡西田葛(澱粉)江川午旁等聲價がある。工產物を通覽するに、生糸・杞柳・八雲塗等の寒地の本場に類するもの少くして、釀造・疊表・陶器・木蠟等の、瀨戸內若くは、北九州の本場に類するもの多く、從而多種多樣に亙る。又農產品の如く、出雲と石見とに於いて產額の逕庭あることなく、稍々均霑してゐる狀態である。

【圖解】藁製品及菓子

蠶業　蠶業の總價格は、全生產價格の十三%に相當し、工產額の約半分である。

中春繭八二〇萬圓、夏秋繭七一八萬圓蠶種一〇〇萬圓に達す。（大正十四年）繭・出雲は石見の三倍量を產し簸川・大原を主產地とす。簸川平野西部の砂丘地帶の群は最も顯著で、荒木村一村でとし、優に本六萬貫に達せん大根島のみ縣第一位である。でも、九萬貫を產し、何れも水田の島であつた之等の地は、殆ど桑園で充され、主業となつてゐる。一般に沿岸部及斐伊川・江川・高津川流域に於て、それ等の汎濫原が栽桑地帶であるが、汎濫原を有せぬ神門川流域、若くは年平均十三度以下線の雨量二千粍以上の奥飯石・石見裏等は、殆ど蠶繭

【圖解】市町村別島根縣產繭（春蠶及夏秋蠶）分布圖

產繭額（大正十五年）

市郡	春夏秋繭
松江市	三〇五貫
八束郡	三、七九、〇二八貫
能義郡	六二、九三一貫
仁多郡	三五、六一九貫
大原郡	一三七、九一四貫
飯石郡	八五、三八八貫
簸川郡	五六〇、二二五貫
出雲國	一一五一、一〇五貫
安濃郡	五一、二一四貫
邇摩郡	三二、二七七貫
邑智郡	一一二、八一二貫
那賀郡	八九、四五七貫
美濃郡	一五、一六九貫
鹿足郡	三〇、四八六貫
石見國	三八一、四一五貫
隱岐島	六、六七五貫
島根縣	一五九九、五七六貫

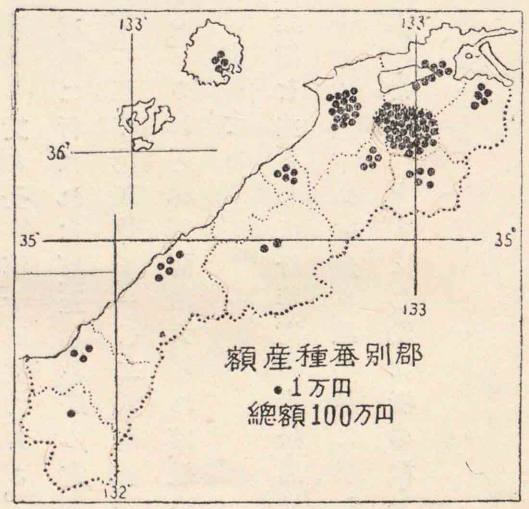
上の島である。隱岐に於いては島前が多い。

養蠶業は、我が國輸出向きの有望な產業であるは勿論であるが、特に本縣農家の副業的第一の生業で、全農家の四割迄が之に從事し、一戶當り三百圓乃至四百圓の收入に當り、如何に農村經濟を緩和するか知れない。栽桑反別七千三百余町歩に達し、年々增加しつゝある。然し縣下至る所、最も普遍的生業ではあるが、背後霜雪多き所は、桑葉被害多く、氣候に左右されるから、桑の作付反別も、奥地に於いて制限される。

蠶種の生產は風穴貯藏を要するから、清涼な氣候を必要とし、先進縣長野・富山等に類する、氣候に該當する雲南、殊に大原郡に於て、五分ノ二の生產を擧げてゐる。

蠶業取締所　縣は斯業發達の爲め、支所六を設置して奬勵し、又川本農蠶・江津

【圖解】蠶種產額



女子實業學校等は技術者を養成してゐる。

林業 林野面積は、三千六百五十余平方粁(約五十萬町歩)に及び、全面積の五四・七%に達し、(鏡川郡に於てすら四五%は山林である)實に全國第十三位にある。而も氣溫低からず、雨量多ければ、植林伐採適當に行はれなば、蓋し林野の富は、莫大に上るであらう。然るに林産額は蠶業に亞ぐ第四位で、一〇二八萬圓、全生産額の九%農産額の五分ノ一に相當する。されど林野面積大なれば、近時交通の發達につれて、産額漸く增加の氣運に向つてゐる。

縣の大部分は、暖帶林(樟帶)區域に屬し、濶葉樹を主として、針葉樹の赤松・黑松等あれども、背後七百米突内外、年平均氣溫十三度以下の區域は、溫帶林に屬し、奥羽地方の樹種に類して、針葉樹——杉・檜・羅漢柏(ヒバ)・栂(ツガ)等——を主とし、濶葉樹の欅・朴等繁茂す。

大正十四年度島根縣林産額(十萬圓以上のもの)

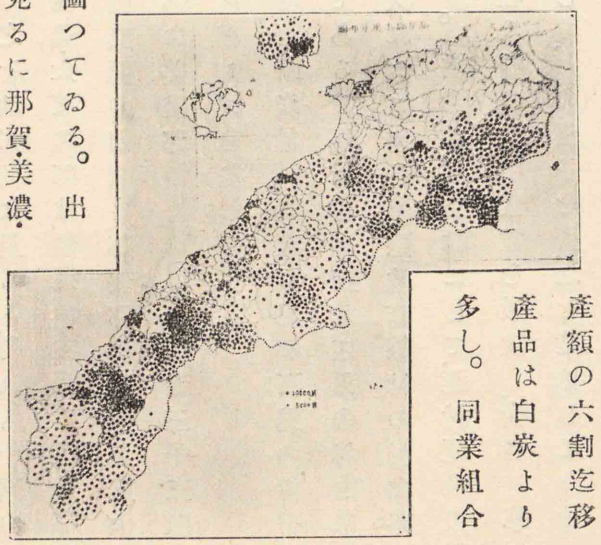
木炭……三五六萬圓	用材(針・濶)……二二五萬圓	竹材……一八萬圓	
薪炭材……二二八萬圓	草……五〇萬圓	椎茸……一一萬圓	

柴草は仁多・那賀等最も多く、薙畑式の林地から刈り採る。

木炭 産額は汽車開通後激增し、約二倍額に達せんとする。從而林産總額の

三分の一以上を占め、又全國中第五位に上り、本縣より野外へ移出する主要産物の一つである。仕向地は横濱・神戸・東京・大阪を主とし、産額の六割迄移出せられ、黑炭の方は、飯石・邑智・美濃・鹿足に組織せられ、木炭檢査所により、品質向上を圖つてゐる。出炭分布を見るに那賀・美濃・邑智・飯石・仁多・鹿足・能義等の順位で、概して山野面積に比例する。群の最大なるものは、石見木炭の名ある濱田及益田の背後

【圖解】市町村別木炭産額分布圖



郡別出炭額 (大正十四年)

八束郡	二二、六九七〇貫
能義郡	一二九、八三〇〇貫
仁多郡	二四、七〇〇〇貫
大原郡	七八、七四一〇貫
飯石郡	二三〇、五五八五貫
鏡川郡	四二、六一七〇貫
安濃郡	三六、七二五〇貫
邇摩郡	五〇、二〇二〇貫
邑智郡	二四六、〇五四六貫
那賀郡	三二一、〇二一六貫
美濃郡	二九二、二四五〇貫
鹿足郡	一八一、七九〇貫
隱岐島	一〇四、六〇〇〇貫
島根縣	一七六一、七八九七貫

を主とし、核心は濶葉樹林の位置にある。雲南・江川流域等之に次ぐ。然るに之等群と群との中間、及島根半島は、何れも交通不便な爲め、生産上の島を現出してゐる。之を地形的に見ると、何れも中國山脈の支脈に該當する事が分る。卽ち仁多・能義・大原の郡は、船通山支脈に、飯石郡は大万木鍋山支脈に、邑智郡は市太郎冠山支脈の前面に、那賀郡は、彌畝大麻山支脈の東部に、美濃郡のものは、安藏寺三子支脈の東部にグループをなしてゐる。

薪炭材・用材　薪炭材は、那賀・鹿足等石見の溫帶林に豐富である。用材も亦美濃・匹見の杉山は古來斧を入れざる密林で、隱岐布施村の杉山亦有名である。前者は原生林にして、運材・運炭の爲め、道川・匹見・益田驛間實に三十粁(十八哩八分)の空中索道を敷設し、後者は享保年中、醫師原玄琢大和吉野造林を視察して、杉の種子を得、之を造林して、今や全村面積の九割、千六百余町歩を占める、鬱蒼たる大森林を呈するに至つた。

用材は、丸太(バルブ)材・角材・枕木等として搬出される。

【圖解】薪炭材及用材

森林には、保安林として、各々の目的により、縣下に四千七百余箇所伐採制限さる魚附林、防風林、土砂扞止林、水源涵養林、風致林等あり。

竹材・椎茸　竹材は、八束・簸川・美濃・鹿足等沿岸に多い。鹿足・邑智は高津川及江川の溫暖なる、彎入部に產す。椎茸は暖國性の產物で、濶葉林木に富む美濃郡を主產地とし、鹿足・隱岐等之に亞ぐ。

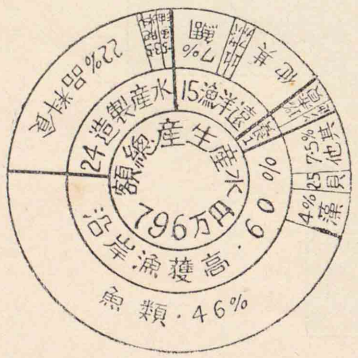
【圖解】竹材と椎茸

松茸產額は年產額三萬六千圓に過ぎずして、八束・簸川・美濃の沿岸に多い。

水產業　水產價格は全生產額の六%に該當し、七百六十九萬圓に達す。之に從事する水產業者も、全人口の二%三萬七千五百人(本業及副業者)に過ぎない。本縣の海岸線は、五三九粁而も、海棚廣く、暖寒流に惠まれ、又大湖を有し乍ら、產額の之に伴はざるは、冬季の荒天に禍せらるゝも一因なるが、新式漁法の普及せざると遠洋漁業少くして、近海漁業に依るが爲めとである。

一、沿岸漁獲高　四六八萬圓……六〇%

魚類	三五九萬圓……鯛・鯖・鰯・柔魚・鰈・鰺・鰤・鮪
藻類	三〇萬圓……和布・紫菜
貝類	二〇萬圓……赤貝・榮螺・鮑



【圖解】大正十四年度水產額百分比

其他　五八萬圓

二、水産製造高　一八二萬圓……二四%

食料品　一七四萬圓……素乾 四〇萬圓……柔魚

肥料　六萬圓　鹽製 二一萬圓……鰮・鰺・鯖

魚油　一萬圓　煮乾 一九萬圓……鰮

節類 二萬圓……鰮・鯖

三、遠洋漁獲高　一一一萬圓……一五%

鯛　五二萬圓

鱶　四萬圓

鯖　四萬圓

四、水産養殖高　八・五萬圓……一%

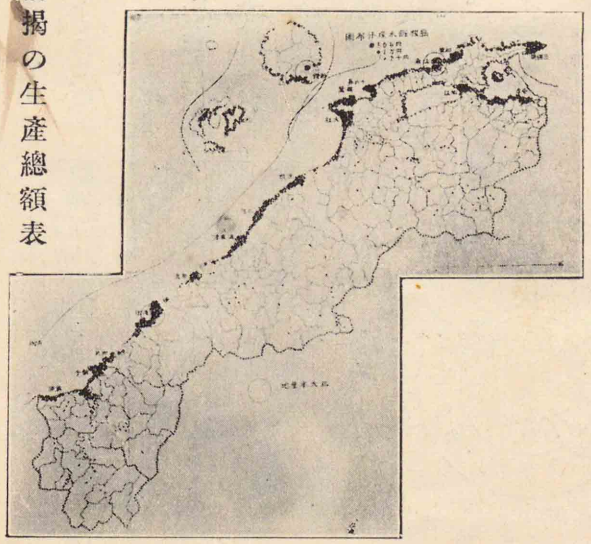
赤貝　五・五萬圓

鯉　〇・二萬圓

計　七六九萬圓……一〇〇%

【圖解】市町村別水産額分布圖

水産額は八束・那賀・簸川・隱岐・邇摩・美濃・安濃の順位で、隱岐を除く以外は全く海岸線の長短に正比してゐる。（前掲の生産總額表參照）



北浦海岸　は島前へ續く海棚を控へ、而も沖合から海棚斜面へ寒流低潮の發達する毎に、暖流を海岸に壓迫して、魚類を沿岸に集中せしめる結果となるから、漁礁至る所にありて、實に本縣第一の漁區である。北浦海岸は、從前の分布圖に徵しても、水田或ひは林産上の島であつて、唯僅かに大麥と、産繭の地帶に這入つてゐたのであるが、之は此の地の主生業の副業に過ぎない。從而リアスの灣頭必らず漁村聚落營まれ、其の中に、須要な魚市場が分布してゐる。

美保關町（年額二十萬圓）　加賀村（附近を含め年額十一萬圓）

惠曇村江角（年額百四十萬圓。實に縣下第一位の群である）

北濱村十六島（年額十三萬圓）　鵜鷺村鷺浦（年額十三萬圓）

大社町（年額三十萬圓。日御碕半島のため海岸潮流發達し好漁場をなす）

石見海岸　の人口密度が顯著であつたのは、海棚から生産を擧げる漁村が、相踵ぐからで、海岸平野だけでは地積貧弱で、斯樣な人口を、抱擁するに足らない。

波根村（二村で年額十六萬圓）　仁萬村附近（年額十五萬圓）

溫泉津町（年額十一萬圓）　都濃村附近（年額十萬圓）

濱田町（附近を含め百二十六萬圓。實に縣下第二位の群である）

周布村（八萬圓）　岡見村（六萬圓）

鎌手村大樹濱（年額二十一萬圓）　吉田村（年額七萬圓）

小野村飯浦（年額二十一萬圓）

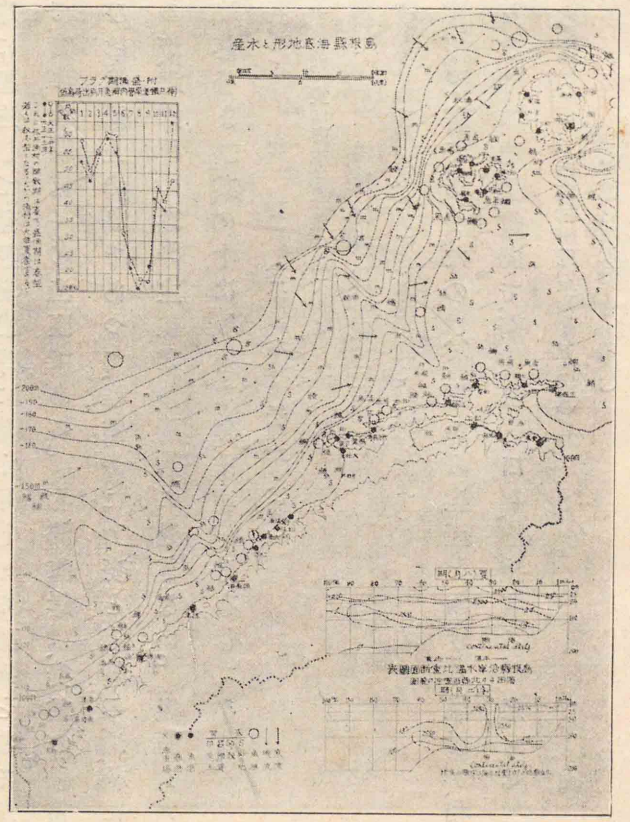
隱岐島　の漁業は農業に伯仲する主業で、西及南に魚礁を有し、殊に寒流の消長は、隨時暖流を接近せしめる好漁場に在る。但特産隱岐鰯（スルメ）の柔魚は、近年魚獲稍々減少す。

西郷町（附近二村併せて年額六十三萬圓。縣下**第三位**の群である）

海士村（菱及智々井。年額二十四萬圓）

浦郷村（浦郷・別府。年額十二萬圓）

中海　は赤貝・白魚鰕等に限り、他の鹹水魚を得ざるは、海流の及ぼさゞるが爲めで、安來（八萬圓）大



【圖解】海底地形と水産グラフ

根島（七萬圓）揖屋村（附近と共に十二萬圓）等の群がある。こゝでは、ソリコ舟で、底曳網を動搖せしめる風情は、地方色豊かである。

宍道湖　は淡水湖なれば、白魚・公魚（ワカサギ）・鰻・鯉等を産し、松江（十二萬圓）出東附近（三萬圓）に群（グループ）をなす。

河川　鮎を主とし、高津川（四萬圓）江川（二萬五千圓）斐伊川（六千圓）神門川（三千圓）等に産す。古生層地帶を流れる高津川は、他の花崗岩地帶の諸河よりも、産額多く、美味で所謂香魚として名がある。これ飼料の浮游微生物（プランクトン）の爲めである。尙河口附近が偶然にも水産額分布圖の島に相當するが如く見えるが、然も必ず河口に接近して、漁獲高が少くない。大社・都濃・大濱等が、それである。即ち淡水混濁の汎濫は、海岸潮流（Coastal Current）の消長を誘起して、却て魚群は、混濁の中に飼料を求め、若くは産卵に來るからである。

沿岸漁獲物　沿岸漁業に從事する漁船は、動力ナキモノ六五五三隻、動力アルモノ五五一五隻、全船舶の九五％に當る。漁獲物は勿論暖流魚大部分にして、寒流魚の鰈・鱈・鱈・鮭等は極めて尠く、一般に表日本の如く、水溫高からざれば、脂肪に富み、極めて美味である。主なるものを擧げると、

鯛(六七萬圓) 首産額に在る。下層魚類で、漁礁は一般に沖合にあり、盛漁期は八・九月である。八束那賀に多産す。

鯖(五八萬圓) 水溫十三度頃回遊し、從而春秋が盛漁期で、秋鯖が美味なのは、脂肪が增加するからである。八束・那賀・隱岐に多産す。

【圖解】鯛及鯖産額

鰮(五七萬圓) 水溫更に高き沿岸を回游するを以て、盛漁期は三月である。八束郡が主産地である。

【圖解】鰮・いか産額

いか(四八萬圓) 水溫十五六度を好みて回游するを以て、本縣では、十月——十二月が盛漁期である。隱岐が主産地であるが、二番いか即ち(カ・マ・ィスルメイカ)とも稱する堅甲を有せざる柔魚が、殆ど全部を占め、所謂隱岐鯣の聲譽がある。こは製品の優良なるばかりでなく、漁期が恰も、よく乾燥する時期に、在るからである。其の西鄕港外の漁火と、屋根より高く乾燥せ

るとに地方色が、顯はれてゐる。製品は主として、神戸・大阪を經て支那に送らる。されど近時は、沿岸は、不漁續きなれば、島前より動力船で、五・六時間も西方に出漁する。隱岐西方の漁區は、柔魚・鰈等の好漁礁多く、所謂北潮とて西北風の發達に依つて、深海部位から、寒冷なる低潮が暖流を陸地に壓迫する爲め、好漁場をなす。從而反對の東風發達すれば、暖流は沖合に擴散して、魚群を集約する結果とならないから、出漁を見合せる狀態である。一般に我が國裏日本の漁獲が北潮を利用することは、一特色と言はねばならぬ。

石見は一番いか(ヤリイカ)、及甲烏賊多く、槍柔魚は美味にして食膳用に供せらる。

鰈(ムレヒ)(廿六萬圓) 寒流魚定着性で、下層に棲み、隱岐漁場に豐富で、盛漁期は冬である。

鰺(廿二萬圓) 沿岸回游性で、盛漁期は八・九月である。

鰤(一六萬圓)	回游魚	二・三月	石見・北浦。
鱶(一二萬圓)	油鮫多く寒流魚	十二月—三月	北浦・隱岐。
鰯(シビラ)(一〇萬圓)	回游魚	八・九月	石見海岸。
鰻(九萬圓)	淡水魚	七・八月	尖道湖。

【圖解】鰈及鰺產額

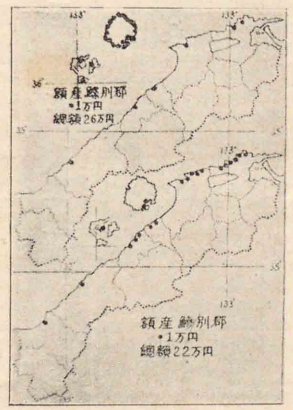
鮎（八萬圓）　同　上　八・九月　諸河の中流以上に多し。

藻類及貝類　藻類は年額三十萬圓に達し、和布（十一萬圓）は、日御碕メハハの名あり。紫菜（八萬圓）は、十六島（ウツブルイ）海苔有名である。低質は礫である。貝類は年額二十萬圓に達し、赤貝（七萬圓）は中海に、榮螺（六萬圓）は隱岐及北浦に、鮑（六萬圓）は那賀郡に、何れも荒磯に產す。

【圖解】和布及紫菜產額

海苔は十六島の外片江・雲津・村津・溫泉津・殿島のもの名あり。

水產製造物　前揭水產製造高表に述べし如く、一般に盛ならず。原料は、素乾に於ける隱岐の鯣を除く以外は、鰮・鯖等を用ひ肥料及魚肥には、專ら鰮を用ふ。煮乾し鰮は、味附用となり、鯖節等節類の尠きは、南國產と異り脂肪多過ぎて、乾燥し難く、從而品質宜しからざるが爲めである。



遠洋漁獲　遠洋漁業從事船は、動力附六四七隻乘組員五七〇人那賀・八束・簸川・美濃郡に限る。鯛（五二萬圓）最も多く、鰺・鯖等を漁撈す。多くは、對馬及朝鮮に出漁する。實に公海の富を探る者には、殆ど制限なしと言ふべきである。されど、尙遠洋漁業の不振は延いて水產額をして十年一日の觀を呈せしめてゐる。況して沿岸は、年々歲々荒され、勢ひ沖合漁業に俟たなければならぬ狀態に在る。

大正六年水產額六六七萬圓
大正十四年水產額七六九萬圓

水產養殖　海岸線に近き本縣は、勢ひ淡水魚養殖不振であるが、赤貝（五・五萬圓）は、中海に、鯉（二千圓）は海なき大原郡を主とし、波根湖之に次ぐ。

水產機關　島根縣水產會及漁業組合が、各郡に設けられ、縣は水產試驗場を松江・濱田・玉湯（尙養殖場もあり）惠曇に設け、斯業の發達を期してゐる。

牧畜業　畜產額は、全生產額の一・八％に該當し、二〇四萬圓に過ぎない。縣下の原野牧場面積は、十六平方粁なるも、山野は乏しからず。されど飯石・仁多郡等以外は、一般に家畜飼養多く、從而一戶當りの家畜も多からず。

牧畜中牛は、他の中國諸縣と比肩して、各府縣中第八位（廣島・兵庫・岡山・鹿兒島・長崎・大分・山口）にありて、山口縣と伯仲するが、馬に至りては極めて尠し。養鷄は稍々盛にして、全國平均に劣らず。

島根縣畜產額（大正十四年度）

大正十三年主要牛產地

一、廣島縣　一〇一、六六三
二、兵庫縣　九八、一七五
三、岡山縣　九六、二六七
四、鹿兒島縣　八四、八六四
五、長崎縣　七一、九六五
六、大分縣　六八、六五
七、山口縣　七〇、〇〇五
八、島根縣　六六、五一五
五、四七

牛　六・三〇五六頭……年々生牛一萬五千頭を隣接縣及近畿兵庫等へ移出すれども、尙二千頭ばかりは犢を移入して、生產不足數を補ふ。縣內屠殺額五十萬圓。牛乳十七萬圓計六十七萬圓。

馬　四六六四頭……年々屠殺額は僅に四千圓。

豚　三八七八頭……同じく屠殺額二萬圓に達す。

鷄　四・五八六一羽……鷄卵六二萬圓を生產す。

山羊　一七〇頭

蜜蜂　五四〇二箱……年一萬七千圓の蜂蜜及蜜蠟を產す。

牛　大正元年には、八萬頭を算する狀態であつたが、歐洲大戰の影響を受けて、牛肉、牛皮の需要を加へ、大正五年以降頭數漸次減少し、今日は六萬三千頭に激減し、全國第七位より第八位に降る。

密度は、飯石邑智・那賀・隱岐島に多く、出雲殊に飯石郡・安濃郡は、三瓶山麓の放牧場を有し、仁多郡八川牛は、稱揚せらる。島前は承久年間、後鳥羽上皇崎港より、海士村へ通輦の折、一木だになき綠の原に群犢が戲れ居るに、輦を駐めさせられしより、此の地今日も尙鬪牛行はる。島前の地

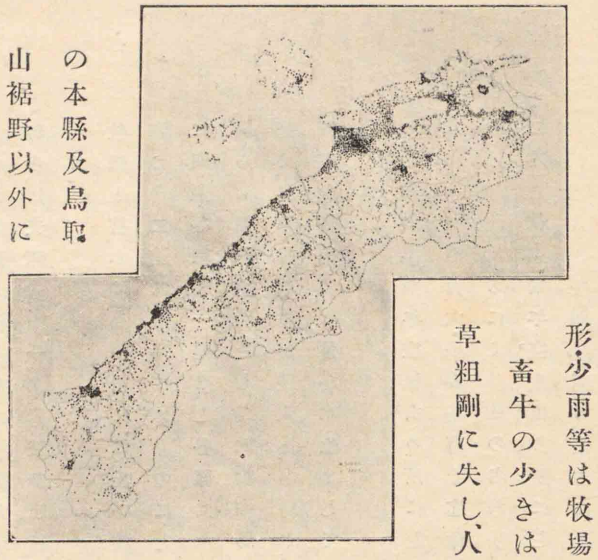
市郡	牛頭數
松江市	四四
八束郡	四、二二四
能義郡	四、三六三
仁多郡	四、五五五
大原郡	三、四五三
飯石郡	七、九七九
簸川郡	三、八一三
安濃郡	三、九五七
邇摩郡	二、九二三
邑智郡	七、六三五
那賀郡	六、七八〇
美濃郡	四、九四八
鹿足郡	三、三二一
隱岐島	五、〇六一
島根縣	六三、〇五六

安濃郡は佐比賣村一村は一千三百五十二頭を有し縣下第一位なり。

【圖解】市町村別畜牛分布圖

【圖解】船通山牧場

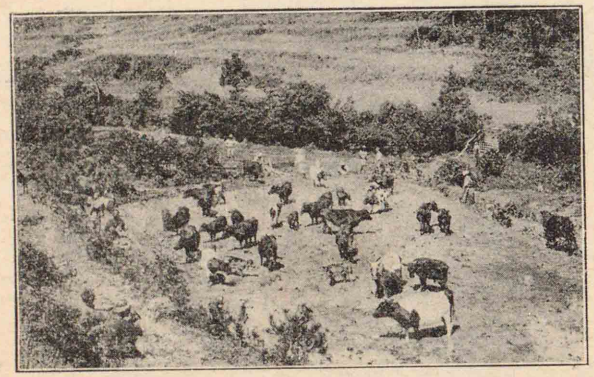
縣下主要牧場（面積順）
三瓶牧場　安濃佐比賣村
船通山牧場　仁多・鳥上村
琴引牧場　飯石・頓原村
坊床牧場　能義・比田村
鯛巢牧場　仁多・阿井村
三國山牧場　仁多・八川村
大谷牧場　能義・井尻村
掛合牧場　飯石・掛合村
大平牧場　能義・井尻村



形・少雨等は牧場に適し、牧畑として耕・牧置換の特風がある。

畜牛の少きは島根半島で、山野は高溫多雨であるから、牧草粗剛に失し、人々は水產に主力を注ぐ爲めである。

廣島・岡山等の牧場が中國特有な準平原面を利用するに反し、中國裏縣が、多く火好牧場を有の本縣及鳥取山裾野以外にせぬ事は、地形の開析進める上に、雨量多ければ一般が家畜飼養の外はない爲である。まして晩秋から初春までの、冬枯れ時は、飼料は勢ひ稻藁等に依らねばならぬから、畜牛の發展も表中



國に比し、遙かに制限を受けてゐる。

隱岐の牧畑　島後は殆ど林地に變換、若くは荒廢したから、隱岐の牧畑といへば、現今島前の外方緩斜面に限られる。そこは樹木なく、一面の青草原を展望することが出來る。海士郡二十箇所千二百町歩、知夫郡二十一ヶ所三千四百町歩あり。

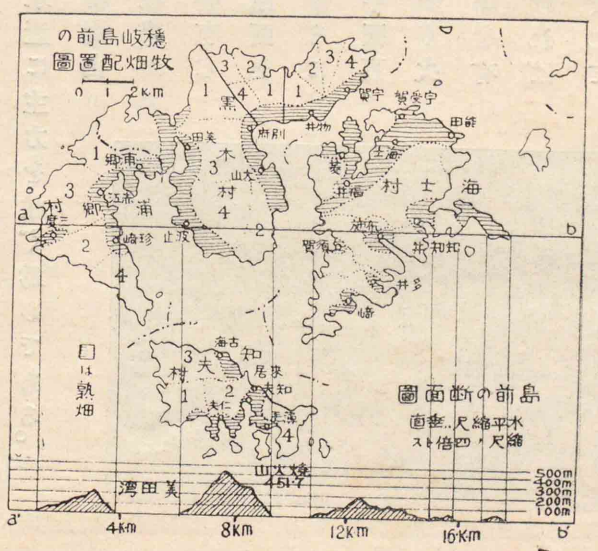
牧畑と言ふは、島の山又は丘を放牧と畑との二途に兼用するものにして、常に四區を以て一組とし、各區は木柵を繞らし區劃整然として放牧牛馬の散逸と、且作付中之が侵入とを防ぐ。四區の名稱は作付を本位として名付け

一、空き山……前年空、無山の所にして、十月大・小麥を蒔く迄休閑するにより此の名あり。

二、本　牧……前年空き山の所にして十月大・小麥を蒔きたるものにして、翌六月麥を刈り取り、直ちに大小豆又は蕎麥を蒔き十一月收穫す。故に一年二

四區の名稱は村によつて異る
浦郷
1 空き山
2 本牧山
3 粟山
4 空無山
黒木
秋麥山
麥山
クナ山
海士
大小麥山
大小豆山
稗山
粟山
大小豆山

【圖解】牧畑配置圖
一、空き山
二、本牧山
三、粟山
四、空無山



回收穫す。

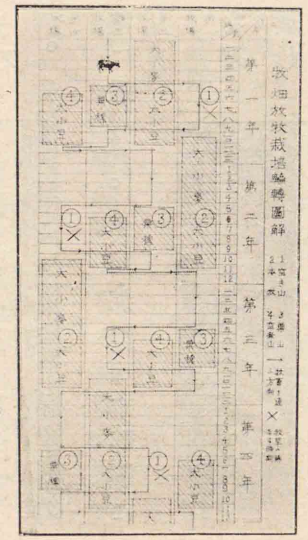
三、粟　山……前年本牧の所にして五月に粟・稗・黍等を蒔き九月收穫す。

四、空無山……前年粟山の所にして六月大小豆を蒔き、又は八月蕎麥を蒔き、九月收穫す。

斯くの如く四年を週期として作物を輪作循環し其の作物生育の前後には凡て牛馬を放牧する事は次圖に依りて諒解すべし。

牧畑輪轉耕作の起源は頗る古昔の創案にかゝり、一見粗放農業に似たれども、放牧によりて土地肥沃となりて施肥の要なく、勞作少く（除草一回でよし）して相當の收利があり、而も殘滓で牛を飼育する一舉兩得の方法は、他に類例を見ざる經濟的農法にして、之を改良するの餘地なきまで考案せられ、我國人文地理上有名なものである。

【圖解】隱岐の牧畑
横座の四區域の畑に縱座の四年を一週期として循環するを見よ。



尚牧司數名ありて、牛馬の隣接作付區に侵入するを監督し、牧移しとして甲區より乙區に移す期日を定める。此の作業を駄追といひ村民交代に出動して同一時に行ふ。又各區には各人の所有地混在するも、放牧權は全村民均等に提供せられ、美はしき共同事業となつてゐる。放牧牛馬は又耳印をなして所有者の識別をなす習慣である

馬　名馬の生産(宇治川先陣の佐々木高綱の乘馬)は、隱岐に產したる沿革あるも、維新後需要減少し、道路改修の爲め、駄用馬の必要少く、加ふるに、畜牛の飼養管理し易きより之に更ふる等、現在四千六百余頭に過ぎぬ。那賀以西に多く分布し、出雲の牛多きに對し、石見は馬匹數に於て優る。恐らく冬の雨量少き石西は飼養容易なるが、一因をなすのであらう。

【圖解】馬匹及豚頭數分布圖

豚　は頭數增加、品質向上の傾向ありて、京濱に送らる。簸川・那賀・八束郡等に多く、山間には未だ普及せぬ。

鷄　優良品種を移入し、鷄卵及廢鷄の販路を縣外に拓く等、近年に至りて養鷄は著しく發展してゐる。其の鷄卵のみにて、六二萬圓に達し、牛乳の一七萬圓に比し遙に多い。蓋し本縣人は牛乳飲用より鷄卵愛用の域にあるのである。簸川・那賀・八束郡等に

【圖解】鷄及蜜蜂分布圖

蜜蜂　一・七萬の蜂蜜及蜜蠟を產す。鹿足・美濃郡等、表日本型の氣候區に多く分布する。

鑛業　鑛產價格は、金生產價格の〇・二%にして、僅かに、二〇四萬圓に過ぎない。地殼變動の著しい本縣としては、鑛床貧弱なるは意外であり、而も近年金屬鑛の產額低落し、却て石材が首位を占めるに至つては、更に意想外である。

大正十四年度島根縣鑛產額

石材……二七萬圓	瑪瑙製品……一三萬圓	銑鐵……三・五萬圓	
亞砒酸……一七萬圓	金銀銅鉛鑛……二・三萬圓	石炭……〇・一萬圓	

石材　建築材の花崗岩は、縣下至る所に在れども、運搬の不便なる奥地、仁多・大原等は產額多けれども、廉價なるを免がれぬ。沿岸の第三紀層凝灰岩は加工し易く、且つ交通圈內に產するを以て、石材の首位を占む。主なるものを擧ぐれば、

來待石……凝灰岩……家庭用、庭園用綠苔附着速か……八束郡來待村
島石……玄武岩……堅硬なれば礎石用……八束郡大根島
荒島石……凝灰岩……樋石・竈・米搗粉(荒島砂の名あり)……能義郡荒島村
福光石(溫泉津石)……凝灰岩……石臼・墓石其他家庭用品……邇摩郡福光村

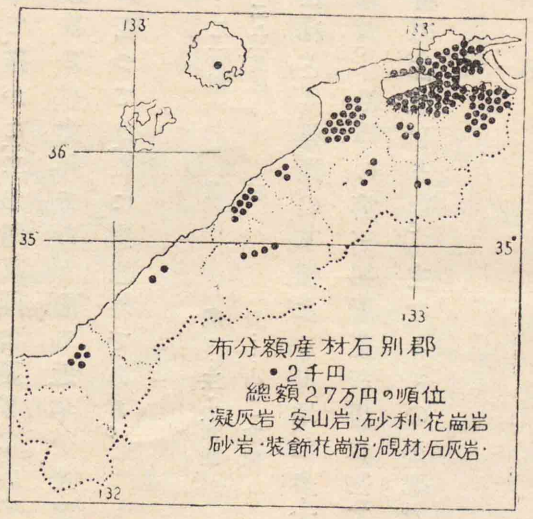
花崗岩……諸所に產す。美濃・邑智・飯石等に多く、建築材なれども、交通運輸の便なき限り埋藏のまゝ價値なし。
三原石……流紋岩……砥石用……邑智郡三原村

寶石　瑪瑙十三萬圓に達し、八束郡玉湯村華仙山に產し、母石は霞爛せる石英粗面岩にして、產額少く、特に青石と稱せられる綠色碧玉は他に同質のものなく、島雲瑪瑙の白眉である。製品には置物・花器・カフス釦・簪等あり。

其他黑曜石は、隱岐西鄕東南部「ザイノ池」より產し、黝黑にして、縞あり。馬蹄石と稱せられ、細工品となす。水晶は、邑智郡都賀村に產し、花崗岩の石英脈中に存し、草入水晶多し。

金屬鑛　鑛區十年前は、二十余ヶ所あり。主として銅鑛は、今や財界の變動で、殆ど休止の狀態に在りて、產額殆ど皆無の悲境に陷る。唯亞砒酸は、笹谷銅山の副製品であつたが、今や主客轉倒して年

【圖解】郡別石材產額



額十七萬に達す。

笹谷鑛山……鹿足郡津和野町の北方にあり。火成岩と古生層との接觸鑛脈にして、含銀銅及硫砒鐵鑛にして、現今亞砒酸のみを製出す。慶長年間は德川幕府の直轄であつたが、今は堀藤十郎の經營である。

大森鑛山……邇摩郡大森町附近にあり。古來延慶年間大內弘幸の經營にはじまる。德川氏は大森に代官所をおきて管せしめ、一時銀產額多く大森銀山の名聲があつたが、明治五年濱田地震に坑內廢滅し、同廿年以後大阪藤田組の經營に在る。今や財界の打擊を受け僅々二萬七千圓の銅を採掘してゐる。本鑛山は大江高山火山の東側に在りて第三紀安山岩質である。

鰐淵鑛山……簸川郡鰐淵村にありて、本邦最西の黑鑛々床として有名なるも今や休業してゐる。こゝでは黑鑛(クロモノ)(亞鉛及銅含有)及硅酸鑛(銅を含む)を產してゐた。

寶滿山鑛山……八束郡出雲村の銅山なるも休業の狀態である。

吉永鑛山……安濃郡川合村の銅山なるも之亦休業中である。

銑鐵　砂鐵より得た銑鐵三・五萬の年額は實に本縣過去の特產品の名殘である。

砂鐵……元來中國地方の花崗岩には副成分に磁鐵鑛を含み、本縣でも雨量多く花崗岩の霏爛激しき雲南(雲州鋼の名ありしもの)及石見の背後に於いて採取され明治廿二・三年頃の全盛期には原鐵三百萬貫・銑鐵百萬貫に達せる活況を呈せし

も、今や之が生産費は到底輸入鐵に追隨が出來ない。然し乍ら砂鐵より得たる銑鐵は、モリブデン等の含有量大にして良質の聞えあり。最近伯耆産の玉鋼が大元帥陛下の佩刀料となつたのに徵しても知られる。これ即ち本縣船通山背後の日野郡産のものである。砂鐵は溪流に沿へる山腹を崩して水簸して之を得、熔鑛爐は粘土製の竈にして、木炭と原鐵とを積み重ねて鞴から風を送りて灼熱し、三晝夜を經て融解銑鐵を得。

其他　石炭は八束郡法吉村・生馬村の第三紀層中より、年額一千圓の小規模のものあり。又大田附近大屋村よりは、石膏一ヶ月平均一千余噸を搬出し有望視されてをり、隱岐西郷附近には、硅藻土を有す。

石膏は簸川郡鵜鷺村、八束郡大野村等にも産す。縣外移出額六萬圓

商業　は本縣の位置、地方に偏し、且長く鐵道の利便を有せざりし爲め、商取引も金融も不活潑を免れず。まして、工業不進なれば、商品の如きも原料品を移出し、製造品を購買する、所謂農業國の特色を、遺憾なく發揮してゐる。今や交通機關の發達と共に、縣民は原料品に加工し、販路を遠く縣外に求めなば、生産價格を、倍加する事が、出來るであらう。例へば繭は、生糸に、三椏皮楮皮は、和紙に、製出されなければならぬ。

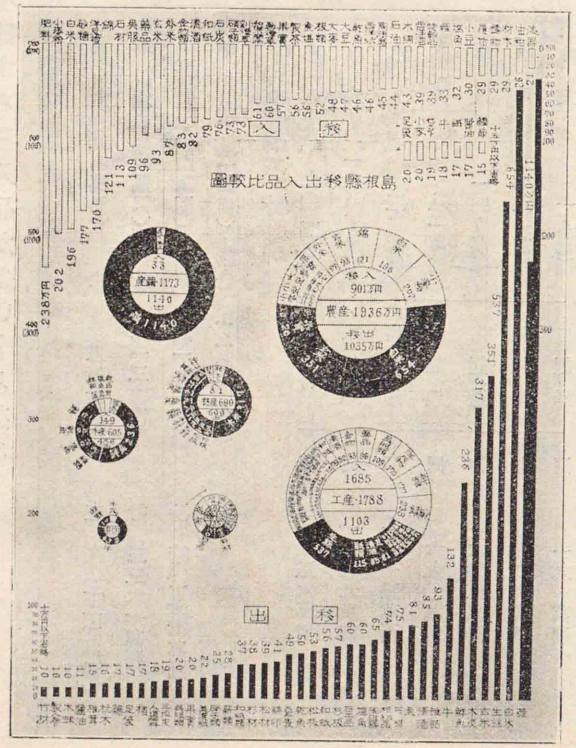
商業者は全人口の八%戸數約一萬八千戸あり。

縣外移出入　移出總額五三五萬圓に對し、移入總額は、四二二萬圓なれば、百余萬圓の移出超過となる。然るに事業の主なるものは、多く他縣の投資に係るを以て、移出超過必ずしも、本縣の富裕を示すものに非ずして、却つて、他縣の原料をも消化する先進商工業國に比して、著しい遜色がある。

移出入品の主なるものは、移出の繭を筆頭として、白米・生糸・玄米・木炭・鮮魚・牛等の順位となり、移入は肥料・小麥粉・白米・砂糖・洋反物・綿等にして、其の價格は遙に低く、移出の繭一品と同じ。之れのみを見ても、生産品の移出入は、純農業國の原始的商業の特色を具へてゐる。さらに商品を生業別に見ると、移出入額は農産・工産・産繭・林産・水産・鑛産・畜

小麥粉（メリケン粉）は製菓原料となるものが主である。

【圖解】主要移出入品比較圖（大正十四年度）之等統計の數字は年に依り多少の變動はあるも此の大勢は時々刻々變化するものに非ざれば讀者は數に拘泥せず大局の人文關係を記憶すべし。



産の順位となり中工鑛産額だけ移入超過し、他は悉く移出超過となつてゐる。要するに、大體本縣は自給自足の國であるが、蠶業・林産・水産・畜産は過剰し、農産は伯仲し、工鑛産の不足を塡補する移入品が多い事となる。

大正十四年度主要移出入品

移出……	繭（一一四〇萬圓）	白米（六五四萬圓）	生糸（五三七萬圓）	玄米（三五一萬圓）	
	木炭（三一七萬圓）	鮮魚（一三六萬圓）	牛（一三二萬圓）……	計	三三六七萬圓
移入……	肥料（二三八萬圓）	小麥粉（二〇二萬圓）	白米（一九六萬圓）	砂糖（一七七萬圓）	
	洋反物（一七〇萬圓）	綿（一二一萬圓）……	計	一一〇四萬圓	

大正十四年度移出入額

農産……	移出	一〇三五萬圓	移入	九〇一萬圓
工産……	移出	一一〇三萬圓	移入	一六八五萬圓
産繭……	移出	一一四〇萬圓	移入	三三萬圓
林産……	移出	六〇九萬圓	移入	八一萬圓
水産……	移出	四五六萬圓	移入	一四九萬圓
鑛産……	移出	一三五萬圓	移入	二九一萬圓
畜産……	移出	一七三萬圓	移入	一八萬圓

移入	九〇一萬圓	出超過	總額 一九三六萬圓
移入	一六八五萬圓	入超過	同 一七八八萬圓
移入	三三萬圓	出超過	同 一一七三萬圓
移入	八一萬圓	出超過	同 六九〇萬圓
移入	一四九萬圓	出超過	同 六〇五萬圓
移入	二九一萬圓	入超過	同 四二六萬圓
移入	一八萬圓	出超過	同 一九一萬圓

取引　既に地方的需給關係を出でない本縣の商業圈は、其の範圍狹小にして、主として大阪を中心とする關西商業圈に屬し、稍々此の圈外に、取引を波及し

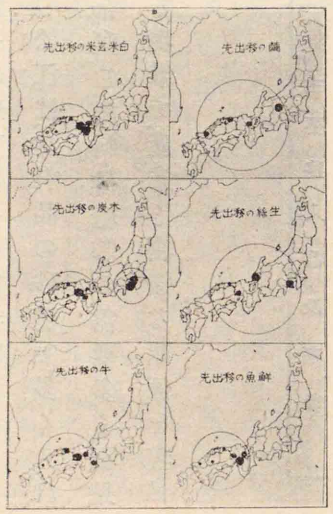
【圖解】本縣の主要移出品先

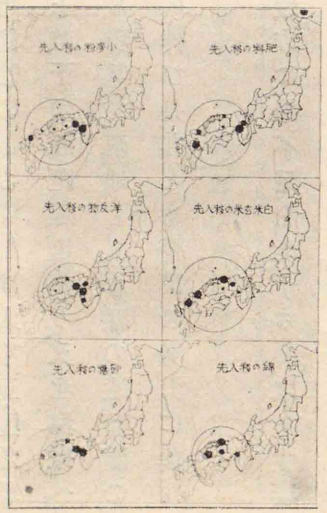
楮皮、三椏皮は岐阜・靜岡・香川・廣島等へ移出される

【圖解】本縣の主要移入品先

得たる所以のものは、交通機關の恩惠を得て、本縣生産品の存在を、周知せしめたる結果である。左圖に依つて主要移出入品の需給範圍を吟味し、本縣の商業圈を推知する事が出來る。即ち移出品に於いては繭・生絲は長野・福井・横濱等の本場へ、米鮮魚・牛は大阪・神戸の消費地へ仕向けられ、木炭が京濱へ移出される以外は、主として本縣の凡ての移出品が、ほゞ關西の京神及隣縣の商業圈に限られてゐる。

移入品に至りては、殆ど大阪・神戸を主とし、京阪神の商品が齎されてゐることは、明らかであるが、尙九州方面の物資が、移入され移出商圈に比し移入商圈は西漸してゐる。一般に肥料・メリケン粉・洋反物・砂糖等の精製品は、京阪神から、白米・綿等の生産品は、隣縣の過剰を受けてゐる結果と





なる。

ここに注意すべきは、本縣の開拓すべき、可能性のある朝鮮は、大小豆・鹽魚・乾魚を彼より移入してゐるが、運賃低廉な海上若干の近距離に在り、又北海道へは、陶磁器を出し、大豆乾魚等を移入してゐる現狀で、兩地とも、本縣の遠商圏の觀があるけれども、朝鮮貿易は、交通の發達に伴ひ是非とも縣民の努力に俟たなければならぬものがある。

過不足　本縣主要移出入品が、縣内何れの地方に、過不足を生ずるか、之を主要驛の荷物噸數に見るべく左表を載せる。例へば縣下第一の出荷驛江津に見れば、背地の木炭を夥しく出し、入荷第一驛の松江は、食料品の砂糖を多く入れてゐる狀態が分る。一般に出雲は米・繭を余剰し、肥料・砂糖等の需要多く、石見は木炭・鮮魚を余剰し、米・砂糖等を入れてゐる現狀で、産業と密接な關係を現はしてゐる。

驛名	主要移出品及噸數						主要移入品及噸數					
	繭	米	生糸	木炭	鮮魚	牛	總計	肥料	小麥粉	米	砂糖	織物	麥	總計
安來	二一九	※一六二九	—	三七一五	八七	三三	三三一三	一四五九	一一六七	※四九六五	八九九	九	八〇二	一八四六三
松江	八七〇	一一五八	三	—	一六八〇	※八二六	二一八六〇	※一七九五	※一一八三	一一〇三	※一八三〇	※四一三	※一一六〇	四二一五三
宍道	三三六	九五九	二〇	七九〇	—	一四五	六〇九八	一〇七三	—	一八五	二	二	一七	四四一五
今市	※二八七六	四七二三	九九	一四〇五	一五	八一六	二一六〇一	一四二八	六六八	一八九四	二九六	一九	三〇一	三六六七五
大社	一〇四四	五三	三〇	—	五三三	一一五	三四〇七	一一二六	六四	二六〇	三一八	三三	一一三〇九	
大田	八六六	一〇一五	—	二三三〇	—	—	七一四	二三二六四	三八〇	三四	七六	四四	—	一〇三
温泉津	三八	九	—	三七三	一五三	二三	四三七九	七九	九	四二八	四〇	—	四一	三二四九
江津	一四五七	四五二	—	※一〇六二七	三〇	三二	※三八六五一	六六八	五四	一三三二	一六八	一三	二六二	九五五二
濱田	四九	一三	—	六五五二	※一七三七	六七一	二五四三六	六七九	二六三	一三三二	二六四	五	九一三	一八二七七
三隅	三〇	—	—	三〇五三	三三	八	八六四一	九一	五	一五四	二九	一三	一六二	一九三〇
益田	二六三	一五四	二	八五九〇	四六	四三七	三三一二	七二一	九四	七二九	二五四	六九	五一六	一一一〇二
津和野	七	五五	—	一四〇六	—	六一三	二二四四〇	一〇八		二九三	七	一	三〇六	六九〇七

大正十四年神戸及門司鐵道局荷物統計年報に依る。表中※點を施せるは縣内隨一の多額に達するものを示す。

三　交　通

本縣は、我國交通幹線の衝でもなく、大陸への横斷地點とも距たり、其の上地勢山地多ければ、交通の發達は、海陸とも充分ではない。鐵道の如きは、我國沿岸循環線たる山陰線が縱貫したのも、大正十二年以來の事に屬する。近海航路亦、極めて振はず。たゞ道路に至りては、近時一般の推移と共に、自働車網施設の機運

に向ひて、山間僻地の交通を自ら開發するに至つた。卽ち本縣は地味磽确なれば、道路從而良好にして、車行誠に容易である。

道路の總延長・國縣道併せて六二三里に及び、密度は勿論平野に於いて密で、背地の山間部は、中國支脈を避ける爲め疎であり且屈曲する。

大正十五年道路現況

國道……延長……六六里五町三八間……二線あるのみ。

第十八號路線(東京より山口縣廳へ達するもの)……延長六五里二四町五三間を有し所謂長門街道にして、米子より本縣沿岸に沿ひ松江・今市・大田・大森・大家・江津・敬川・下府・濱田・三隅・益田・青原・日原・津和野を經て山口縣に入る。

第十九號路線(第十八號路線より岐れて島根縣廳へ達するもの)……延長僅に十六町四十五間を有し、松江驛卽ち堅町・大橋・京橋・縣廳に至る。

縣道……延長……五五六里三一町……一七三線。

從來の郡道は郡制廢止と共に主要なるもの大部分縣營に移管されたれば、幅員の如きも大小種々あり。

三間以上のもの……一一三里三五町九間……橋梁を含まず。

二間——三間のもの……二七三里一〇町一五間……同上

一間——二間のもの……一八二里一〇町九間……同上

未設(一間半のもの)……四六里二二町八間

松江・廣島線……延長一九里二九町。尖道より國道を岐れ・加茂・木次・三刀屋・鍋山・掛合・頓原・來島・赤名を經て廣島縣三次へ入る。

濱田・廣島線——延長一三里一四町。濱田より國道を岐れ今福・都川・市木を經て廣島縣大朝へ入る。

其他……は次の道路網圖を參照すべし。

市町村道……七六三五里

三大道路　延長・幅員・貢献の上から、名實ともに三大道路に屬するものは、本縣の縱貫線たる第十八號路線(國道及橫斷線たる松江・廣島線(尾道街道)並に濱田・廣島線(安藝街道)の三線である。第十八號路線は、大體海岸を通過するも、石見に入りて、大江高山火山群の南緣を、迂回するもの最大にして、其の他小屈曲に富む。之に反し出雲は、地勢上、殆ど直線コースをなす。從而嶮路部位は、出雲石見境界の中山峠・大家峠・濱田東の龜割峠を經て、野坂峠(三五五m)等に在る。

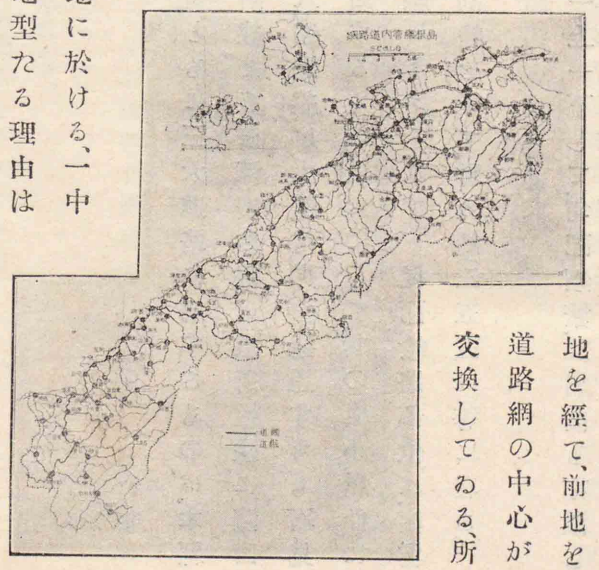
又江川橋(一八七間)は縣下第一なり。

橫斷線は、支脈又は盆地に臨む毎に、一上一下して、勾配頻繁、且屈曲も亦激しく、松江・廣島線は、赤名峠(六九〇m)を濱田・廣島線は、三坂峠(五五五m)を各々大迂回して、廣島縣に入る。兩者とも十二月より三月迄四ヶ月間は、冬雪の爲め自

動車の運轉を休業する事が多い。

道路型　北斜面狹長地帶に發達する本縣の道路が、沿岸に集中する狀態を呈する事は、當然であるが、背地から、中間地を經て、前地を培養するばかりでなく、直角に交はる道路網の中心が各所に多大に有存して、相互に營養を交換してゐる、所謂盆地型の配列を特色とする。例へば廣瀨・大東・三成・掛合及粕淵・川本・日原・津和野等は、道路網四通八達して、前地背地の中繼のみならず、隣地への交渉を多分にもち、他を營養しつゝ、自己も亦營養されてゐる。職能がさうであるのみならず、四通八達の圖形が、平原地に於ける、一中心地網に相似してゐる。然し乍ら盆地型たる理由は其の放射道路毎に地形に適應して、他に接觸するに、必ず峠又は勾配を有する事である。

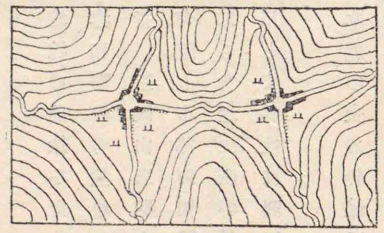
【圖解】管內道路網圖



【圖解】道路型

沿岸前地を培養する河系に似た、橫斷線を摘記すと

布部・米子線……比田——布部——島田
廣瀨・荒島線……廣瀨——荒島驛
大東・玉湯線及大東三成線……三成——阿用——大東——玉湯
今市・三成線……三成——溫泉——木次——大津——今市
大社・掛合線……掛合——西須佐——乙立——知井宮——園——大社
田岐・赤名線……赤名——來島——窪田——田岐
佐比賣・大田線……志學——大田
川本・江津線……川本——川戸(此の間未開通)江津
波子・停車場線……市木——都川——和田——有福——川波
濱田・加計線……加計(廣島縣)——波佐——石見——濱田
三隅・加計線……加計——道川——二川——三隅
益田・加計線……加計——道川——都茂——東仙道——北仙道——益田
匹見・橫田線……匹見上——眞砂——橫田
益田・岩國線……日原——柿木——七日市——岩國



斯くの如く考察する時は、一見不規則に見える本縣道路網も、地形に述べた梨棚式河系に適應して、三條の縱斷配列をなし、形態及職能自ら明瞭なものがある。

一、山麓道路　東から赤屋・比田・三成・阿井・掛合・頓原・赤名・都賀・出羽・田所・市木まで明瞭に追跡され、道川・西見上・七日市に至る平均高距二百七十米突の盆地列を結ぶものにして、其の屈曲多きは支脈に妨げられて北寄りに迂回する爲めである。然し乍ら勾配最も大で上西見・七日市間の峠の如き八百四十米突を有し、實に本縣最高部位の路面を有する等、一般に各盆地の交通運輸には不便が多いから將來横斷鐵道開通の曉は眞先に改修される運命にある。

二、中間道路　背地と前地との中間を走るもので、高距五百米突、地塊の前緣を東から廣瀨・大東・木次・乙立・佐比賣・粕淵・川本・川戸・今福・波佐・都茂・日原・津和野の各盆地を經由し、之等平均高距九十米突の盆地列を結ぶ。緩漫なる屈折は三國山三瓶支脈及安藏寺三子山支脈を北寄りに迂回する外は顯著でなく、勾配も布部・阿用間の二百八十米突の峠以下で、交通運輸の中繼的中心をなす。即ち背地生產を受け且つ前地を臨む好位置にあるばかりでなく、中間道路を利用して呑吐は圓滑に行はれ得るから、盆地毎に地方的名邑を營養するのである。

三、沿岸道路大體　第十八號路線に一致する。即ち山陰街道で本縣の交通幹線であるから、鐵道開通前は交通上極めて重要なものであつた。安來・松江・今市・大田・江津・濱田・三隅・益田はその各々に於ける背地及中間地の最前線に位置して交通的中心都市を營む。

尙北浦は、未だ原始的な行き詰り道路をなし、隱岐も亦環狀線をなさず、何れも海上の廻遊航路に俟つ所多くして、陸上交通は自ら閑却されてゐる。

又交通網の島に至りては、之を地形圖に配して考察すれば、網の目に相當する、山彙山列を發見するであらう。例へば、大江高山火山彙を圍む道路は標式的な圓形の島をなしてゐる。更に又、河系圖に參照すれば、道路網が如何に河川に密接な關係があるか、分るであらう。然し乍ら河系に平行する、川筋道路は却て江川の如き片側使用に偏する所から、後背地の價値大なる左岸に、コースをとつてゐる等の讀圖に注意すべきである。

自動車交通　縣下乘合自動車四十五會社、貨物輸送五十二會社營業中なれども、近來益々激增の傾向ありて、貨切（タクシー）ならば、道路の通ずる所、殆ど行かざる所なき有樣で而も殆ど鐵道發着のに連絡をとつてゐる。

大正十五年自動車里程……島根縣廳保安課調

一間――二間路幅……一七四里一町一三間
二間――三間路幅……一二九里三一町三八間
三間以上の路幅……七里二六町一八間
計……三一三里一三町九間

路幅規定　九尺以上二間以内
速力規定（毎時）　市内……十二哩　市外……十六哩

即ち道路全延長の半は、車行する狀態である。今主なるものを、摘記すれば左の如し。

安來・母里線　荒島・廣瀬線　松江・熊野大東線　松江・江角線　松江市内線
宍道・木次線(三葉會社)　木次・三次線(SH會社)　大東・横田線　直江・鰐淵寺線
大田市内線　大田・鵜淵・赤名線(石陽會社)　仁萬・大森川本線(石東會社)
川本・口羽・出羽線　温泉津・井田川本線　波子・有福温泉線　濱田市内線
濱田・今市・市木・廣島線(SH會社)　濱田・波佐線　益田市内線　益田・日原・六日市・廣瀬線
益田・二條村線　西郷・中村線

鐵道の總延長僅かに一四四・二哩に過ぎず。然れども、明治四十二年米子驛より、今市驛まで開通せし當時は、三八・三哩に過ぎなかつた、昔時と比較すれば雲壤雪ならぬものがある。まして、將來開通さるべき、豫定線を思はゞ、中國の腹背連絡して從貫横斷の便開け、鐵道網の面目は一轉するであらう。

山陰線……米子より本縣に入り松江・出雲今市・大田・石見江津・濱田・三保三隅・益田等に至る百十九哩にして神戸鐵道局米子運輸事務所の所管なり。

山口線……德佐より本縣に入り津和野を經て益田に至る廿七哩四分にして門司鐵道局下關運輸事務所の所管である。

大社線……山陰線の支線で出雲今市より大社へ至る參拜線にして延長四・七哩。

簸上線……私設にして宍道・大東・木次に至る延長十三哩一の雲南開發の輕便線なり。

一畑電鐵……從來の私設輕便線が昭和二年十月から電車開通せるもので、延長十三哩を有し、省線今市驛より武志・平田・小境・一畑に至る一畑藥師への參拜線である

と共に、北浦・湖北等の背地を持つてゐる。

萩線……省線益田驛から分岐して、萩へ向ふものにして飯ノ浦まで八哩四分開通(昭和二年六月)してゐる。本線は本土の沿海循環線の一節であるが、縣界の佛峠を經て昭和三年春には萩迄全通する。

未設線……陰陽連絡の横斷線工事中若くは豫定線を擧げると

三江線……三次・江津間の横斷線にして江津側より工事中

木次・落合線……雲南木次より廣島縣落合へ至る横斷線にして、木次三成間工事に着手す。

日原・岩國線……日原より岩國へ横斷豫定線

廣濱鐵道……濱田より加計・廣島へ通ぜんとする豫定線

今市・三次線……雲藝線とも言ひ、今市より神戸川流域の來島を經て、三次へ至り福三鐵道(福山・三次間)に聯絡せんとする豫定線で、今市より工事に着手す。

大田・瀧原線……大田驛より大森・鵜淵を經て瀧原(濱原村)にて三江線に連絡せんとする豫定線なり。

木次・來島線……木次驛より今市三次線の來島驛へ通ぜんとするもの。

一畑電鐵電車線

湖北線……一畑電車の小境驛(東村)から湖北を經ひ、北松江驛(湖畔)を終點とするもの。

大社線……一畑電車の武志驛(川跡村)より高濱村・遙堪村等を經て大社へ延長せんとする豫定線。

【圖解】山陰山陽循環線距離比較

京都・小郡環狀線　七一一・五哩
大阪・小郡環狀線　七〇〇・八哩

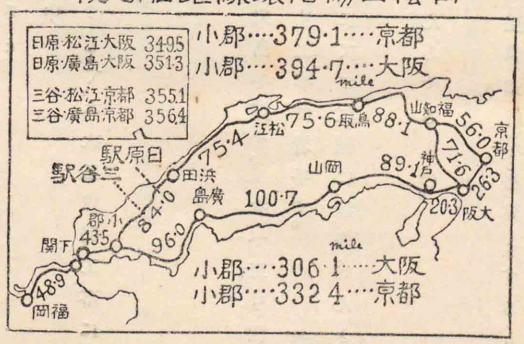
此の環狀線內には現在橫斷線の開通せるものなく、所謂交通上の島國にして我國最大の隋圓なり、即ち隋圓の對角線交點なる中心哩數は三百哩に達し、何に中國山脈が人文上の障碍をなせるかを知るべし。

山陰線　は本縣に於ける、唯一の縱貫線で、出雲は勿論京阪に近く、石西は却つて、山陽線經由の方が便利である。即ち京阪以西中國の鐵道網態の職能から見た石西は、山陰・山陽の兩線を營養する漸移帶に相當する。即ち京都から、山陰經由三谷驛(山口縣)迄と、同樣京都から山陽線經由三谷驛迄とは、略々相等しく、もし距離のみから、旅客の潮流を想像するならば、三谷驛以東の旅客は上り乘車京都へ至り、三谷以西の旅客は小郡廻り山陽線經由を選ぶべき筈である。換言すれば京都を中心とする環狀線に於いては、本縣は完全に上りを營養してゐると言ふのである。

然るに、物資の移出入は寧ろ、商業地の大阪を中心とする環狀線に依るから、本縣の日原以東は山陰線下り經由で、日原以西は山陽線小郡廻りで略々大阪商業圈の距離上の、分野を決定してゐる。

事實、本縣に於ける物資・文物の移出入は、橫斷線開通迄は、單純な上り下りの

山陰山陽循環線距離比較



山陰線によつて、阪神地方の商品が、供給され、且つ一方背後の生產は、殆ど之等の驛々に集中して、主として阪神地方に移出されてゐて、中國山脈の反對斜面に移出されることは、極めて稀である。然れども鐵道貫通後、日を逐うて九州廣島等の商業範圍が、本縣西部を蠶食し、縣民も亦、北九州文化地帶の消費地に、刮目するであらう。何となれば、本縣の交通上の自然位置が、松江を中心としてすら左記の狀態に在るからである。

松江・大阪間……二三四、三哩
松江・福岡間……二五一、九哩
松江・下關間……二〇二、九哩
松江・廣島間……二四五、四哩

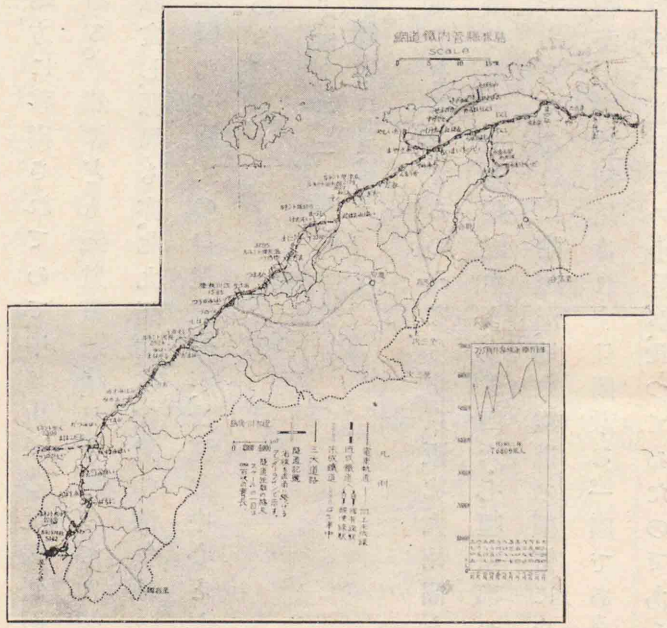
要するに、山陰線は、人文上の裏地帶を經由するのみならず、京阪北九州間を通過する者にとつても、山陽線經由の方が、山陰線經由よりも、四六・七哩(京都から)乃至八八・六哩(大阪から)短距離であるは、これ山陰線が、地方鐵道の價値に止まり、一般通過客に顧みられず、又物資中繼に利用されず且閑散な一因である。

山陰線開通前は、物資の集散は、勿論國道附近の小邑が、掌つてゐたのであるが、新たに鐵道が平行して、之に代はるに至つた。然しこのコースに最も外れた、大田・淺利間の國道に於ける宿場町は、發達の要素を失つて、今や老年期に這

入つてゐる。大森町及大家村等は、殊に顯著で、僅かに背地との中繼としての生命を保つてゐるに過ぎない。之等諸町村の、國勢調査人口動態を見ると、左の樣になり、之に反して新たに驛に惠まれた沿岸の村は、可なり人口が增加してゐるのである。

山陰線に離遠せる諸町村名	大正九年國勢調査	大正一四年國勢調査
川合村	二四一〇人	二四四二人
大田町の近郊で寧ろ增加してゐる。		
大森町	二三三七人	一九七四人…減
郡役所廢止の影響も加はつてゐる。		
水上村	一二六四人	一二七二人
祖式村	一六五四人	一六一六人減
八代村	八七九人	八三八人減
大家村	一一八四人	一〇四一人減
井田村	二四六九人	二三四〇人減
波積村	一七〇六人	一六三五人減

【圖解】管內鐵道網圖



山陰線に於ける主要トンネル

1 桃觀トンネル　六三五呎
鰐・久谷
2 芦谷トンネル　六〇九呎
城崎・竹野間
3 夜久野トンネル　四二二四呎
上夜久野・梁瀨間
4 溫泉津トンネル　三七九五呎
馬路・溫泉津間

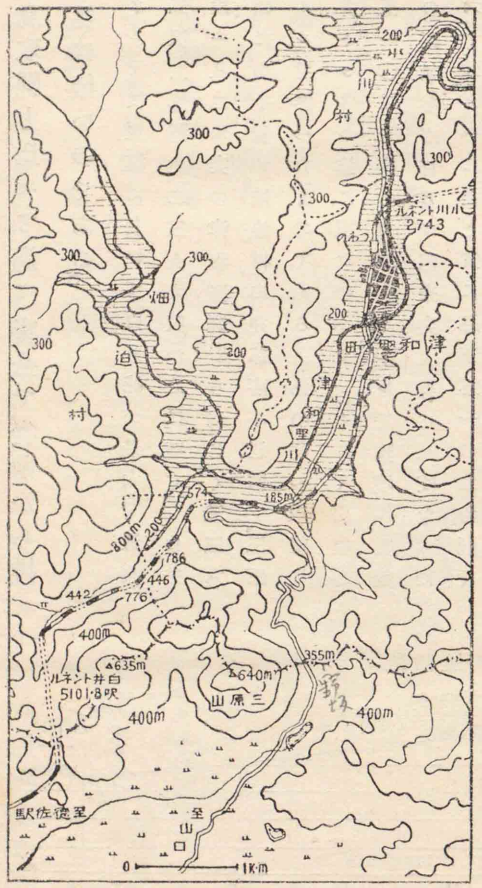
山陰線に於ける主要鐵橋

1 江川鐵橋　一五九五呎
2 千代川鐵橋　一三七〇呎
3 斐伊川鐵橋　一二四二呎
4 日野川鐵橋　一二〇六呎

【圖解】白井トンネル附近地形圖

郡治村……二一二九人……二二一六人

山陰線と言へば隧道の多いことゝ、冬雪の被害とを聯想させるが、本縣に於いては、實道地溝帶緣邊平野の走路は平坦で、且隧道も殆ど無いのであるが、漸く日本海沿岸に出ると、晩幼年期の海崖が、發達してゐるから、海崖の參差する毎に、トンネルを掘鑿することになり、實に本縣管內米子・德佐間等百十九哩の全コース中のトンネル數は、現在五十六の多きに達し、內石見に四十四ある。之も亦山陰線經由の、通過客を少なめる一因で、將來電氣機關車利用時代が待たれる譯である。積雪の被害は、北陸型雨量を遠



ざかつた本縣は、鳥取縣と比べて遙に安全で、從前から排雪車を用ふる必要は無いのである。

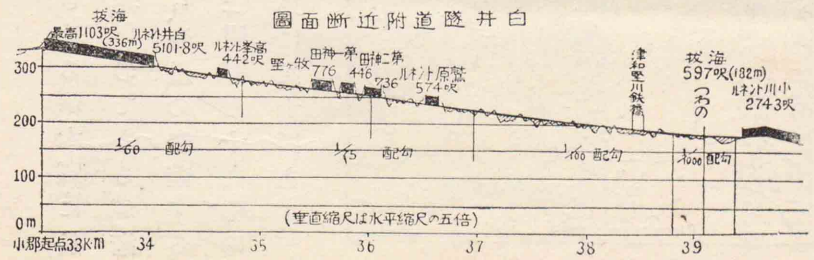
本縣下のトンネルでは規模に於いて白井峠が最大で溫泉津隧道(三七九五呎)人形隧道(二三九九呎)が之に亞ぐ。白井トンネルは海拔一八二米突の津和野驛から同じく三三六米突の德佐高原に出る爲め畑迫村白井部落を迂回し、三原山西側をトンネルで穿つたものである。此の間の距離は六粁にして白井トンネル迄に五ツの小トンネルで山腹を辿り途に延長五一〇二米突の白井トンネルで國境を貫通する故に六粁の距離をば百五十四米突上昇せねばならぬから最大勾配六十分ノ一に達し實に縣下第一の急勾配である。工事は大正六年二月から大正十一年四月迄五年二ヶ月を要し工費百餘萬圓一呎平均二百五圓を要してゐる。

職能 管内鐵道の職能を吟味すると、次の交通量及運輸量圖に見る如く、極めて地方鐵道の特色が濃厚である。

即ち

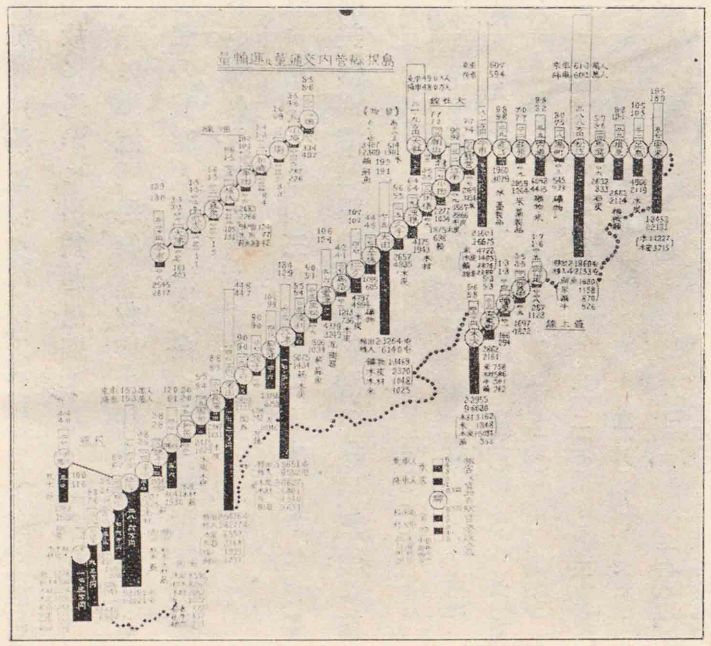
大正十四年　乘客賃金……二〇七・二七四一萬圓
　　手小荷物及貨物賃金……二〇一・四九五八萬圓

【圖解】白井トンネル附近軌道斷面圖



で、鐵道省の收入は、兩者伯仲の狀態で、中乘客驛は松江(乘降客百廿萬人)大社・今市・濱田・益田・大田・津和野の順となり、貨物驛では、噸數順で益田・(廿九萬噸)津和野・江津・濱田・松江・大田・今市・日原・安來・木次等、著はれてゐる。

松江は縣廳の爲め、益田・今市は乘換驛の爲め、大社は賽客の爲め、濱田は石見の中心都市の爲め、夫々乘客が多い。更に出貨の多少は、背後の良否に關するが故に、江津驛・益田驛等は、尨大の後背地を有する事が知られる。更に乘降客數に見る時は、一般に乘車客の方が降車客に比し僅かに多いのであるが、溫泉津驛・津和野



【圖解】島根縣管内交通量及運輸量乘客は賃金收入は運賃收入貨物の大小によりて比較せるもの。

大正十四年管内乘車客五二、三七七
降車客三一、一九〇
出貨噸數五〇人
入貨噸數三、二四六
二九、〇噸
五噸一九三

驛の如きは、反つて降車客が多く保養遊覽地の特色を表す。貨物も亦、出貨噸數が多い事を原則とするが、松江・大社等は消費地なれば、入貨反つて多く、濱田・益田等は生産地を背後に持てるが故に、遙かに出貨超過驛となつてゐる。

航通　本縣の海上航通は、甚だ不振で、殊に鐵道開通後は、貨客の陸上輸送に依るが爲めに、定期沿岸航路の如きも、廢航の狀態となり、港は在つても閑散な帆船出入の程度となつてをり、漁港の多い事を以て特色とする。

港灣　沿岸長く、屈曲に富めるが故に、主なるもの三十四港に達す。されど多く北面して、恒風に堪へざれども、唯美保關港(避難港)及西郷港のみは、完全に南面して安全である。

境港は鳥取縣なれど、縣物資移出入の位置にあつて、大正十八年完成の豫定で、水深四尺、二千噸級四隻を同時に繫留する規模に實に唯一の山陰港となる工費一八〇萬圓。

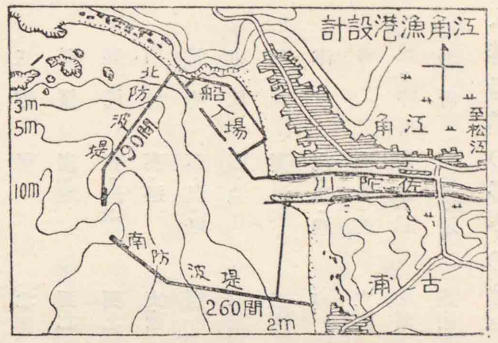
港名	港種	灣口の位置	干潮水深	滿潮水深	入港汽船最大噸數	東西	南北
松江	商	河港	九尺	九、五尺	七〇噸	四五〇間	六〇間
馬潟	商	東西	?	?	?	一二〇	六〇
安來	商	西北	一三	一五	一〇〇〇	二〇〇	三四〇
美保關	避	南	四三	四〇	三〇〇〇	五〇〇	六六〇
加賀	漁・避	西北	三〇	三四	一五〇〇	七八〇	一〇八〇
鷺浦	商・漁・避	北西	四八	四八	二〇〇〇	一六〇	三八八
杵築	漁・商	西	一〇〇	一〇二	九〇〇	四三二〇	一三二〇
江角	漁・避	西	六	八	一五	一〇〇	一二〇
温泉津	商・避	西北	三五	三五	一三〇〇	五〇〇	二一五
濱田	商・避	南西	一四	一七	七〇〇	一六〇	六〇
久手	商・漁	西北	一〇	一五	七〇〇	六〇〇	一二〇
和江	商・漁	西北	二〇	二五	八〇〇	三〇〇	四〇〇
大浦	漁・避	西北	一九	二五	三〇〇	一五〇	三〇〇
江津	商	北	四	八	一五〇	一〇〇	六〇〇
長濱	商・避	西北	五九	六二	二五〇〇	一二〇〇	六〇〇
菱浦	商・漁・避	西北	五五	六〇	二〇〇〇	六〇〇	一三二〇
別府	商・避	東南	九五	一〇〇	三〇〇〇	二四〇〇	一八〇〇
浦郷	商・漁・避	南	一一五	一一五	二〇〇〇	三六六〇	三七六〇
布施	商・漁	東南	三〇	三五	五〇〇	二五〇	四一七
都萬	商・漁	東南	五〇	六五	一〇〇〇	一〇八〇	二一六〇
津戸	商・漁・避	南	三五	五〇	二〇〇〇	一五〇〇	九六〇
崎	商・漁・避	東南	四六	五〇	一〇〇〇	三〇〇	七二〇
知々井	商・漁・避	東南	五四	五八	二〇〇〇	一五〇〇	四八〇
來居	商・漁・避	東南	七二	七二	八〇〇	三二〇	六〇〇

入港船舶の多いのは、松江・濱田(唯一の開港場)西郷・安來・馬潟・杵築等の順位で、一般に穀物・石炭・金屬類・石油等を移入し、農産品又は水産物を移出してゐる。元

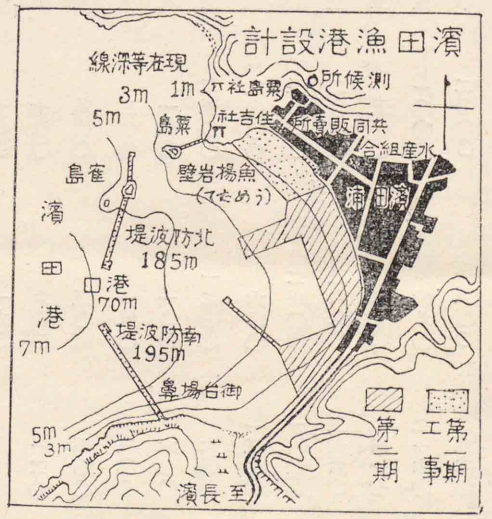
來汽車開通後と雖も、海運は陸送運賃に比し、著しく低廉なれば(海運は陸送の約百分の一の運賃で濟む)臨時貨物船は尙本縣沿岸の各港に寄航するものがある。

松江港は、水深九尺の河港なれば、十五尺迄、浚泄し新大橋右岸に沿ひ延長二百廿五間、巾十八間の護岸工事を向ふ四ヶ年の繼續事業で、行ひて、濱田港は設計圖の如く、西日本海に於ける有數の漁港たらしめんとするもので、漁港としては、朝鮮近海迄控へた、地理的好位置に在る。設計として强風の西を塞ぐ事に留意してゐる。工費半額は國庫より補助され、向ふ七ヶ年繼續で、昭和三年より第一期工事に

【圖解】江角漁港設計圖



【圖解】濱田漁港設計圖



濱田港の設計

第一期埋立延長

長さ一六〇〇米

巾七〇米

同上防波堤延長

北防波堤一八五〇米

南防波堤一九五〇米

浚泄岩壁附近二米

かゝる事となる。出雲では北浦の江角港が漁港として、國庫補助を受けて修築中である。設計は西風を防ぐ防波堤・船溜を設けて約二米突に浚泄する等、濱田漁港と略々等しく、たゞ松江への佐陀川口を改修する。

航路　本縣の沿岸航路は、大阪商船の就航するところであつたが、鐵道の利便開けてよりは、船腹を充たす能はず、今は定期航海するものなし。朝鮮浦項航路(內鮮貿易會社解散)も、同樣の運命によつて、廢航の狀態である。本縣自體が、大生產地でもなく、又大消費地でもなく、而も地理的不遇の位置が、斯くも悲慘な海運狀態に陷らしめた事は、當然であり乍ら、遺憾な事である。

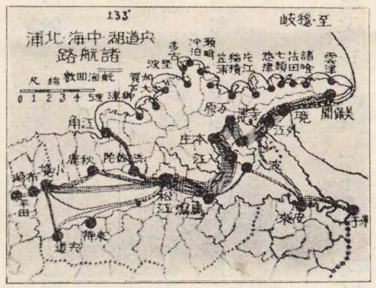
內海航路　出雲の二大湖畔は、昔から湖上汽船の貨客輸送に利便を得て居たもので、鐵道の發達につれて、湖南が荒廢してゐる。

一、宍道湖航路(松江合同汽船會社)

松江・江角線……佐太運河を經由して北浦の漁區を背後にもち、鮮魚輸送用ともなる。三往復。

松江・小境線……湖北沿岸貨客の便を圖つてゐるが將來一畑電車湖北線開通の曉は尠くも乘客の競爭が起るであ

【圖解】宍道湖中海北浦航路圖



らう。七往復。

松江・平田線……湖南沿岸を經るも汽車と並行するを以て閑散なり。宍道より湖北小境へ至り舟川を溯りて平田へ至る。三往復。

二、中湖航路(松江合同汽船會社尙岡田汽船も割り込んでゐる)

松江・美保關線……大根島を介在する中海北部海岸を廻遊す。七往復。

松江・米子線……同樣大根島を經て安來米子へ至る。中海南部沿岸を就航するもので前者よりも頗る閑散である。二往復。

三、北浦航路(米子岡田汽船會社)

境を起點江角を經點とするリアス式海岸の所謂回遊航路で、谷の溺れ合つた隣村同志の往き來すら陸行は峠の困難を感ずる地方である。北浦は海岸美を誇る景勝地が多いから夏季は相當の遊覽者もある。主なるものは

諸喰港(此所より西して東金剛の絕景に入る)片江港(此所より西金剛に入る)沖泊港(此所より七ツ穴を探見す)加賀港(潛戸の大岩窟に至るべし)

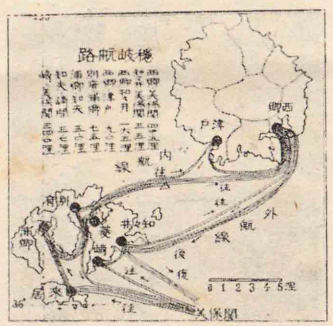
隱岐航路　島民三萬六千人の內、陸交通路は、佐渡・八丈島琉球等と共に遞信省補助航路であり、且地方廳(島根縣)命令航路で、隱岐汽船會社が經營してゐる。

直行(外航線)境……知々井……西郷＝五時間航程

各港(內航線)境……來居……浦郷……別府……西郷

現在高松丸(木造四三二噸)一晝夜一航海として直行、內航を交互に行ひ四日を隔て一日休航する、然るに神國海運(橋本汽船其の他地元の個人)の松浦丸(鐵船二二七噸)の爲めに既に一年來此の航路に割り込まれて經營難のところ昭和三年九月高松丸は船齡二十年に達して就航不能なれば、島民の出資に俟つ隱岐汽船會社の新造船(四五〇噸速力十三節鐵船乘客定員一六四人)が活躍することにならう。

【圖解】隱岐航路



沿岸航路　は全く荒廢し、今は不定期に博多・下關方面から臨時貨物船が、濱田港等に入港するに、過ぎないのである。

水路　河川は既述の通り、傾度大なるか若くは天床川の特性を帶びるが故に、舟揖の利便尠し。

大橋川……汽船航路　一里卅一町……舟筏航路　同上

天神川……汽船航路　——……舟筏航路一里五町

佐陀川……汽船航路　二里二町……舟筏航路　同上

斐伊川……舟筏航路　十五里一町

江　川……管內舟筏航路　廿三里四町

特殊交通機關として水上滑走船ありて江津・川本・粕淵間を定期に運航し貨客及郵便物を登載する。急潭を有する本川が汽船の溯航不能なるに對し滑走船はプロペラー付きにして屹水僅に八寸に過ぎざれば、水涸時も缺航する事なし。馬力百、每時十里の速力定員卅名江津及川本相互より始發して歸航するを以て、江津・川本間は一日四回コースを營業す。

江川は斐伊川・高津川にも增して舟筏古來より盛にして、其の舟は二千貫を（木炭二百俵）を積載ず。

高津川……舟筏航路四里廿三町

通信　郵便局は、一七六局ありて、二八一市町村に對し、大約二町村一局の割合となる。其の密度は人口分布に比例してゐる。

尙本縣は廣島遞信管理局の管轄に屬し、一等局は松江・二等局は濱田・今市に他は受合制度なる普通三等局が大部分で、郵便取扱所（無集配）二、三局あり。

電信網の繁閑は、山陽の三分の一にも足らずして、文化程度に比例してゐる。

主要線は

松江・米子線……約四回線　松江・廣島線……約二回線

松江・濱田線……松江今市間四回　今市濱田間三回　濱田・廣島線……約二回線

濱田・下關線……濱田・益田間二回線・益田・津和野間三回線

で、これ亦、本縣の、三大道路型式に、發達してゐる。縣下松江局及濱田局は、大阪・廣島・下關方面への中繼局として、重要である。

電話は、松江局にては、鳥取を中繼として、大坂に通話し得べく、又濱田局を中繼として、廣島に通ず。海底線に於いては、松江元山線重要である。

電話交換局は松江は複式、濱田は單式。

松江・元山線……日露役に際し敷設せられしもの島根半島（地點は軍事上の秘密として知るを要せず）より鬱陵島を經て元山へ至る。松江より現波通信をなすところ他の遠距離海底線と同樣である。

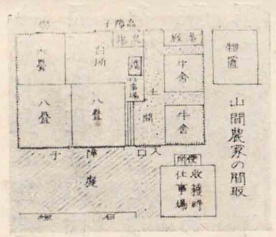
隱岐線……八束郡千酌村より島前中島を經て西鄕に通ず。二重通信を行ふ。

境・大根島線……夜見ヶ濱なる渡村より江島・大根島へ至る。大正四年開通せり。

四　聚落

部落　部落聚落といつても、背後の中國山麓は、人口一般に稀薄な（那賀郡波佐村の如き一方粁廿八人に過ぎない）散村をなし、平原部の簸川平野の如きは、同じ散村でも、每方粁六百九人の密度を有する。更に島の密度は、一般に高いが、大根島の如きは九百廿五人に達し、却つて海岸線に集村をなすものもある。或ひは、江川氾濫原の如きは、高い石垣を擁して立ち並ぶ連村型をなし、北浦又は石見海岸の聚落は灣頭に集村を營んでゐる。

山間散村　特に中國山麓地帶の寒村は、冬季積雪多ければ雪袴を穿ち、ガンヂキなる藁製の履を用ふる所あり。家屋の構造も、山麓崖錐の遠所此所に散在せる立ち低く急勾配（四十五度以上）の藁



【圖解】能義郡比田村農家の間取

屋根をいただき、入口戸窓を少なめ、多くは土壁に圍まれたる、採光不充分な農家が一般的で、附屬建物を殆ど欠く事がある。これ卽ち、冬籠りを自然に豫想したプランである。而も、主屋の間取は、極めて簡單で、廣き土間は收穫時の仕事場となり、臺所には必ず爐を切り、且つ廣くして、冬間藁仕事をなす慣習となつてゐる。殊に面白きは、主屋の內に、家畜(牛を多ければ四五頭)を同居せしめる事である。之も亦、冬間飼料を與へるに、戸外附屬建物に離隔せしめては、不便な爲めである。かゝる地方は、春の氣溫の上昇が遲れる爲め、梅・桃・櫻が殆ど同時に開花し、挿秧の如き、四月下旬から始め九月下旬には收穫する。又正月頃から田植の勞力協定をなし置く等、人情風俗も純朴である。然し水田が深い爲め、縱二尺橫一尺の板木履の中央に緒をすげ、之に乘りて挿秧する。乾田はないから、水田の裏作は不能で、麥作は畑に限られる。以上は本縣の背後から、廣島縣へかけた中國山地共通な地方色で、時勢の進步と共に、漸次此の原始型を失つて、附屬建物等を設ける狀態になつてゐる。

平原散村　簸川平野の散村は、全國でも有名なものである。殊に今市より宍道湖寄りの、斐伊川及新川の挾さむ三角洲地方は、見事な開墾型の散住聚落をなす。汽車から見ても直ぐ分る樣に、南向きの農家が、北西東又は北西を繞らした、松の防風林に圍まれて、此の地方に冬季卓越する、北西風を防禦してゐる獨立家屋が點在するのである。最も模式的な構へは左のプランに示す樣に、稍々小高い耕地の中を選びて、主屋は母屋入りとし、南面した入口から、籾を乾すべく可成廣い庭を有し、庭先はハデと稱する稻架場所となし、家屋の背側等に妻入りの附屬建物の作小屋・若くは土藏等を有する。土間も亦可成廣い。更に背後の支溝は、稻を運搬する小舟を入れ、作小屋が、之に接近する等、極めて耕作本位となつてゐる。從て井戸及便所は、却つて家の前面寄りに設けられ

【圖解】簸川平野の散村(五萬分ノ一今市圖幅)本圖幅より西に行くほど集村に移りかはる。

てゐる。沖積地であるから、井戸水の水質不良は、免がれぬ爲め、戸毎に、濾過裝置をもつてゐる。屋根瓦は、當地方の黒瓦が多い。

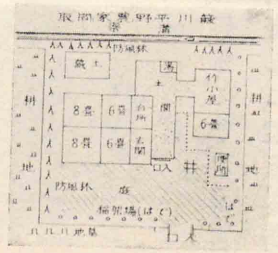
【圖解】簸川平野散住家屋の類型

海岸集村　北浦のリアス式海岸のポケットは、壯年地形の海崖の奥に在る、唯一の灣頭濱で、二萬五千分ノ一、境圖幅の範圍にある七類・片江・千酌等は、模式的な漁業集村をなす。

街形は、地形に適應した三ヶ月形をなして、海岸通が主要の町となり、背後爪先上りの肢節が、稍々放射形の裏町をなしてゐ、背後の山嘴に必ず神社を奉祀して、守護神を尊崇してゐるのが、一般的で、交通は集村から集村へ、必らず峠を有するから、回遊航路の便を、仰ぐことゝなる。

大根島は、玄武岩の火山臺地といつても、今は全く風化した肥沃な(有機質に富んだ黒色の土壤と海底泥土埋立地等は、共に肥沃で、又保溫力も強く、反當り收量も

【圖解】北浦の集村(二萬五千分ノ一、境圖幅ノ一部)



大根島は松江近郊と共に藩政時代から藥用人參の特産地であつたが今は北向の丘陵地に僅に作られてゐる。

高島は美濃郡鎌手村に屬し人口百二十人戸數二十一。學齢兒童二十人。郵便は月一回の不便な所で、血族結婚の内地から嫁入する者は、死者があれば浪火を擧げ内地の師匠寺で經を讀む。中間は遙に少し手前の伊勢島(岩礁)は、傳說お伊勢が島から脫けてこゝまで泳ぎ着いたところと言はれる。

他より多い)土壤で、全島が殆ど耕地である。こゝに入江(にうこ)・波入・遲江・馬渡・龜尻・寺津及二子の七集村を營み、全部が海岸に占居してゐる。之は近い、夜見ヶ濱方面の、移住民が、發達したもので、船着場を核とした、極めて不規則な集村である。殊に島の内部は、井水を得るに堅硬な玄武岩を、殆ど海水面と同じレベルまで掘下げなければならぬ不便があるから、島民はこゝを避けて、舟着場に接し、且つ肥料の海藻を得る(陸上は全く開墾してゐて、綠肥は得られぬ)便利な地を占居してゐるが爲である。まして漁民は、當然海岸を選ぶに決つてゐる。島の生活に必要な薪炭は、對岸の近い森山村等に、山林を有する者もある。島内の家々は、同姓のもの極めて多く、發達の過程から、祖先を同じうする、一島一家族の觀を呈する事は、他の隱岐島や美濃郡沖の高島も、同樣な島の地方色である。島の最高所大塚山も、僅に四二・二米突に過ぎない爲め、海中に吹き曝されてゐる人家は、多くは防風林の外圍が繞らされ、又集村體を包む全海岸線は、地元の玄武岩で、高い石垣を築いて、風浪を避けてゐる。

石見海岸は、岩石、砂濱の交錯せる、寧ろ表九州海岸に類似する地形を呈し、集村は其の波蝕を受けて、既に長からぬ岩頭の裡に營まれてゐるものが、間隔を

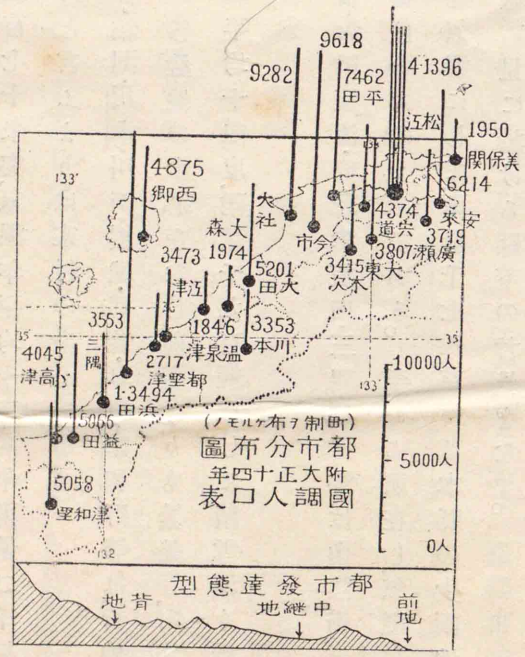
おいて存在する。若くは岩頭は、元の島で、河流の齎らした沖積土で連繫した平地を、占居するものが多い。前者の例は、和木・都野津・波子・唐鐘等があり、後者は濱田・津摩・古湊等が顯著である。一般に北浦ほど溺れないばかりか、反つて最近隆起性の地積に、餘裕があるから、裏町が發達して、寧ろ肢節の少い方形に近い。特殊な町並として、海を脊にした南向きに、片側町の並行する事である。普通なら、家並を向け合つた、兩側町であるべきものが、風上に面する片側を缺けるものが、重なり合つてゐるのである。又戸窓すら、北側は少なめて多くは土壁である。勿論恒風を防ぐ竹垣を繞らして、海岸一帶を連ねてゐるが、都野津や江津の高濱部落の樣に、若い砂丘裡に風を避けてゐる狀態である。

街道集村　は職能別から市場聚落もあれば、渡船聚落もあり、宿場聚落もあつて、其の例は背地から前地へ至る道路又は海岸を縫ふ道路に添ふて、各地に存在するが、形態は一樣に、道路を緣どつた細長な、一本町が多い。もし可なりの生産消費の中繼を掌どる樣なものは、裏町をも發達して居るが、それはこれから述べやうとする都市に讓る。例へば、伯太川の流域に於いて、下十年畑・井尻、母里・大塚等は、縣道安來・赤屋線に於いて、相當間隔をおいては、發達した市場聚落の樹村である。又吉賀川上流から六日市・七日市・日原等の市場聚落は、其の名の暗示する通りである。

【圖解】都市分布圖

都市　行政上一市・二十一町あるが、分布が湖海に面して、內陸には極めて尠い。之は細長い本縣の地帶としては、內陸都邑の發達する程の幅を有たないからである。

配列の態型は大體前地・中繼地・背地と、職能的位置に存在して其の地の高度及雨量は漸次大となり、氣溫及繁盛度は、漸次小となるのが普通である。從て、縣下を通じて見た場合は、屢々述べた樣に、梨棚式河系に適應して、三條の縱列を見ることゝなる。但し左には、町制を布かざるものをも考慮に入れてある。



一、山麓都市　横田・三成・頓原・赤名・出羽・市木・波佐・匹見・七日市等の小街村が之に相當し、山麓盆地個々の小中心をなし、多くは支流の直角河口に跨り、山麓道路の衝にあたる。平均高距二百七十米突、氣溫年平均十三度、年雨量二千粍以上の冬降雪多き地方の、都市と言ふよりは寒村の中心である。

二、中繼都市　廣瀨・大東・木次・掛合・粕淵・川本・川戸・雲城・都茂・日原・津和野等は、背地を受ける高距平均九十米突の各盆地の中心をなし、前者よりも繁榮し、町別を布けるもの五あり。氣溫年平均十四度、雨量千九百粍にして積雪漸く稀となる。

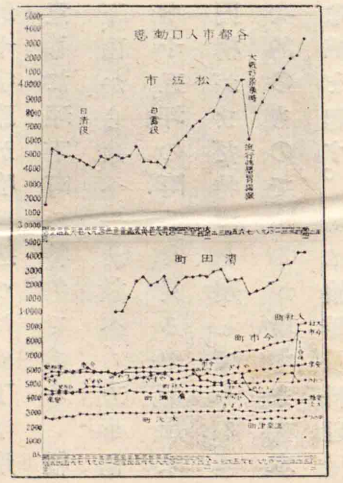
三、前地都市　安來・松江・宍道・今市・大田・江津・都野津・濱田・三隅・益田等は山陰街道に碁布し、之等は全部町制を布けるものゝみである。平野に所在し、氣溫は更に一度高く、十五度の文化的氣溫にして、雨量千七八百粍は本縣の少雨地に位する。松江は出雲、濱田は石見に於ける縣下の首邑をなす。

更に本縣都市は、商工的位置にあらざる爲め、人口增加率は極めて微々たるもので、中にはいつまでも、舊狀態に置かれて老年期に達する小都市が可なりある。殊に、經濟的地步を失つた城下町や、宿場町の中には、老衰しつゝあるものもある。たゞ近來少しの若返り都市がないではないが、尙第一回國調後、第二回國調に際して內地全人口增加率の六分七厘に達しないものゝ方が多いのである。

【圖解】各都市人口動態グラフ

湖上嫁ケ島の風光は水準に平行調和したる美しさであれど、突兀として風景がたゝ殺ちがひない

松江市　宍道湖の水は流れて約七粁の大橋川をなし中海に注ぐ。松江市は之に松江大橋を架し、北を橋北(末次)南を橋南(白潟)と稱し、合して人口は四萬に餘り、實に山陰第一の都會をなす。橋上欄により て四顧するに、北方一帶は所謂宍道山脈の丘陵裾を引き、南は茶臼山・床几山の丘陵あり(共に三紀層)西と東は渺茫たる宍道湖及中海にして、嫁ケ島(基底玄武岩)一抹の碧波に浮び、大山の白峰又遠く望み得べき我國に於けるゼネヴァ(Geneva)と誇稱される水鄕である。



市街は南北最長約三粁、東西約二粁、面積約四・七八平方粁である。橋北で目立つものは城山(二八・四)を中心に幾多の堀に區劃されてゐる事である。之卽

ち城下町の一特色で、殊に京橋堀・北堀・四十間堀・米子橋の堀等は外濠に該當する重要な水路として役立つてゐる。橋南にも亦大橋川に併行な天神川がある。沖積原を掘つて容易に得られる此等の堀の多いことも、水の都に適應してゐる。

町割は千鳥城を中心に大體方型に見えるが、十字路が喰ひ違つたり、丁字形に交はつたりするところは、城下の防備を留意した城下町の特色である。橋南の雜賀町はもとの士族屋敷で、北から南へ丁、西から東へ目を數へる方形割で、其の一つ〳〵が南北五間東西十五間、卽ち七十五坪の町並を見る事が出來る。現在は靜的な松江の住宅區域で古風な門構がまだ特徵を殘してゐる。

町の周邊部は一帶に不規則を免がれない後次的のものであるが、就中末次本町裏の湖面利用は、場所柄に似合はぬ不規則な感を起す。之は旅館及料理屋等が湖面向きの裏町を形成し、本町から引込路次をもつからで、眺望上階上の南面せる涼しい部屋を可成多く設けんが爲めの遊覽的區劃の地方色である。

市街の形狀は一言にして盡し難いけれども、其の生產地域を見ると、大體十字形の軀幹部(末次本町通りを橫棒とし、殿町及白潟本町天神町を縱棒とする)

と、それに附隨する小肢節が、背後の交通路に沿うて地方街を形成してゐる事となる。從而主として商業區域は、前記の區幹部、卽ち末次本町の如きは本市の代表的買物町である。肢節には美保關街道の石橋、平田街道への土手町、驛への驛通り、廣瀨街道(聯隊街道)への雜賀通り、長門街道の兩端卽安來への津田街道・湯町方面への乃木濱等を指呼する事を得べく、之等は本市を營養する後背地の方向を暗示するものである。更に市街自動車の通路も、之等の背地から前記目拔通りを軀幹の形狀に循環して居る。卽ち南津田街道から北美保關街道へ至るもの、及松江驛から橋北平田街道へ至るもの等がそれである。

松江港は大橋川の出口馬潟にある。卽ち外港で馬潟驛から臨港線が敷設されてゐる。

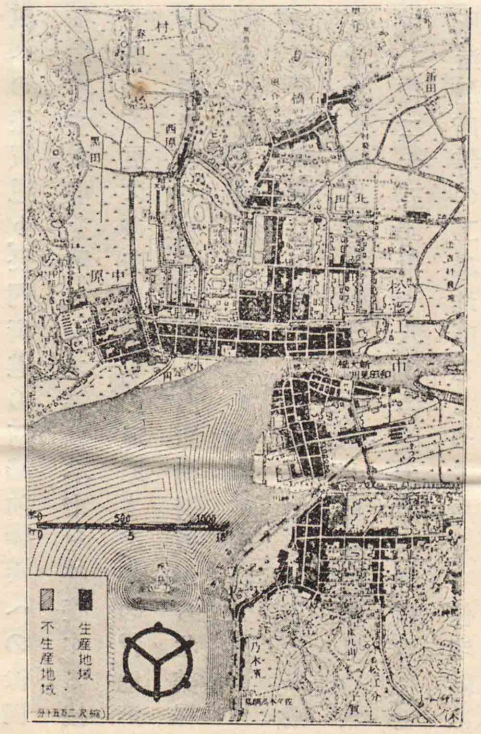
商業地域の外に尙學校官衙區は北堀・京橋堀間の千鳥城を中心としたる殿町・母衣町一帶である。寺社區域は大橋川と天神川の中間寺町界隈で、其の大橋川岸一帶新大橋右方へ長さ二百二十五間、巾十八間の築港區域計劃され、更に其の和田見川東部は鐵工所・造船所等の工業地區となつて居る。住宅區は中原・北田・南田・雜賀で可なり廣い面積に相當する。千鳥城天守閣は、附近一帶遊覽區となつてゐる。之等區域の昔時からの盛衰を見るに、四十間堀東方及南田北田の各一部分は、士族の沒落と共に減少しており、驛通りの增加及雜賀

東方の住宅地及乃木濱の增加を見る事が出來る。

人口增加の狀態は明治廿二年市制施行以來三十八年間に、僅に八千人の增加に過ぎず(一・二倍)、されど縣下都市のうちでは最近世界大戰後若返つてゐる方である。

本市の職能は、(一)地方政治・經濟の中心、(二)遊覽地、(三)地方文化の中心たる事である。昭和元年の職業別戸數人口を擧げると、

商業交通業	三四一〇戸	一七・七%	六六九八人
工業	三九・七%	一・六%	六四二人
公務及自由業	三四六八戸	一・〇%	三五五人
農業	二八・七%	一一・三%	二九〇四人
水産業	一、一二〇六人		
其他	一五二〇戸		
	一四一戸		
	八一戸		
	九六七戸		



【圖解】松江市街地圖

計　八五八七戸　三七三一三人

之で見るも商業は全戸數の四割に、工業は三割に屆かうとしてゐる。商業の中に、風光明媚な水都を訪れる遊覽客相手の旅館等が含まれてゐるのは言ふまでもない。本市の遊覽客は春型である。次に工産物は、

酒……六七萬圓　醬油……六〇、六萬圓　菓子……四四萬圓　汽機……三二、八萬圓

其の他八雲塗・瑪瑙細工等は本市の名産ではあるが産額としては少い。

政治・文化の中心としての本市には、縣廳・六十三聯隊・各官衙・新聞社・高等學校・中等學校(男子五女子三校)等を有し、之等が當市に及ぼす經濟的影響も決して僅少ではない。

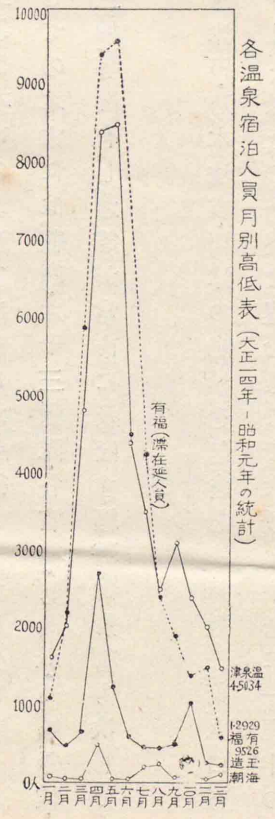
大松江市は隣接町村津田・乃木・法吉・川津の四村を包含して、戸數一萬、人口五萬を突破する所謂グレート松江の出現を望むもので、大橋を中心に一哩半の半徑を描いた地域とする目論見である。

玉造溫泉　松江市の西郊玉湯村の鹽類泉は、距離から見ても松江遊覽區の延長と見るべきであるが、大正十五年の投宿人員九七二六人、卽ち約一萬人の浴客を算し、時期は專ら春型(四月)にして、秋は顯著でない。然し平地の溫泉故、風

景の特に賞ずるものなく、松江よりの日歸り遊客は春秋に夥しい。近年湖岸湯町驛に町營の浴場を設置して發展策を講じてゐる。尙浴客は婦人病に効能あるものを除き女客は男客より常に尠いのである。

海潮、溫泉は大東町から約一里の距離にある、同樣鹽類泉であるが、大正十五年の投宿人員は僅に一六六三人に過ぎない山間の溫泉である。然し四月の春型以外に七八月の避暑客、十二月の忘年會等現はれ極く地方的の遊覽湯治客を招くに止まる。一般に山地の溫泉は、避暑溫泉の夏型を呈するのが普通で、例へば、能義郡奥の比田野湯の如き、小溫泉ではあるが純夏型である。もし交通さへ可能なら、氣溫は玉造よりも海潮、海潮よりも比田野湯が冷涼で、いよ〳〵山の溫泉として繁榮すべき道理である。

【圖解】各溫泉客グラフ



美保神社は水難及漁獲の靈驗著しとて船子、海士等の崇敬厚し。

美保關町　は「關の五本松」の俗謠に聞えてゐる人口二千人に足らぬ小市街ではあるが、國幣中社美保神社（祭神事代主命及其の後美保津姫）の賽都であり、且風光明媚の（遠く大山の姿を見る）遊覽都市である。町は島根半島の東端に近い所謂傾動ブロックの南面急斜面に位置し、而もマール形の陷沒內灣に半圓形の主要街をなし、谷間〳〵に爪先上りの肢節街を持つ半圓放射型の集村をなしてゐる。

街區は勿論美保關神社を中心に、門前町の旅館、土產店、料理屋等の區域を中心として、東方は專ら漁民の住宅區であり、西は戶數も少く、土產物の工作區域となつてゐる。從而大正十三年の職業別戶數は

農	九〇戶
商	八七戶
水產	九三戶
工產	五九戶

田は殆どなく急傾斜の山畑である。
旅館、土產店、料理屋等である。
本町の主產額六萬三千圓に達す。
土產物を生產し竹製品有名なり。

されば、水產業は本町の生命で、漁夫は人口の八割に達す。本町の交通は合同汽船の美保關線によるもので、湖上汽船は此の一線に依つて約三分の二の乘客を得てゐる。松江へ三時間强の航程、境へ一時間の航程で、旅客の來集は春

夏型に屬す。

港は商港に屬すけれども、蓋し背後に二百米突の山を負へるが爲めに、避難港として且又漁港として役立つてゐる天然の良港である。

半島の最東端地藏ヶ崎に美保關燈臺光達二十三海里經ヶ崎以西山陰の主要燈臺は八面射光旋轉式一等燈臺である。其の前面の離れ小島(Stack)地之御前及沖ノ御前は、往昔事代主命の釣を垂れられた島として傳說のあるもの。附近は荒れ海である。

【圖解】廣瀨町

廣瀨町　飯梨川の中流、卽ち安來から三里、まさに山地へ移らんとする中繼位置に在る。松江の支藩、廣瀨藩の城下町(三萬石)で、飯梨川(富田川)左岸に、今や純老年期の都市として、四千人臺の人口が兩度(三九年及大正四年)の大火以來次第に減少し、爾來三千人臺となりて恢復未だに及ばぬのである。

市街は支流祖父谷(おぢだに)川に沿ひ、本流の沖積原に營まれ、町割亦城下町の特色たる丁字街多し。社寺學校・官衙區域は扇狀地形たる町の背後にあり、前面は祖

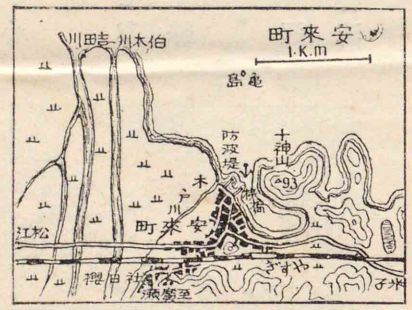
【圖解】安來町

父谷川を通じて使用水とし流れて下流域の灌漑をなす。對岸の月山城趾は尼子氏の威武を偲ばしめ、名產廣瀨絣(年額一萬四千圓)製紙(六千圓余)に名あり川床約六尺高ければ製紙業者は本流の水を引いて使用す。

安來町　古より俗謠「安來節」の起源地で知られた港町であり、山陰街道の宿場町でもある。安來平野の東端にありて、西端の荒島聚落と對稱の位置に在りて、廣瀨町とは三角的位置を占めて居る事は、三角洲平野に聚落發達の一般の規則に從ふものである。

人口六二一四人能義郡の前地に於ける門戶なれば商業盛にして、水陸交通の便を得て工業行はる。十神山及安來背後の丘陵は花崗岩地帶にして、その十神山は昔時の島であるが、今は「陸繫ぎ島」となつて安來港の風波を防いでゐる。卽ち嘗つて陸よりする埋積著しく、且海岸の隆起を物語るものである。

安來製鋼・足立製絲・安來製米等の會社工場あり。又溫飩・錦山燒・安來人形の



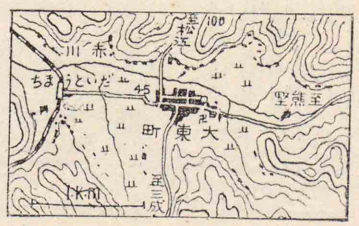
産がある。

名所に十神山・社日櫻・清水寺等がある。

雲南地方　斐伊川上流の大原・飯石・仁多等は所謂雲南地方に屬し、流域の小都市は中繼的位置に發達せる細長き街村型で谷盆地の中心をなすものが多い。

大東町　人口三八〇七人。赤川に沿ひて盆地の中心をなし、三方が峠で簸上線により宍道に通ず。養蠶行はれ生絲・牛・紙・三椏・楮皮等を産す。

【圖解】大東町



木次町　人口三四一五人。近時簸上線の終點として若返りつゝある。木次は三刀屋と共に斐伊川・三刀屋川の合流點に近く對町をなし、仁多郡を背地に持つ。

斐伊川は此の地に於いて漸く山地を離れて埋積行はるゝ爲め、川床著しく高くして、木次の下町は川床より低ければ、從來屢々洪水の害をうく。新築の人家は競ふて地床を高める爲めに軒擔不揃ひ俗に「一文上り」の稱がある。

中繼地の職能を有し、簸上線によつて米・木材・牛・繭・紙(出雲製紙本町にあり)を

移出す。

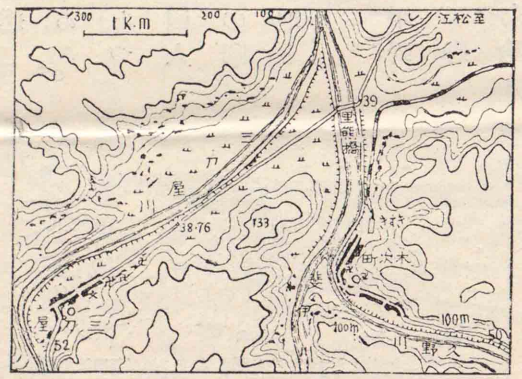
三刀屋村　人口二四四四人。木次と同じく海拔五十米突の谷盆地にあり、口飯石を背後にもつ廣島街道の要地である。木次の如く川床高からず、寧ろ町の川縁りは河段丘の發達を見る。こゝに雲南に於ける三刀屋中學置かる。

横田村　山麓盆地聚落にして斐伊川の上流横田川に跨り人口三三二八人。牛馬市開かれ、出雲算盤の原産地は此の地方である。海拔三三二米突

三成村　は人口二六四二人。三成盆地の中心卽ち横田の前地にある。附近は雲南に於ける米産地で牛を牧し、冬作の少い地方である。

掛合村　人口二〇〇七人。三刀屋より三刀屋川を溯れる山地の聚落で、交通上廣島街道の衝にあたるその奥部に頓原・赤名ありて山麓聚落、又は峠聚落をなす。海拔赤名にて四四四米。此の地方は木材・木炭・牛を産す。

【圖解】木次町と三刀屋村

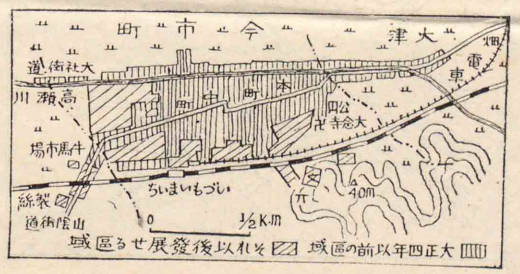


【圖解】今市町

簸川平野　斐伊川及神門川の下流、卽ち簸川平野は雲南地方の前地たるのみならず、平野自ら生産に富むを以て人口稠密聚落も大きく、都市も亦相當人口多し。今市・大社・平田が何れも簸川平野の山麓に發達してゐる事はこれ又平野に於ける都市發達の通則である。

宍道町　簸川平野の東北陽宍道湖南岸の舟着場であつたが、山陰線・簸上線の丁字通路にあたり、人口四三七四人（昭和二年十一月町制時四四八四）。昔から廣島街道の咽喉をなして居たものゝ簸上線によつて雲南の中繼地として活氣がある。

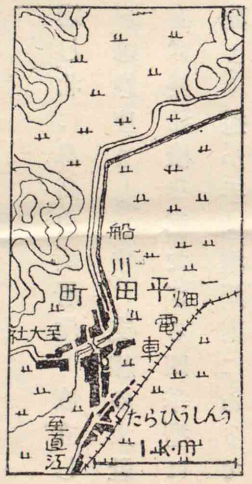
今市町　斐伊川と高津川が山地を出はづれた簸川平野の南緣に位置し、それ等の流域を背後にもち、且簸川平野大部分を前地にもつ市場町である。交通上からは勿論山陰街道の宿場町で、人口は累年增加し、殊に汽車開通の明治四十三年頃からは次第に活氣を呈して、今や本縣松江濱田大社に次ぐ第四位の人口八千六百餘人を算し、本縣の都邑中確實に壯年的過程を辿りつゝある上に、將來豫定鐵



【圖解】平田町

道開通の曉は一段の發展を思はせるのである。

市街は東南約四十米突の洪積丘陵下を通過する山陰線と、灌漑運河の高瀨川との挾む地域に限られ、山陰街道に沿へる細長き原形から、鐵道開通後驛前及西部並に東部丘陵下へ發展を遂げてゐる。本町の部分は街道上の他の部分より廣くこゝに市場が開かれてゐたものである。肢節が山陰街道の兩端及大社街道に地方街を延長してゐるのは當然である。牛馬市場・繭市場・製絲工場（郡是製絲）製織工場（出雲製織）等ありて、此の種の工業は松江を凌駕す。物資の集散は米・木炭・繭等此の地を經由して移出される。



平田町　人口七四六二人。湖北地方及北浦を背後にもち、船川斷層部の出口卽ち簸川平野北緣に發達してゐる。市街は南北に長くて山麓と三角洲との接觸を暗示し、船川は之を橫斷して北流し更に東流する。表通りに妻入りの家屋が並んでゐる古い感じのする町である。

船川は布崎を經て湖口へ約一里。松江へ湖上汽船の便ありて日々數回往

復し、一畑電車が將來松江へ連絡せば水陸ともに至便となる。味噌・生絲・乾魚・海草を產するは明らかに背地の生產で、又こゝに雲州平田製絲・日本製絲平田工場ありて製絲行はる。又名物平田饂飩・生姜糖を產す。

平田附近に鰐淵寺あり。

湖北に一畑藥師あり。瑞璃光如來を山上の堂宇に安置したる眺望濶達の所にして、眼病の靈驗著しとて賽客殊に春秋に多し。一畑電車乘降客八萬五千人は大半賽客である。

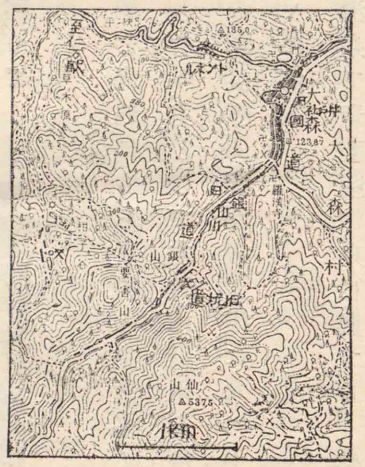
出雲大社は大國主命を祀れる官幣大社なる事は人の よく知るところである。

大社町　は簸川平野の西北隅杵築灣岸に發達し、北に鼻高山斷層崖が直立しその八雲山下には所謂神境出雲大社が神代以來鎭座ます。支線の大社線は一年の昇降客四十八萬に垂んとす。賽客は終始後を絕たざる四季型に屬するがわけて四五月が多い。大社驛は神苑より遙か手前堀川南にありて大鳥居より神苑までは汽車開通後の新らしい門前町である。人口もその開通せる大正四年頃より活氣を呈してゐるが、大正十四年隣接せる杵築村を合併して一躍九千人臺となつて本縣第三の人口を有す。但驛は荒木村にあつて堀川以南に街は喰み出してゐる。

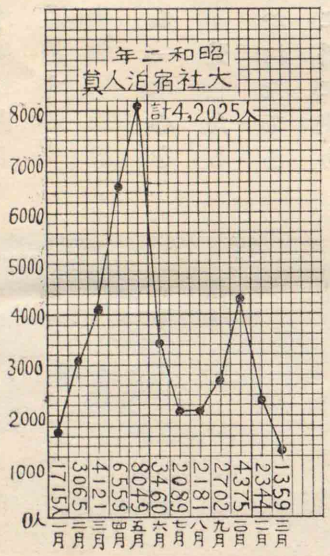
市街の位置は海岸砂丘と荒木村の砂丘(此の方古し)との凹み面を占め、堀川は原町邊から迂回せしめてある。町は門前を胴體としE字形に肢節をのべ、更に最近の驛道路に今一つの肢節が加へられた。

【圖解】大社町斷層崖の南面せる砂丘に新舊あつて東部が急傾斜する各々に注意せよ。

門前及主要道路は其の名の通り土產店旅館・食物店等の職能を有するが、肢節の左翼卽ち海岸砂丘に面する肢節は元の杵築村で、其の北部は所謂稻佐濱の海水浴場地若くは漁業地域で、南部(赤塚)は砂丘緩斜面を利用した一面の養蠶地帶である中の肢節(中市及川方)は汽車開通前今市及石見方面からの唯一の賽路であつたものが今や新進の驛通りに繁榮を奪はれた事になる。最右翼(原町)はこれ又平田街道からの賽路であつたが、何れも交通的價値を失うてゐる。

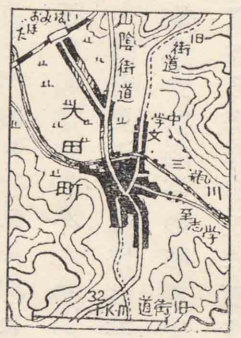


【圖解】大社參拜客月別グラフ



砂丘地帶は縣下第一の養蠶地なれば本町は繭及米を移出し、又北浦方面の鮮魚此の地を通過する。又中學は驛通り背後にある。

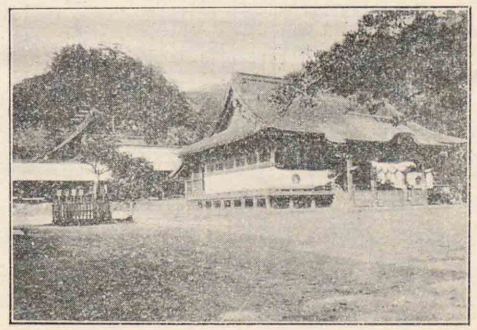
大田町　人口五二〇一人。石東に於ける一中心をなす。市街は三瓶川筋と山陰舊街道の交叉したる市場町(二百年前から盛な春秋の市が開かれた)であつたが、明治二十四年頃新國道通じて更に斜に交りて肢節を增し、遂に大正四年山陰線開通と共に停車場通りに延長して次ぎ〳〵に繁榮の中心が移つて來て居る。



【圖解】大田町

本町は靜間川流域を背地にもち貨物の集散多く本縣有數の貨物驛となり、主として木炭・木材・米を輸出し、石膏は今隣驛の新設靜間驛が扱ふ樣になつた縣立大田中學はこゝにある。

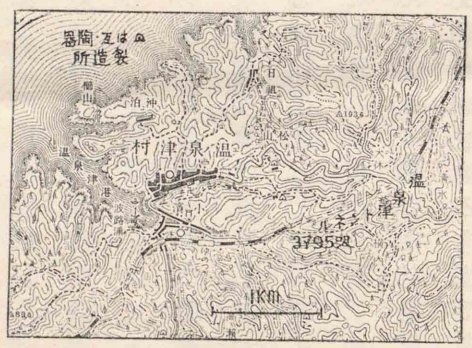
志學溫泉　は大田より四里、三瓶南麓の山の溫泉で炭酸鹽類泉に屬する。谷



【圖解】出雲大社本殿は妻入り即ち大社造りである。

塵を離れた閑靜な環境にある爲め、相當な春秋溫泉であるが、近時スキーの流行と共に冬の浴客をも呼ぶ。此の地の特產に三瓶山葵がある。氣候寒冷砂質傾斜地の清流に適し年額實に七萬三千圓に達し大田驛より阪神地方へ出す。關東に於ける天城山(伊豆)山麓のものと並び稱せられる關西第一の產地である。

大森町　人口二千人に滿ちぬ老衰の町となつたが德川時代銀山の銅鑛を盛に採掘した時は大森に奉行を置き、附近一帶十余萬の人口を包容してゐたものである。市街は銀山川に沿ふ舊道を挾む狹い谷合ひの爪先上りの町で國道開通後新道に沿ふて若干の家並を見るが、之も汽車開通後活氣がない。今は鑛區も要害山西麓に移りて殆ど休業し、郡役所も廢せられて、專ら背地と前地との交通運輸の衝にあたつてゐる。(南は川本迄西は大家迄のヒンターランドを有す)卽ち石東自動車が本町を根據に背地と前地とを連絡し最寄仁萬驛へのトンネル道路を掘鑿する等



【圖解】溫泉津町

鹽類泉なれば皮膚病等に効能がある。

涙ぐましい地理的環境の打開につとめてゐる。陶器・竹細工・杞柳品等を產し縣社井戸神社・羅漢寺など本町にある。

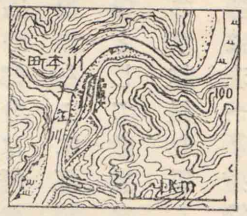
溫泉津町　人口一萬八千人。汽車開通後驛前は發展せるも隣村小濱村地內なれば本町の人口動態には影響しておらぬ。溫泉津港は兩岸直立の急崖をなせる地形より推して灣入の先端二又の龜裂構造線なるべく、溫泉津町及溫泉津驛はそれ等の埋積谷に營まれてゐる。されば此の鹽類泉は底湯にて近時鐵管にて、驛前へ導いてゐる。浴客は殆ど春型で年々四萬五千人に達し本縣第一位に在る。從而戶數約八百戶の內料理屋・宿屋其の他の百戶に達せんとする遊樂の町である。町割は灣頭を根幹とする羽狀型をなして谷間に喰ひ込んでおり、上方は溫泉地帶で下方裏町は漁業區域をなす。

以前は商船の寄港地であつたが、今は船舶の出入に止まる。然るに背後丘陵の陶土によりて赤瓦及粗陶器(年三萬圓)を產す。又附近水產物の市場である。

川本町　人口三三五三人。從來邑智郡の中央部にありて政治的聚落であつた。江川の中流蛇曲帶の汎濫原上に發達せる町で、舊街道の下町(川に近い方)は古く、新道の上町は一般に官衙等多い。一般に江川中流以下には此の種汎濫原の山麓崖錐(浸水に備へて)に聚落が決定されてゐる。

【圖解】川本町

汎濫原は紡錘形なし、川筋道路はその秩にあるる支流を迂回する交通を型なす。即ち汎濫原は浸水の虞多ければなり。



本町の背後へは壯年山谷の峻坂多くして車行困難なれば、各地最寄りの江川の舟揖に依る爲め、案外ヒンターランドが貧弱である。從而町制を布いたのも最近(昭和二年)のことである。されど本町の職能は中繼的交通的位置にありて對岸へ川本橋を架し、陸路大森を經て山陰線へ自動車を通じ、滑走船により江川口の江津町へ通じ名產鮎及材木・木炭・麻・椎茸等を移出する。陸路は冬雪困難の時あれども、舟運は常に盛んなり。本町に縣立農蠶學校・裁縫女學館・島根電力等あり。

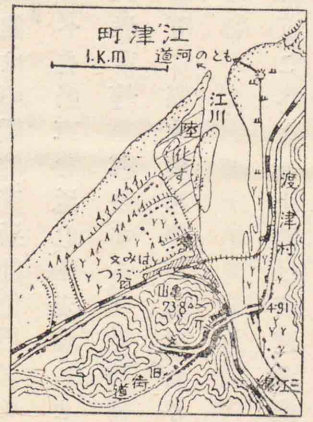
粕淵村は人口一九五一人。江川中流の極點なれば、これより上流は舟運の屹水小となり、中繼的位置に發展の基礎を措いてゐる。又陸上大田へも中間地である。

口羽村　は人口三一六一人。江川へ注ぐ出羽川の會點を占め、經濟文化は距離の近い三次の圏內に在る。阿須那・出羽も同樣で他の山麓聚落と異り、分水

嶺低く氣候も亦廣島縣斜面をなしてゐる狀態である。阿須那・出羽は牛市の開設される地で夏市が賑はふ。卽ち他地方では春秋を選ぶのに、當地方では蚊や虻のゐない山間散村で夏草に肥る淸凉な氣候帶であるからである。

江津町　人口三四七三人。中國第一の長流江川口の左岸に位し渡場聚落として發達し、同時に河口港で川舟と沖舟との接觸點としての商業都市である。

【圖解】江津町　江津町現在の渡橋は鐵脚にて長さ一七六間縣下第一で、更に下流の汽車鐵橋と併行し壯觀なり。

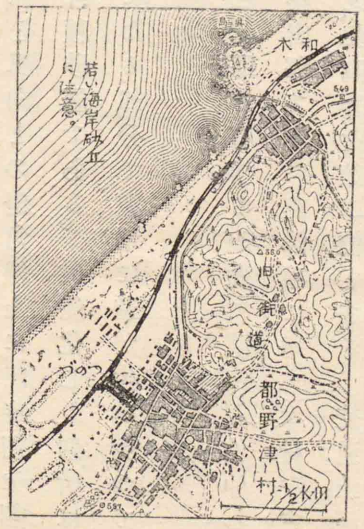


されば明治卅七年江川橋が架せられるまでは對岸との間に渡船が發着して山陰街道の交通にあづかつてゐた。從て市街の最も古い部分は橋の袂を中心とする區域である。更にそこは江川の攻擊斜面に該當する水深部位にして、下航せる荷舟の荷揚場として般盛を極めたものである。爾來市街は花崗岩の龜山によりて冬季の卓越風を避くるに好適な谷合ひに延長したが、國道開通の爲め舊街道の肢節は衰へ、新道沿ひの肢節が之に代つた。然るに大正九年山陰線の開通と共に町の經濟的位置は一大變化を來した。卽ち驛は龜山の前面に設けられた爲めに川舟の陸揚場もこゝへ移り從前の高濱部落は面目を玆に一新した新市街となつて略々四段になつた砂丘列(川岸は河成段丘)の第一列は次第に掘り割られて行く現狀となつた。砂丘列は町營防風林の松樹深く、片倉製絲縣立女子實業學校等設けられてゐる。此の邊高濱・新開等の地名で呼ぶが、もと河口の土砂が西風に妨げられて流向と風向との對角線上に四時期を劃した砂丘配列を見せたもので、新らしい沖積砂層である。尙陸化した個所は明治三十二年の地形圖では水面となつてゐる部分で濕地に葦が生ひ茂つてゐる。

本町の職能は廣大なヒンターランド邑智郡を有するが故に、濱田と伯仲した有數な貨物驛で木炭縣下第一の木炭移出驛で年二萬餘噸に達す)木材を主とし、附近花崗岩地帶の陶土に惠まれ、赤瓦、粗陶器を第二位とする。交通上河口が淺く船舶は出入可能であるけれども、今は專ら汽車の便に依る事となつた。河を溯航する滑走船もこゝを起點として上流川本及粕淵へ通ず。將來三江線が開通するのも近く、本町は之等交通上の丁字位置に相當する有望な町である。

都野津町　人口二千七百餘人。江津に接して此の聚落の發達する理由は、江津町が地形上專ら邑智郡を背後にもつに反し、本町は陸路那賀郡の奥地を控へてゐる事は、道路網圖に見るも明らかである。又附近赤瓦(本縣第一位)の本場なれば小さいながら商工業都市である。市街は舊街道の部分が新道の部分と並行してゐる點は、北隣りの和木部落も同樣である。殊に新道冲側では風を背にして模式的な片側町が發達してゐる事は前にも述べた通りの地方色である。赤瓦年移出一萬餘噸實に縣下第一である。

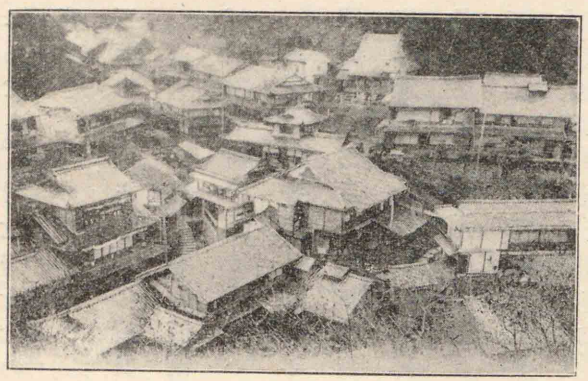
【圖解】都野津町



因に和木の海岸は日露役の際露艦イルチッシュ號の漂着せしところである。

有福溫泉　は波子驛から七粁都野津驛から九粁約二三十分の行程にあるから臨海溫泉ではないが、さりとて山の溫泉でもない。敬川に沿ふ國道を大津部落(こゝも海岸は汽車が開通してから交通的價値を失つた)から有福盆地に進み、その南隅敬川の支流が閃綠岩溪谷をなす小區域の湯谷部落八十二戸は全部溫泉に依つて生活してゐる。聚落の形狀は百米突同高線の溪谷に適應して、略々Y字形の層村である。而も十六戸の旅館中十五戸迄が二階若くは三階に建られて、中には二階が湯元の地面と平行してゐる。內湯制度でないから、浴客は階上から直ぐ入浴に出かける狀態である。急傾斜の溪谷地域を如何に利用するかが問題であるから道路も町の中央部迄自動車を容るゝ餘地があるが、それ以外は狹い無數の階段で砂質凝灰岩で輔裝してある。畑にしても谷の出口以內では疏菜用のものすら存して居らぬ。

【圖解】有福溫泉に於ける宅地の利用



職業別戸數を見るに

住宅	二五戸……二八・七%	旅館料理屋	二〇戸……二三・〇%
販賣業	二九戸……三三・三%	農家	四戸……四・六%
其ノ他	九戸……一〇・三%		

住宅といつても尙溫泉に關係する職に從事する者の住宅である。

當溫泉は大正十四年の宿泊人員約一萬三千人で他府縣人は此の內約二割にあたる。男七對女六の比で溫泉津溫泉に比べて女が割合に多いのは婦人病向きの爲めであらう。主として農村の人を華客とするから土產物店少く三戸の飴屋と二戸の玩具屋があるに過ぎない。

されば來遊時期も農閑な三・四月で一年中の半分に達する所謂春型であるが、秋收穫前の顯著でない秋型を示してゐる。

湯元は村營で、入浴料年額六千圓は有福村の主要財源の一つとなつてゐる單純泉であるから、神經衰弱・ヒステリー・婦人病等に効用がある譯である。

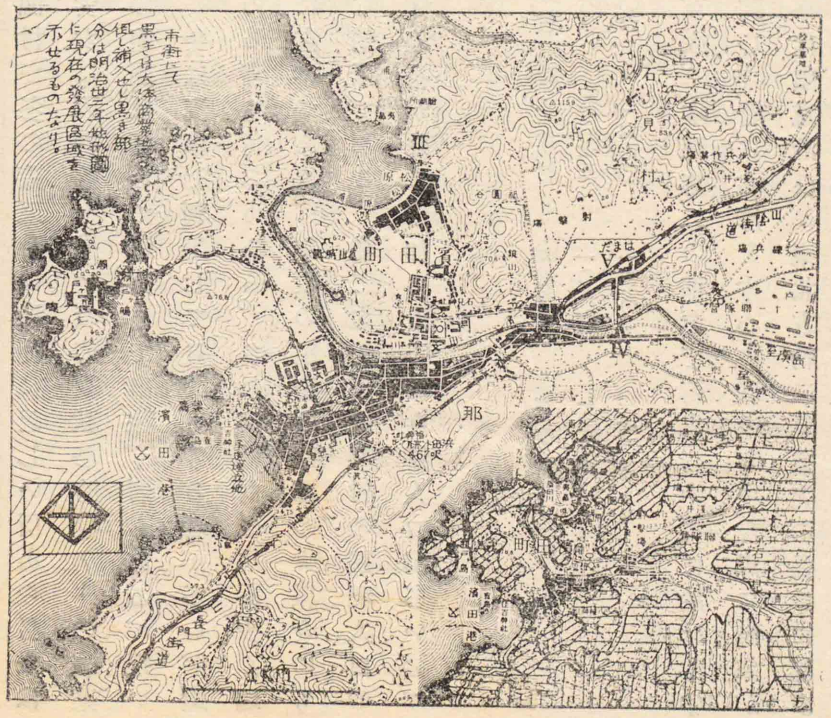
出稼地帶　松江には南郊の御津村等の野菜賣や、或ひはお花賣がある樣に、又杵築灣岸の西濱村は砂丘地帶の水田の乏しい而も冬季は西風吹き荒ぶ土地で、加ふるに人口は既に飽和點に達してゐる爲め出稼人の多い(本籍人口六五六五人現住人口四〇六九人所では所謂西濱商人の本場として著名であるがこゝには石見沿岸の出稼地帶として那賀郡國分村唐鐘部落及川波村波子部落がある。勿論耕地面積の中水田は、極めて少く、畑は砂丘が多いから甘藷以外の收穫は少い。加ふるに漁村で冬の荒天時は漁獲又乏しい所から、男子は遠く對馬朝鮮方面へ出漁し、妻女は天秤棒を擔いで春夏秋冬時期〳〵の疏菜果物・乾魚等を行商する。其の範圍は極めて遠方まで出稼ぐ者もあるが、近い濱田町等にも活躍してゐる。今は汽車を利用して日歸りする者が多いが、遠方まで泊りがけで行商してゐる者も可なりある。されば村內は水田少く地產乏しいにも拘らず、皆相當に富裕である。年頃の娘姿は京都の大原女にも似つかはしい地方色濃やかな情景である。從て之等附近町村の國調人口の男女別を見ると凡そ此の出稼地帶が分る。卽ち女子の在籍人口が多いのである。

	下府村	國分村	小波村	都野津村	都濃村
男	七〇八	一三六六	一二七三	一〇三九	一三三六
女	人九〇	八七〇六	一六〇〇	一三八二	一七三四

濱田町　人口約一萬三千五百人。本縣第二の都會で石見の中央に於ける中樞をなす。市街は濱田川を跨いで、昔は右岸を中心の城下町で、左岸に町家が發達してゐたものである。今は國道沿ひに東北方約二千米突の長さに延び

商業街新町は凡そ其の中央部にある。此の長いのは肢節の寄り合つたもので胴體は之等各々の肢節からほゞ等距離の中心即ち新町邊に裏町が發達してゐる。たゞ背後に肢節を缺く理由は、直ちに第三紀層の丘陵を脊負つてゐるからである。此の丘陵は石見沿岸特有の山畑であるが、實はその後に聳える石英粗面岩の三階山(三七九)の前地で、南方の展望は利かない。更に大橋々

【圖解】濱田町市街圖



上より北方を見るに、前面は輝石安山岩の火山岩地帶で、七十米突ばかりの鏡山・城山・高尾山(高田山)が展望を塞いでゐる。されど濱田の美しさは、此の圏外を出た海岸に粟島・鶴島を浮べた夕照の濱田灣頭に在る。

然し乍ら假りに水準を七米突上昇せしめたならば、現在の聯隊附近迄の沖積平原は一望の灣入となり、前面の三山の如きは島影を水に映すだらう。即ち第三紀時代は之等は明らかに島であつて、現在の沖積地は灣入せる入江であつた。爾來濱田川の流砂は次第に之を埋積して、最初は西寄りの濱田浦の方向へ沖積したが、恒風の西風が強くして水拔けが惡く、寧ろ流砂は吹き上げられて砂丘の形式で流水を妨碍し、遂に北寄りの松原灣に注入することになつたのである。かゝる轉向流の型式は前にも述べた樣に濱田以西に類例が多く其の過程追跡の容易なものさへあるから、この地の地形が陸繫ぎ島である事は斷言してよいと思ふ。殊に明治五年濱田地震の際に於ける被害が、片庭から原町・濱田浦に著しかつた事及今でも此の區域以上の井水に鹽分及クロールの檢出が夥しいのに徵しても、過去の入江であり且河跡地であつた一證である。ましてや古記錄・傳說等の符合する點が多いのに於ておやである。

松原灣へ注入した最初は城山の東を流れて後西に流れて現在の河道となつたものである。

地質の記號
縱線　石英粗面岩
横線　第三紀層
斜線　輝石安山岩
十　花崗岩
無地　沖積層

濱田地震の際被害の多かつたに所は今でも平屋が多い事は又一特色である。

尙背後の第三紀層丘陵はまだ谷も若く、臺地性をなし、嘗つて水中時代に在つて前面の輝石安山岩の噴出に際して隆起した海蝕臺地でないかを疑はせる美しい風化した平坦面を有する。又驛前に離れた第三紀層は此の續きで濱田川の切開した切斷分脈である。恐らく古い構造線に違ひない。

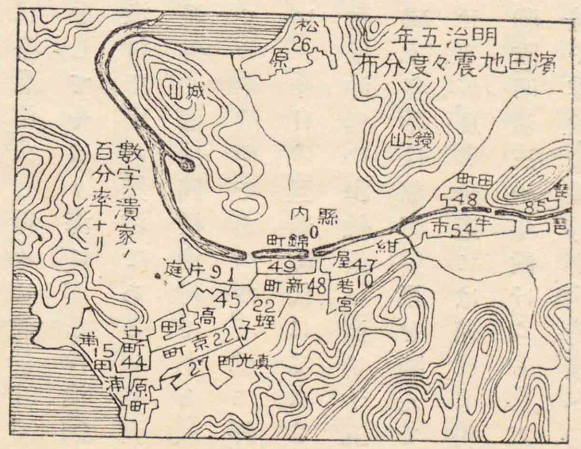
濱田の古圖に依ると、河化は濱田川の水を取り入れた濠の前面部、今の縣内は士族屋敷であつた。橋の兩袂は稍々廣場となつて番所が設けられてゐた現在の縣内一帶は不生産區域で官衙學校住宅地帶となつてゐる。城址は荒廢してゐるが經營如何では最も自然的公園の雄大なものとなり得る。河南は商業區域で城下時代は天滿宮前の廣場及八幡宮前の廣小路があつて、こゝで門前市が賑はつたものであるが、現在は繁榮地帶がお城に遠慮の要らぬ大橋から新町通り前後が目拔の商業街となつてゐる。勿論こゝは山陰街道が貫通してゐるが眞の買物町は却て今は裏町となつてゐる眞光町の物靜かな通りを選ぶ。こゝは昔の城下時代の繁榮圈であつた。新町家並の高低參差たるは濱田地震潰家後新築せるものが高いのである。

肢節が胴體を離れて發達する傾向は、本町の一特色で、地形に從ひ職能の異るところから當然斯かる配置をとつたものである。(一)濱田浦は胴體に接してはゐるが純漁業地區で濱田灣に臨んだ漁港修築豫定地となつてゐる。こゝは古圖で見ると砂濱灣頭となつて居るが、今は全然消失し徐々に沈降するから護岸用の捨石がしてあり、西風の防風竹垣をしてやはり海に面した漁家はない。(二)瀨戸ヶ島は戸數も少いが、やはり純漁村で、元の築港であるが、切角浚泄した島影が今は淺くなつてゐる。(三)松原及外ノ浦は同樣漁村であるが、藩政時代に專ら此所に帆船が出入して弦歌さゞめく港町であつた。殊に外ノ浦は構造線が溺れた細長な入江で割合に深い。今日の巨船時代にはふさはしくないが當時は天然の良泊地であつた。附近沖側の海蝕崖は、高さ十五米突余の萬年ヶ鼻を始め、著しく急崖をなす荒磯で、冬季は怒濤磐根を嚙んでいよいよそゝり立つ日本海岸の豪壯さを思はせるが、夏の舟遊には何れも得がたい風情がある。(四)朝日町は步兵第二十一聯隊(明治三一年設けらる)の軍隊町で極めて細長い一本町である。尙廣島街道や雲城・波佐等郡内背後への通路でもある。然し朝日町は半分以上石見村の區域である。(五)濱田驛前は大正十年鐵道開通後の最も新らしい市街で全部石見村に屬する。當驛は嘗

つては濱田川が練兵場を迂曲してこゝに流路をとつた沖積低地に在るから、一種の下方驛で、驛舍が低いから埋立てたホームに跨橋し、上り下りともホームを專用であるから乘客の多い(縣下第四位)當驛の缺點である。當驛の移出品は木炭・粗陶器・鮮魚(縣下第一位)である。

其の他工業地帶は、小都市の常として分散配置で濱田浦肢節と商業地區との接觸部(原町)に罐詰工業がありて本町第一の生產をあげ、濱田川口に造船鐵工等重い原料の工業があつて、浚泄された濱田川の水運に倚つてゐる。又驛附近に製材が行はれてゐる。何れも原料の來る方向に因果關係が有る。住宅地域は河北の縣內及背後丘陵下の山麓線に沿つてゐる。旅館料理屋等は概して河南濱田川緣りに燈火水に映ゆる川向きの室の二階三階を選んでゐる傾向がある。尙社寺區域は胴體及各肢節每

【圖解】濱田地震被害圖



濱田川は過去二ケ年後渫して昭和二年一月工を終り川口より十一町百噸級船舶が溯航し得。

に背後の丘陵を選んで分散してゐる。

本町大正十四年の職業戶數及生產價額を見ると、

農　業　本　業……三二八人……八・五六〇二圓……丘陵畑の麥が米に次ぐ。
水　產　本　業……二〇七二人……一一五・七〇七八圓……三八%の生產に上る。
工　業　本　業……三三六九人……一六九・五〇九三圓……五六%生產價格。罐詰・生絲・清酒・菓子。
商　業　本　業……二五六六人……驛卸し當町入荷品は肥料・小麥粉・米・砂糖・織物・麥等。
公務及自由業……二二〇四人……松江に次ぐ官公署多き地なればなり。
交　通　業……八六三人……驛・關庫・自動車・發動汽船員等多ければなり。

之を要するに濱田の生產上、工業卽ち罐詰業は全生產額三百萬圓の中六十萬圓の第一位に在る。又附近物資の呑吐も石見に於いては益田を除く津和野・江津と伯仲する。又既に有せる港灣の移出入が近時殆ど衰微せし爲め、漁港としての發展を期待してゐる地方的經濟及文化の一中心に過ぎない事となる。

主なる官公署會社には廿一聯隊・測候所・水產試驗所等の官廳及中等學校(女師・中學・高女技藝女學其の他雲電濱田支社・製氷・罐詰・製絲工場等があつて之等が消費經濟に及ぼす額も決して少くはない。

たゞ濱田には松江の如き遊覽的雰圍氣が薄い。之は前述の如く、地形的に海岸美があるから、鶴島・粟島神社・外ノ浦等夏型の納涼的施設が要る。然しながら大都市でない限りかく分散した自然景觀を悉く美裝する事は容易でない。勢ひ惰性に依つて宜傳もなければ代表的名物もない本町に遊覽的氣分をそゝらぬのは當然である。

人口增加の趨勢は明治廿二年一萬人の人口が現に四千人增加してゐるに過ぎないから、老年期に相當する町であるが汽車開通後若返らうとする傾向はある。將來隣接石見村を含める大濱田にする事は廣濱線の開通にも必要な準備であらう。

三隅町　人口三五五三人。大正十五年西隅村を合併して町制を布けるもので、三隅川の流域をヒンターランドとする小聚落がある。國道には沿つてゐるが、汽車が海岸を走るので、十町餘の前地に三保三隅驛をもつてゐる。都市分布上から濱田・益田間の中間位置にあるから、繁榮的の餘裕があつた事となる。

益田町　人口五千餘人。漸次壯年的傾向を有する。高津川平野の東隅益田川左岸に發達したもので、反對側の高津町とは安來平野の安來・荒島との場合に一致してゐるが、益田の交通的位置及後背地が有望な爲め、近時高津を凌駕したのである。市街は舊街道に沿ふて長く、新道に若干の延長を見る。山陰線の開通に依つて益田驛は約半里の吉田村地内に設けられたから、將來大益田としての市街は此の區間に發展すべきである。

本町の背後には益田川域の都茂及匹見川域の匹見等があつて、廣大な林產地をヒンターランドに持つ事となり、從て本縣第一の貨物驛で、木炭(本縣第二)杭木(筑豐炭田へ出す)木材を中繼する。益田索道は道川(海拔四五〇米突)上匹見(二五〇米突)を經て益田驛(約五米突)間に敷設され、之等の運搬に用ふ。本町の生產は之に亞ぎて瓦・畳表・半紙等の工業品を出し、商業も亦盛にして、石見に於いて濱田に次ぐ。又交通的には山陰線と山口線との丁字點にあたり將來有望の地である。

町に古刹萬福寺・農林・高女校あり。

高津町　人口四千餘人。背地狹まければ、益田平野に臨みながら國道にも驛にも接せずして、益田に繁榮を奪はれてゐる。市街は高津川の左岸比較的浸

蝕の保護面に砂丘を脊にして發達する。卽ち地形圖に加筆した樣に、水田の低地を聯ねると、過去の高津川流路は益田川方面へ汎濫した形跡が顯著であるが、高津川町は聚落を營むに稍々安全地帶であつた事を想像してもよいと思ふ。但町の背後の低地(水田)は蟠龍湖の水を引いた低地で汎濫河道の形狀ではない。

附近畑が多く養蠶が盛に行はれる。こゝ鴨山山頭縣社柿本神社ありて翠巒深く、丘下益田平野を下瞰する風景勝れ、階段下の市街は門前町の形式をとりて道路を避けてゐる。益田より自動車の便がある。

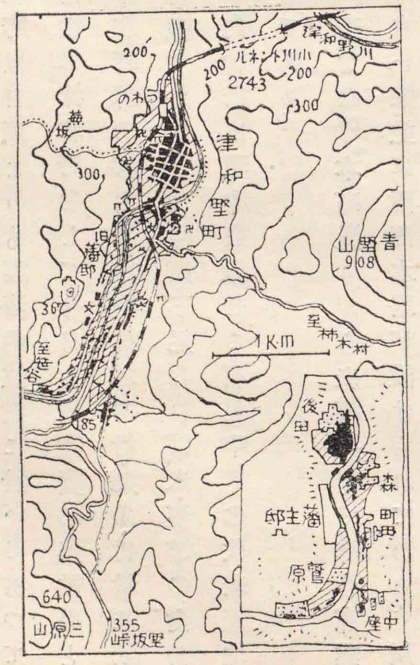
津和野町　人口五千餘人。益田町と略々等しいけれども、廢藩後累年減少して來た純粹の老年町である。特に本町は縣の西端で、行政上は島根縣に屬するけれども、經濟・文化等は山陽卽ち關門又は廣島方面の圈內に入る事は左記の新聞着荷斤量に見るも明らかで、官公署は本縣の新聞を購讀するも、實業方面では諸物價が關門の相馬に左右せられる所から、汽車開通後は殊に之等の新聞が激增し、松陽等の新聞が退却してゐるのである

驛別＼新聞名	松陽	山陰	關門	馬關	廣島
津和野驛	三〇斤	一一斤	四六斤	二〇斤	二〇斤
益田驛	一三斤	三斤	九斤	—	—
濱田驛	三六斤	一六斤	五斤	—	—

之に依ると關門の新聞は益田を經て濱田まで及ぶが、然し其の數は極めて少なくなるのである。(尙一斤は新聞全葉二十七枚に該當する)

津和野町の前面は古生層にして、背面は石英斑岩なれば、此の接觸構造線が津和野川の流路となつてゐる。從而市街は津和野川の左岸に主要街が現存してゐるが、右岸は青野山(九〇八)の急崖となつて山裾は激しく浸蝕を受けた二十米突ばかりの河蝕崖となつてゐる所がある。舊藩時代は人口約一萬五千人を有し、谷間全部に繁榮してゐたもので、中央部の森町の如きは目拔き

【圖解】津和野町…斜線は舊市街の範圍は切圖は斜線…士族町點線…町家黑色…現存部



の場所であつた。然るに今は後田及森町に現存部が多く、他は殆ど荒廢して農家が殘存するに過ぎない。殊に大正十一年驛はやはり後田に位置を占めた爲め、城下町推移の原則通り下流に繁榮地帶が移つて來た事になる。

高津川の流域から言へば、津和野は日原よりも經濟的位置に於いて劣つてゐる事は明瞭であるが、地理的惰性は津和野をして今日も尙物資の集散場として活動せしめてゐる。卽ち津和野驛の移出品は、薪・杭木・木材・藥品・竹材・和紙等で縣內大田驛に追隨する貨物驛である。又生產不足なれば、米・麥等の食料品を山口縣から移入してゐる。內和紙は現今衰微せる石見半紙の代表產地をなし、藥品は笹谷銅山の亞砒酸である。

生產地帶は後田の驛前から鈎形をなす本町通りから森町通りで、專ら商業を營み、森町の如きは城下時代の古い家並に兩側水路が設けられてゐる。川に沿ふてゐる蛇曲帶の水邊に、當町の製絲(生絲)製紙・織物・製材酒造等の工場が分散し、後田及森町背後の崖錐に社寺が多く、他は住宅區か農家である。

稻荷神社・縣社津和野神社(龜井家を祀れるもの、域趾附近に在る)白絲瀧・鳴瀧等一日の淸遊に適し、殊に靑黛の靑野山等を繞らせる女性的な風光と、町行く人の言動物優しく、城下町の美風は此の山間に未だよく保存されてゐる。町に中學・高女及石見水電・石見製材等の會社がある。

六日市村　人口三〇三二人。吉賀川上流の山麓聚落をなし、海拔二九八米突なれども、縣界標高三六三米突に過ぎざれば、山口縣廣瀨を過ぎて岩國方面への絕好の通路となる。本縣背後の分水嶺に於いて最も低き峠となれるは、城將山麓の山合ひだからである。從來津和野侯東上に此の道を選びたる程なれば、吉賀地方の文化經濟はこれに依りて山陽より波及する。六日市は其の中繼的位置にありて楮・三椏・竹材・木炭等彼我相通じ密接なる關係を有する。七日市村(二二六三人)も亦此の圈內にある。日原村(四四九四人)が之等を背地とする地形的斜面にあり乍ら、物資は却つて反對斜面に奪取されてゐるが爲め、見掛ほどヒンターランドが廣くない事が領かれる。

西郷町　市街は隱岐島第一の聚落で島後西郷灣に注ぐ八尾川等に跨る。人口四八七五人。商業及漁業を職能とし、兼て金峰山・愛宕山に塞がれた天然の良港なれば、島後島民の安全なる汽船發着所であり、且水產物の中繼地である。市街は玄武岩の分脈三條突出せる間に八尾川等の沖積河谷に發達せるも

【圖解】西郷町圖 黑き部分は商業地帶

【圖解】西郷町の遠望

ので、左岸の西町最も古く中町・東町之に次ぎ、右岸の指向は最も新しく、明治十三年迄は三戸に過ぎなかつたが、同年頃から鳥取縣から漁民移住して增加したのである。

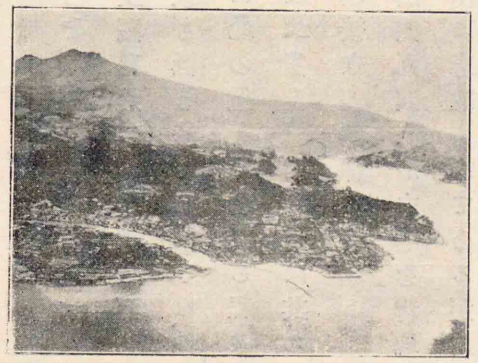
大部分漁家である事は左の職業戸數及生産額で分る。

農　産　業……二五戸……四・四萬圓
水　産　業……四四五戸……四九・五萬圓
商　業……二六六戸
工　業……九〇戸……一七・六萬圓

從而隱岐鰯の本場で、又工業は罐詰業、商業は西町及中町の通りである。汽船の發着所は中町の沖合に定められてから、その附近天神町通りが最も繁榮してゐる。其の移出入品は

移出品……鰯・木材・牛・罐詰
移入品……米・酒・雜貨

本町及附近には隱岐支廳・縣立水産商船・高女・隱岐汽船・隱岐電氣・隱岐自動車・隱岐瓦等の諸會社があり以て地方文化の中心をなす



然れども隱岐島近年の不漁と、もとゝ人口抱擁力の貧弱な此の地の事とて男は出漁に、女は下婢等に出稼ぐ者多くして、本町の如きも、大正初年に比し人口減少を來たし、これ以上發展の餘裕ない事を示してゐる。

島の特徵として血族的發展や、環境から來る民風の淳朴や、愛鄉心に富んでゐるが、生計の困難と、出稼者の爲めに漸次良風が廢れて行く。然し同姓の多い——磯村の野津姓・門脇姓・五箇村の藤田姓・東鄉村の吉田姓等——島の情調はやはり一つの地方色である。

——（終り）——

昭和三年七月七日印刷
昭和三年七月十日發行

島根縣地理

定價金九拾錢

著作者　山本熊太郎
著作者　森信美
東京市牛込區揚場町一番地
發行者　株式會社　帝國書院
代表者　增田啓策
東京市牛込區山吹町一九八番地
印刷者　櫻井專吉

著作權所有
不許複製

發行所　東京市牛込區揚場町一番地　株式會社　帝國書院
（振替口座東京六七〇一四番）
取次販賣所　島根縣松江市殿町（振替大坂五二四八四番）　今井書店
同　島根縣濱田町榮町（振替大坂四八四七番）　今井書店

（宗文社印刷所印行）

広島大学図書
2000080473
文庫
28
473